

---

# キヨクノハテ

黒瀬ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラクノハテ

### 【Nコード】

N8667H

### 【作者名】

黒瀬ハル

### 【あらすじ】

”生徒会長に刃向うと不幸になる” そんな学園伝説をある日知らされた転入生。「そんな人じゃない。私がかえてみせる。」そう心に誓い、運命を覆す。

P r o l o g u e / C a s t s (前書き)

今更ですが

Prologue / Casts

嫌な記憶を忘れられない

そんなことどうでもいいから

ただわたしのことを覚えていて

思い出の中にわたしのなにかもつめてよお願い

一緒にたくさんすごしたい

何より笑っていてほしい

わたしの友達として生きてください

ひとりの人間として生きてください

感じてみて

辛い事を乗り越えるためのなにか

探してみて

記憶の果てから

キヲクノハテ

/ / Casts

/ / 真岸 辺空 桜  
まきしん であ  
そのへ かなみ

/ / 雨宮 麗  
あまみやま びり  
かなで  
奏しぐれ

/ /  
鳩羽立雲  
しいなやしろ  
椎名八代

/ /  
新まどか  
あたし  
かすがとまき  
春日崎真夜  
まや

/ /  
雨宮啓  
あまみわたる  
あまみわたる  
あまみわたる  
あまみわたる

/ /  
春田紗優  
はるとさゆ  
はると  
春田未来  
みらい

/ /  
峰岡千景  
みねおかちかげ  
かみちか  
神近ちよ

**P r o l o g u e / C a s t s (後書き)**

あめみやなのか あまみやなのか

何かもつどつでも良いけどあまみやでお願いします

## 1 - 1 , 生徒会長

乙時雨女子学園きしぐれ

風が少しずつ、冷たくなってくる季節  
空は青白く、晴れていた。

「おはようございますっ！生徒会長っ！」

早朝。その学園の、まだ人の少ない廊下に、大きな甲高い声がつぶ。

はあはあと、かけてきたかのような、荒い息。

ショートカットの、スポーツ系の女子。

彼女は満面の笑みをうかべ、前にいる長髪の少女へ叫んだ。

そんな彼女に、まわりは冷たい視線をむける。

「誰、あいつ。生徒会長に挨拶とかどんだけ・・・」

「ほら、あれ、転入生の。印象よくするためにやってるんですよ。

かえって悪くなってるって・・・気付いてないみたいだけどさ。」

少ない人達のなかには、クスクスと笑いながら噂話をする者もいた。

少女は、何ひとつ表情をかえず、ただまっすぐに長髪の彼女をみつめていた。

「おはようございます、真岸まきし辺さん」

と、にっこりと挨拶をかえした、「生徒会長」とよばれた彼女をみて

「生徒会長の恐ろしさを知らないんだわ」

と 発言した人がいた。

そうしてその日の早朝はすぎ、時刻は朝のHR開始10分前にまで先ほどの活発な少女が、ひとり廊下をあるいていると、前方に友人の姿がみえた。

「あれ、おはよー！歌波<sup>かなみ</sup>！」

と、声をかける。

友人は強張った表情でふりむき、

その少女が声をかけたのだとわかると、ほつと胸をなでおろした。

「空桜<sup>あお</sup>ちゃん・・・ おはよつ 元気だね」

「何いつてんのっ！ あたしは常に元気100%だからねっ！！！」  
少女はただ、元気よくそういつてみせた。

と、少女が友人に笑いかけているときだった。

「ひがっ！！！」

廊下のすぐ向こうから、可愛げな、小さな叫び声が出た。  
二人は気になり探りにいく。

そこにいたのは、

「かわいいいいっ！！！」

「えっ？小学生・・・？なんでうちに違う制服の？  
でも、みたことない制服なんだけど。」

いや、まって。これ制服なの・・・？」

小学3、4年生くらいの顔立ちをした、女の子。

桃色のセーラー服が可愛らしさを引き立てている。

と、その子が立ち上がった。

「これ…… 刃流女子の制服なの…… しぐがアレンジしたの……」

「…… っっていうかあたし、小学生じゃないっ！！」

「刃流女子って、あの名門？！」

「空桜ちゃん、しってるの？」

「あたしさー、この町きたばかりでね、学校どこにしようかまよってたときにさー」

名門、刃流女子中等学院の話きいたんだってえ」

「そおだよ！しぐは天才なんだから！名門より凄いところいけたんだけどね！」

名門より凄いところ…… って？

少女は疑問に思う。

「……それで、どうして他校の人が、ここにいるの？」

「交流試合だよ！！ バド部の……」

「交流試合？生徒会長さん、交流試合はゆるしてくれるのね」

「え？生徒会長？えーゆるすとか、普通じゃないの??？」

「いや…… こんこの生徒会長は……」

その…… 恐ろしい人なんだよ、

空桜ちゃん……。」

「え??平気で挨拶してるし……、かえしてくれるじゃん……!!」

あつ！ほら!!会長じゃん……!!」

会長……!!」

例の生徒会長をみつけた空桜、真岸边空桜は、  
彼女に手をふった。

「真岸边さんに園部さん？」

しぐれと知り合いだったんですか？」

生徒会長は薄い笑みをうかべ、ゆっくりと此方に歩み寄ってきた。

ぶるっつと一瞬、歌波、園部歌波が体をふるわせた。

「うららん、こいつらがあ、しぐれのこと小学生っていったんだよ  
おー！」

しぐれと呼ばれた子、奏しぐれが報告すると、通称うららん、雨宮  
麗は黒く微笑んだ。

「う、ごめんなさい・・・！私・・・その・・・」  
「なんでさあー、うららの前になるとそーいうこといっわけ？み  
んな？」

・・・は？

状況をつかめていない様子の空桜。

「小学生にみえるくらい可愛い、ということですよ、しぐれ」  
麗が説得すると、しぐれはぱあっと明るくなった。

「なんだあー そーいうことなのかっ！！ならそーといってくれれ  
ばよかったのにー！！」

「あ・・・はい・・・ごめんなさい・・・」  
おされる歌波。自然とうなずいてしまう。

「それより・・・ HRはじまりますよ。そろそろ教室に戻ってはい  
かがですか？」

しぐれも交流試合開始まで、間もないですよ。」  
麗が薄笑いで、そういった。その瞳には歌波がうつっている。

「はい……生徒会長」

自分を見つめる麗を恐れた歌波は、  
空桜を強引に、教室へとひっぱっていった。

その後姿を、麗はくすくすと笑いながら、眺めていた。

「ねえ……結構やさしそうな人だとおもっただけど??」

教室に戻り、空桜は歌波に問う。

「何いつてるんですか……あの人がやさしいとか……  
ふるえる歌波の声。」

「なんでえ???やさしいじゃん。」

「でも……恐ろしい人なんです……。」

「なんで?????」

歌波はひとつ、大きく息を吸うと、こう……話し始めた。

この学校で生徒会長になるには、信任投票で85%以上の票を獲得  
しないとイケないの。

雨宮麗は、当時凄くまわりからの印象がよくて。

それで、生徒会長に推薦されて、投票では99%も獲得したのよ。  
不信任にいられたのはたった3人だけだった。

その3人が。

1人は交通事故で、今だ意識不明。

1人は飛び降り自殺を……、

そして最後の一人は、 . . . . 崖からの転落死 . . . .

それ以降、周囲は雨宮麗を恐れるようになったの . . . .  
今では、” 雨宮麗にはむかうと、必ず不幸が訪れる ” といわれる  
の。

「不幸 . . . . ? それ . . . . 、生徒会長がしくんだとかじゃな  
い . . . . のっ? 」

ゆらぐ瞳。

「わからない。」

半年前。

「雨宮さん、ちょっといいですか? 」

「はい? あら . . . . あなたは . . . . 、春田<sup>はると</sup>さん」

「前回、選挙管理委員長を勤めさせていただいた春田<sup>はると</sup>未来<sup>みらい</sup>です。」

「それで、僕に何の用ですか? 」

「 . . . . つい最近、うちの学校で3人の生徒が死んだとか、意識不  
明だとか、

いつてましたよね

「そうですね、たてつづけに。 恐ろしいですね」

恐ろしい、とっているのに、平然としている麗。

「あなたがやったの？」

「は？」

「あなたの信任投票。不信任にいったの、何人だか知ってます？」

「何いつてるんですか？知っているはずないでしょう？選挙管理委員長さん？」

「そうです。。。3人なんです。たった3人。」

「その3人が。。。そう、例の3人なんですよ。」

「え？例の3人で。。。」  
言葉のわりには、ちつとも驚いていない。

この人は感情を滅多に顔にださず、常に薄笑いを浮かべている人なのだ。

いわゆる。。。ポーカーフェイス。

そう、未来は認識していた。

「動機があるのよ、あなたには。」

未来もまた、かたい表情で麗をせめる。

「だから？それで、僕がやったということになるのですか？」

それは、おもしろい。そんな風を感じ取られる、麗の薄笑い。

「疑っているわけではないのよ、でもね」

未来は何かをごまかしたかのように、一瞬だけ視線をそらした。

「証拠があるならどうぞもってきてください。」

もってこれないというのなら。。。失礼させていただきますが。

」

「……………証拠

絶対……………みつけてやる……………

私の親友墮として……………あんただけは……………ゆるさないっ

！！！」

相変わらずにここにしている麗を一度にらみつけ、未来は走り去っていった。

「それで、その春田って人は今どうなの？」

「……………」

空桜に問われ、だまりこむ歌波<sup>かなみ</sup>

「まさか……………」

空桜がおそろおそろの言葉を発すると、歌波は哀しそうにつなずいた。

「そう……………彼女も……………また、雨宮麗にはむかつた……………」

そういう設定になっていたわ。」

「何故……………そんな人じゃないっつ！！！」

生徒会長はもつとやさしい人なんだっ！！！！！

そんな恐れるべき人なんかじゃ……………ないよっ！！！！！」

歌波は、今に泣き出しそうだった。

1 - 1 , 生徒会長 (後書き)

真岸<sup>まきしへ</sup>辺<sup>あ</sup> 空<sup>あ</sup>桜<sup>お</sup>

A o M a k i s h i b e

主人公。 スポーツ系。

思いつきで行動するタイプ。

2週間前に乙時雨に入ってきたばかり。

## 1 - 2 , かつての自分

彼女が廊下を歩くと、 周りは皆、恐れて教室へと逃げ込んでいく。

ほら、一人をのぞいては。

「うららんっ！交流試合終わったよおおお！」  
バタバタとかけてくるのは、しぐれ。

はあはあと息をきらし、目を大きくして麗を見上げる。  
20cmの身長差。

「おつかれさまです」

微笑む麗。

「それでねっ！！刃流がかったんだよっ！！」

「そうですか おめでとう御座います」

それをきいて、しぐれは首をかしげた。

「なんでえ、うららんの此処、まけたんだよあ？」

控えめにいうしぐれに、麗はにこっと笑いかけた。

「.....?」

きよとん、としているしぐれのほどれかけた制服のリボンを、

麗は無言で結びなおした。 薄い..... 笑みをうかべながら。

しぐれにはそれが気味悪かったらしい。

「ひっ」と声をあげ、一歩後退り。

そのせいで、逆にほどけてしまった黄色いリボン。

反動で床に落ちたそれを、麗は拾い、しぐれに差し出す。

「どうしたのです？」

「ごめん.....」

しぐれが渡されたりボンを受け取ると、麗は何もいわずに去っていった。

「うづららん……?」

麗はただ一人、歩いていった。

……

「春田未来がしんだってきいた?」

「え?!あの……優秀な選挙管理委員長って人?」

「そう 自殺したとか…… っていう噂なんだけど……」

「選挙管理委員ってことは、……もしかしてまた生徒会長関係?」

「かも……しれないよね……。」

陰からそんなことをきいて、ただ呆然と立ち尽くしていた、半年前。  
そんな・・・ かつての自分に見えた。 先ほどの、 しぐれが。

ポーカーフェイス？

本当は・・・ 違っ たんです・・・ よ・・・。

両方の手の平を前にだすと、彼女は何か・・・ 恐怖を感じた。

1 - 2 , かつての自分(後書き)

雨宮 麗

U r a r a A m a m i y a

乙時雨中生徒会長。  
ポーカーフェイス。

1 - 3 , 空の下

もしも・・・この空が・・・

両手を大きく、空へのばす。

「のどかなあ・・・、此処は」

学園の中庭、芝生で寝転がっているしぐれ。  
雲ひとつない晴天。

「もう少しそばに・・・いてほしいのに」  
ぼそっとつぶやく。  
周りに人はいない。

交流試合のためにきた刃流の人たちはもう、しぐれ以外皆戻っている。

昼休みがあげれば、通常授業となるのだ。

だが・・・彼女に、戻る気なんてなかった。

母が刃流の理事長である限り・・・さぼりで怒られることなんてないのだろう。

「今日はこれで終わりだと思ってました」とでもいえば、

それで良いのだ。いくら眉間にしわをよせようが、しぐれには逆らえぬ。

・・・麗のことばかり考えている。

麗とは同じ小学校出身である。

彼女は小学生のころから、常に敬語で話していた。一人称は僕。だが、逆にそれが麗の評判をよくした。

陰の薄かったしぐれとは対照的に、麗は人気だった。

その頃の麗の笑みは・・・今とは違い、楽しげだった。

先ほどの瞳・・・似合わない。

あんな哀しげな表情は、似合わない。

屋上を見上げる。

嗚呼、この新鮮な空気・・・  
心地よい風。ずっと・・・ここにいたい。

彼女は屋上で空を眺めていた。  
手を伸ばす。

つかめない。

どれだけ手をのばしても、雲までとどかない。

風は…… 私を雲のようににはこんではくれないのか……。

彼女はすつとたちあがり、フェンスに手をかける。

ここから飛び降りたら死ねるだろうか。

この孤独から開放されるのだろうか。

彼女は決意した。

フェンスをぎゅつとにぎり、足をかける。

はばたくんだ、これから。

「今からそこへいくよ、お姉ちゃん。

ふふっ…… そうだね…… お前の望みどおりさ、雨宮麗……

……」

彼女の哀しげな瞳がゆらいだそのとき

「ふざけないで……」

ふと、誰かに腕をつかまれた。

バランスをくずし、地面へとたたきつけられる。

「あなたは…… あんたは間違ってるよ…… しぬなんて……」

見たことのない子だった。

「誰だよ…… お前さ」

「私は空桜。 春田さん……。 あなた間違ってる。」

お姉さんは…… 自分の分まであなたにいきいてほしいはず

だよっつ」  
精一杯な空桜。

「うざいよっ！！！ なんだよ！！私のこと知らないでしょう？  
だって私あんたのこと知らないし。あんたにとめられる筋合いない  
から！！！」

叫ぶ、春田。

運動場にいた数人が、なんだいまの？というように屋上のほうを見  
あげる。

そして、幻聴か？と、部活に戻った。

「知らない。そうだよ？あたしはただの通りすがり。

でも・・・あんたみたいな人がいるから・・・ いるから、

あんな優しい生徒会長がっつ」

「やさしい？ふざけんなっ！！！！！！」

春田はそこで大きく息を吸う。そして

「姉ちゃんは・・・ 自殺なんかじゃないんだ・・・

あいつにころされたんだ！！！！！！！！」

学校いっばいに響くような大きな怒声をあげた。

唇をかみしめる空桜。

うつむいてしまう。

そんな二人の会話を、  
階段裏できいている人物がいた。

彼女もまたうつむいている。  
今に泣き出しそうな顔をしている。

こんなに・・・のどかなのに。

可哀想だ。

あんな会話・・・。

違う、春田じゃない・・・自分が可哀想なんだ。

もう、追憶なんてしないときめたのに。

もう・・・ 思い出さないと、ちかったのに。

「あいつは・・・ 雨宮麗は・・・」

「やめようよ、もうやめよーよ！」

「だからうざいって！あんた何もしらなくせに！」

「知らないよ！あたし最近はいってきばっかりだし、話きいただけだから。」

「知らない！でも、しぬのはおかしいとおもうー！」

そう・・・

死ぬのはおかしい・・・。

だから自分は生きている。

此処で盗み聞きしている自分も情けないが・・・  
もうそんなこといわないで・・・。

「やめろっ・・・」

未来・・・お姉ちゃんは・・・未来だけを・・・

前だけをみてたのに・・・なんで・・・なんで・・・

っわあああああっ

「・・・」

お願い、もうやめて・・・。

「・・・・・・・・だれだよっ！！！！そっできーてんの！！！！」

・・・え。気付かれ・・・た？

驚いてふりかえる空桜。

誰の姿もみあたらない。

「わかってるんだよ！！そこできいてんの！！かくれてきいてんの！！！！」

私のこと笑ってるんでしょどうせ！！お姉ちゃんのことわらってるんでしょ？！」

階段の方にむかって叫ぶ春田。

そこらの木にとまっていた鳥たちがその大声に驚いて、慌ててとびたつてゆく。

「だれか・・・いるわけ？」

空桜もよくわからぬまま、便乗してそういつてみた。

すると、

「笑ってなんか・・・いません・・・よ」

そちらから声がした。

この声・・・。

姿を見る前に、二人ともその正体を察知した。

顔を青ざめる春田、そして肩がふるえだす空桜。

カタツと、たちあがったような音がした。

「盗み聞きするつもりはなかったのですが・・・その  
やはり麗だ。

階段裏からでて、歩み寄ってくる彼女にいつもの薄笑いはなかった。

「僕のことは恨んでいてくれて結構です　ただ

そんなはやく御姉様のところへいかれると彼女が悲しみます」

「・・・っ！！」

言い返す言葉が見つからないのだろうか。

怒りを抑えている様子の春田。

「どうか彼女の分まで生きていてあげてください」

「・・・失礼させていただきますね」

「まてよ」

麗が立ち去ろうとしたとき、春田はやつと口をひらいた。驚いて春田の顔を伺う空桜。

空桜は決して・・・麗を嫌っているわけではないのだ。

むしろ、麗の敵である春田の方が苦手なのだ。

呼び止められて、無表情でふりかえる麗。

「恨んでいてくれて結構です？何それ・・・」

なんだよ・・・。やっぱお前がころしたのかよっ！！

姉ちゃん陥れたのかよっ！！！！」

麗はひとつためいきをつき、

「違いますよ・・・決して」

とだけいつて階段を下りていった。

その後その屋上には沈黙だけが残った。

ひとつ舌打ちをし、黙って立ち去る春田なんか気にせず、

空桜は運動場の方を眺めていた。

やっぱりつらいんだ。

会長だつてつらいんだ。

あたしは何もしらない。でもあたしは会長を信じたい。

だからあたしはゆるさない。

春田未来の妹にあたるあの人を、あたしはゆるしたくない。

会長のせいにして自害しようとするなんて、ひどすぎる。

会長は何も悪くない。

そんなことばかりを考えていた。

1 - 3 , 空の下 (後書き)

奏 しぐれ

Shigure kanade

刃流に通う世間知らずのお嬢様。  
幼稚 / 童顔。

1 - 4 , 兄

麗は生徒会室へと向かっていた。  
屋上で寛いでいるつもりだったのに。  
他にいくところもなく、仕方なく。

ドアのぶに手をのばし、扉をひくと中に寛いだ青年の姿があった。  
麗は一瞬かたまるもすぐに冷静さを取り戻し、  
中へはいつていつもはかけていない鍵に手をやった。

そして此方を薄笑いで見上げている青年の向かい側の椅子に座り、  
机を両手でたたく。

「何の用ですか」  
目をじっとみて尋ねる麗。

青年は憫笑して、  
「お前まだ此処にいたんだな？ もう半年くらい・・・か？」  
と麗にかえした。

麗は一度あきれたような顔をし、そして目を瞑る。

「僕は生徒会長なんですよ」

「やりたくてやってんのか？」

まるで、目の前の人物を見たくないかのように目を閉じている麗を  
真剣にみつめる青年。

「当たり前です」

「そっか」

またも憫笑する。

「それで何故此処へ？今日は授業参観日でもなんでもありません」  
目をあげ、麗は感情のない声で言葉を発す。

「お前にあいにくきたんだろ？家にもかえってこないし」  
「一人暮らしのあなたは何をいう 本格的な仕事だつてはじめたよ  
うですし」

今更あいにこられる理由がわかりません」  
今度は麗が、青年を真剣に見詰め返す。

「お前・・・ そんな俺のこと嫌いか？」  
「兄を好きになる理由なんてありません」  
「・・・・・・・・まあそうなんだろうな」

青年はひとつため息を漏らし、無表情の麗を哀れんだ瞳にうつす。  
麗は表情ひとつかえず、真直ぐ年の離れた兄の姿を見つめている。  
瞳が微かに揺らぐ。

ドアにかけられた鍵の方へと目をやる青年。

「何で鍵かけたんだ？」

「此処は女子校ですよ 見つかったら騒がれます」  
それをきいて青年はからかうように

「えろいな 麗」  
と頬杖をついて微笑する。

麗が少しでも怒りの感情を抱いてくれるかとも思ってたのだ  
ろうが

とくに反応されず、逆に沈黙が流れた。

「<sup>わ</sup>渉もお前のご気にかけてたぞ？」

電話するたびに ” 姉ちゃんまだかえってこないんだけどー ”  
ってね

” 兄ちゃんもいつになつたらかえってくるのさー ” とは？

「……………」

雰囲気をかえようと話を持ちかけようとして負ける兄。

その後の沈黙も、しばらく続いた。

それをうちきつたのは、ドアをノックする音だった。

「生徒会長ー？いますか……………??」

甲高い声が麗をよんでいる。

麗はハツとなり、青年を睨む。

「隠れてください 今すぐどこかに」

無理やり掃除用具入れの中にはいろつとしている青年を余所目に、麗は鍵をあけた。

ドアをあけたさきにはいたのは、二人の少女だった。

一人はもう片方の後ろで震えている。

「真岸辺さんに園部さん……………」

「話、きかせてください!」

「……………はい?」

「あたし……………会長の味方になりたくて……………、だって会長何もやってないでしょ?」

だから……………その……………教えてほしいの!あたしなにも知らないから……………」

でも信じたいから!」

麗は必死な彼女を薄笑いで見つめていた。

「ごめんなさい…………… お引取り願えますか」

「え……………」

薄笑いを憫笑にかえ、黙ってドアを閉めようとする麗。

「あなたは!!!!!!それでいいわけ???!!いいの?!!!!!!」

叫ぶ彼女を無視し、  
ドアはそのまま閉められた。

「本当にいいのかよ、それで」  
ドアの鍵がかかると同時に開く掃除用具入れ。

麗はうつむいていた。

1 - 5 , 孤独なお嬢様

「駄目だったね・・・」

空桜は生徒会室から追い返され、近くにある中庭で、空をながめていた。

「もうやめようよ、空桜ちゃん。あんな人信じるのやめようよ」  
歌波は相変わらずうつむいている。声が多少ふるえている。

その弱弱しい格好をみて、空桜は怒りをひろった。

「は？何いつてんの？歌波なにいつてんの？？」

会長別に何も悪くないしやさしい人じゃん！なんで信じちゃだめなの？」

ただ、おもいをぶつけたただだった。叫んでみただけだった。

「だって・・・ だって私たち、もしそれで失敗して不幸な目にあつたらどうするの？」

歌波は恐れている。麗の存在を恐れている。

空桜は一瞬目を大きく開き、そしてつらせる。

「・・・ おこらないよ。自分を信じた人を不幸にするはずない！！！！！！」

叫んだ。

信じたい、その気持ちを叫んだ。

大きく強く、ぶちあげた。

歌波の震えがとまる。

・・・何だ・・・あれは・・・



固まるしぐれ。

「なんで・・・なんで戸惑ってるの?!友達なんじゃないの?!」

「友達・・・?」

”友達” その言葉が脳内を廻る。

「ちがう?の?」

うざいよねー、社長令嬢で?しかも理事長の娘?何でもできるんだろ、うぜえ

友達ってのはさ?もっとうちらみたいないな庶民がつくるべきもので?

あなたには必要ないだろうとせ。オヒメさま。

ていうか隣町と名前が似てるってところもなんかムカツイタよーわろすー。

あーもういつそのこと消えてくんないかな。

「うららは・・・の・・・しぐの・・・友達・・・なの?」  
声がふるえている。

「違うはずないでしょ?!」  
普通にいったその言葉。それがしぐれの胸に響いた。  
今に泣きそうな顔をしている。

歌波も少し・・・どうようしているようである。

空桜の目は純粹に輝いていた。

夕暮れの紅い光をあびて、茶色くそまっていた。

真直ぐと、前をみていた。

しぐれにはそれが羨ましかった。  
前を向いて歩いていける彼女が。  
今までうざいといわれ続け、それにすっかり慣れてしまった自分。  
そんな自分が情けなく感じてくる。自分にも……友達か？  
彼女は自分を、友達……と？  
わからない。  
でも、この人だけは……。

「友達が……ほしかったんでしょ？」

ほしかった。

そう、ほしかった。

でも……無理だと思い、あきらめていた。

「ほーらー……！あたしも友達になってあげるから……！ね？  
会長も友達なんでしょ？」

友達になってくれる。

その言葉が嬉しい。今までのなにより、嬉しかった。

裕福すぎる家に生まれ育ち、家においても退屈、外へでて相手にし  
てくれる人が数少なく

ずっと一人……さみしかった、孤独なお嬢様。

でももう違うんだ。

嬉しすぎる言葉をもたらった。

「うんっ！……！」

元気よく、しぐれは応えた。

1 - 5 , 孤独なお嬢様（後書き）

園部 歌波

S o n o b e K a n a m i

空桜の乙時雨中での初めての友達。  
比較的内気。

2 - 1 , しぐれの友達 (前書き)

12 / 5

しぐれと麗の出会いエピソードが矛盾していたので書き換えました。

## 2 - 1 , しぐれの友達

気持ちの良い朝だった。

彼女にとっては、とても・・・とても気持ちの良い朝だった。

「もう11月かー。文化祭ももう何週間後だし〜。はやいなあ〜」  
そんな会話が耳にはいつてくる。

そう、彼女のかよっている刃流学院では、いまが文化祭シーズン。

面倒臭いよなあー。乙時雨は二月なのにいー。

・・・参加しなくていいよねえ・・・別に・・・。

やる気なさげに、彼女は廊下を歩く。

声をかけてくれるような人はいない。

だが、こちらをみてくすくすと笑う者は在る。

別に、いい。もう友達できたから、こんなところで笑われたり  
してても、いいもん。

今度は逆に彼女が微笑した。

窓の外をみる。

向こうの方にみえる、高等学校。

うららんと・・・、空桜ちゃん・・・でも。

目線を上にずらす。

青白い空がみえる。

うららんのお兄ちゃん・・・かつこよかったっけ・・・会いたい  
な・・・

彼女の頬は赤く染まっていた。

キンコーン カンコーン . . . .

やってきた昼休みはいつもどおり、暇なものだった。

とくにしたいこともなく、中庭で草をちぎって遊んでいた。

「可哀想」

ふと、うしろで声がした。

振り向くと、二人の少女がたっていた。

見覚えの . . . あるような、ないような。

一人は嫌そうな表情をしている。

「奏さん 小学校のクラブ活動で、吹部のクラやってたそうですね？」

無表情で問うもうひとり。

「はあ？」

いきなりきかれても、わけがわからない。

クラを担当していたのは事実なのだが。

「文化祭で吹部の発表があるのですが 急に人手がたりなくなってしまうって・・・」

奏さんなら ふけるとおもって」

感情のこもってない声、麗を想像してしまう。

いや・・・ この人はちがう。なんだかすこし、違う。

「・・・代理にやれと？」

「そうです 無理なら良いのですが？」

真剣さもなにもないのに、強引に誘っている感じのその言葉。

断ろうと思った。 だが。

「あのさ、嫌ならはつきりことわりなよ。」

後ろで眉間にしわを寄せている子が口を開いた。

その発言がうざったかったから。

「じゃあやりますよ！」

そういつたら、舌打ちされた。

「なんなの？あんたがしく嫌なわけえ？ならいいよ??」

「いや、困ります」

「りっちゃんー いーじゃんそんなやつじゃなくてもさー ほかに

代理とかいるって」

「ここまでついてきておいて、 今更なに？」

「だってりっちゃんさ、こいつだっていってなかったし。

こんななんだったとか・・・さあ」

やはり最終的にはしぐれの悪口になってしまう。

「なら かえって？」

「・・・あ、そう！趣味悪いことくらい自覚しておきなよ！じゃあね！」

しぐれを無視して、別の話をする二人だったが、舌打ちをしたほうは、つれない表情でそのまま去っていった。もう一方……、は 相変わらず無表情である。

この人…… やっぱうららんに近い存在…… なのかなあ???

「奏さん 代理できてくれるんですよね」

「はあ……」

反論のためにやるとはいつてみたものの、本当はやる気なんて全然ない。

できればそんな面倒くさい打ち合わせのはなしはしたくない。

だが今更断るわけにもいかないような気がした。

相手が…… 麗に近い…… そんな人に思えたから。

「あ…… しぐれで…… いい」

とりあえず話題をそらしてみる。

「私は立雲りじもといいます

奏さんバド部だから、吹部にうつれとはいいませんけど……

その、そちらがわの部長にも相談しておかないといけませんよね?」

ああ、面倒くさい話だ。

でも、本当に似てる。あの時のうららんに、にてる。

それは・・・ まだ小学生だったころ。

入るクラブがなく悩んでいた自分に、彼女は声をかけてくれた。

「吹奏楽部に、どうですか？」

「え？」

突然声をかけてきたその人は、全然知らない上級生。

「あの、あ、あたしい、運動部に・・・」

「あ、そうなんですか すいません」

彼女は残念そうな表情をする。

それを気にしてしまうしぐれ、

「で、でもっ 音楽も好きだし・・・ その、どんなことするんですか？」

とりあえずきいてみようと思った。

とりあえずだった。 だが・・・、

「自由気ままに吹いて奏でて楽しめます」

「吹奏楽・・・」

上手かった。ユニークなこたえ。

よく意味がわからないけれど、なんだかひきつけられるような、そんな気がして。

「入ります・・・ 入りたい。」

それは正気だった。

しぐれのこたえをきいて、彼女はにっこりと微笑んだ。

・・・可愛い。

「あの、何でしぐに・・・？」

「さあ、何ででしょう？ にしても素敵なお名前ですよ、奏さん  
て」

「え？・・・あのもしかして、苗字みてきめたんじゃ・・・」

「違いますよ？名前でひとは決めませんよ、流石に。」

あ、そうそう。自己紹介まだでしたよね。

僕は麗と申します。どうぞよろしく。」

「よ、ろしくです！！」

緊張しかしていなかった。

年上なのに、敬語？堅苦しくて、なんだかよくわからなくて。  
でも彼女はとても、魅力的な人だったから。

そして時はすぎ、今年の・・・そう、四月。  
部活見学をしていた頃だった。

「奏ちゃんはバド部はいつてくれるんだよね？」

吹奏樂をつづけようと考えていたのだろうが、

入学式でやさしくしてもらった先輩に勧誘され、断れずにいた。

「五月はじめに、乙時雨との交流試合があつてさ、

向こうの部長とはなしにいかなきゃならんのよー。奏ちゃんつい

てきてくんない？」

「今から？」

「うん そりゃ。」

「……」

断れなかった。

自分が理事長の娘であることは学校中の誰もが知っていた。だが彼女はそんなことはまったくお構いなく、やさしく接してくれた。

当時は”友達”なのだとおもっていた。しかし違った。

単に部に勧誘したいがためにそうしていただけだったのだ。

そのとき彼女は先輩をしんじすぎないようにしようと決めた。

それに、乙時雨には……憧れの人がいる。

ついていった乙時雨。

先輩はいつていたとおり向こう側の部長と交渉している。

それゆえに自分は暇人であった。

仕方なく校内を放浪してみることにした。

もしかしたら、会えるかもしれない。

ふと……”生徒会室”の表札がみえ、足をとめてみる。

生徒会？ この学校の運営は生徒会なの？

考えていると、扉があいた。

ドアのぶを握っている美形な彼女。ツインテールがよく似合っていて可愛らしい。

それはしぐれのよく知っている人、そして探していた人だった。

「う、麗先輩?!」

彼女はすっと微笑み、

「どつぞ?」

と手招きをした。

入ってみることにした。

中はなかなかひろく、和やかな空間だった。

ソファーに腰をおろすと、二つ結びの彼女が口をひらいた。

「何、してたんですか？」

「あ……暇だったからあ……」

久しぶりに会った憧れの人は、とてつもなくイメージチェンジしていた。

「そうですか どうでしょう？この学校は」

予想外だった。

優しい瞳。ただ、前髪でかくれていて右眼しか見えない。

「良い……学校ですね」

かえす言葉が思い浮かばない。

前とはまったく別人のよう。

「ありがとうございます。その制服は刃流ですね、しぐれ」

「！」

名前覚えててくれてたっ……

同じ人……なんだよね。嬉しい……。

「そう、刃流。あの……麗先輩……、どうして生徒会室

に

「此処の生徒会長をつとめさせていただいているからです」

「生徒会長……」

うつむくしぐれ。

「何か……お悩みですか？」

感情のこもっていない声で、そう問われた。

「えっ?! えっと……その……部活見学で……」

「ああ、バド部の交流試合？」

「そう・・・だけどお・・・、吹部も続けたくてえ・・・」  
顔をあげると、麗は窓のそばで外を眺めていた。

「・・・・・・・・・・」

沈黙が流れる。

ふと、麗がふりむいた。

「誘われたから、とはではなく・・・ 本当に自分がやりたいほう  
を選べば良いと思いますが」

「え・・・ ああ・・・うん」

「あなたの部活を決める権利があるのはあなた自身だけですから  
吹奏楽部でもバドミントン部でも・・・ 好きな方選べば良い  
のです」

ただ、勧誘していただいてる方とも相談しておいた方が良いと思  
いますかね？」

「はい・・・・・・・・」

・・・・・・・・

結局入ったのはバドだった。

バド部なら、交流試合でまたこの学校へこれる。

またあの先輩に、あえる。

そんな理由で私はあの勧誘を承諾した。

だから・・・ また会えた彼女と仲良くなれたことが嬉しかった。  
”友達”として認めてもらえたことが嬉しかった。

そしてこの人も、そんな彼女に似ている。

だから・・・ 多少、めんどつくさくても。

「部長と顧問にいつてきますねえ」

「有難う御座います」

勇気をくれた。空桜ちゃんと、そしてうららんが勇気をくれた。  
だから・・・ いまなら、”友達”をつくれるような気がした。

2 - 1 , しぐれの友達 (後書き)

鳩羽 立雲

R i t s u m o H a t o b a

刃流中吹奏楽部部长。

## 2 - 2 , 吹部の部長

「じゃあね、私は、吹奏楽部があるから。」  
午後、部活の時間。

「ん・・・？　そういえば、空桜ちゃん部活はもうはいってたっけ？」  
「え？　まだまだよ・・・　今日見学いくんだけどね」  
転入生である空桜はまだ、どこへも正式入部をしていない。

「どこへ？」

できれば同じ部に勧誘したい、というような光った目つきで空桜をみる歌波。

「え・・・　決めてないっ・・・！」  
軽くいわれてしまい、しょんぼり。

だが、何故か空桜は音楽室へむかう歌波について歩いている。  
ちらちらと、空桜をみては首をかしげたり、肩をすくめたりする不思議な歌波。

空桜は気にせず廊下を進んでいる。

まもなく、音楽室がみえた。

ドアの前に、しぐれと似た服装の三年生くらいの女子がたっている。  
おそらく彼女は刃流の生徒なのだろう。

うわぁ・・・　美人・・・

歌波は頬を赤く染める。

「誰、あの人??」

空桜もまた、彼女に興味があるようだ。

二人が彼女をみつめていると、音楽室の扉がひらいた。

中からでてきた揺る結びの、

「あ、部長！」

二人は目があうと部長はすっと微笑み、握手をした。

「あら、園部さん」

その直後、部長は此方に気が付いた。

隣の美少女も此方をむく。

空桜の頬も桃にそまった。

「此方、刃流吹部の部長さんよ」

此方の部長の紹介で、あちらがわがぺこりとお辞儀をする。

だが……先ほどから彼女は無表情。

「よよよ、よろしくです！」

歌波はそう、緊張している。

「そうそう、鳩羽さんよね。お手紙頂いたのだけれど……」

このお名前、なんとよむのかしら。」

向こう側の話にもどる。

ぽーっとみつめている。

「りつもとよみます」

「へえ、鳩羽立雲さんか。良い名前ね」

「有難う御座います」

ふと、部長が立雲の顔を覗き込んだ。

赤面する立雲。

「あなた……恋、してるでしょう？」

「え？」

はじめてみた。立雲のこんな目を丸くした表情。

かなり、驚いているらしい。

凶星なのだろうか。

「鈍感なのよ、あなた。 恋愛していて、まわりがみえなくなっちゃってる……」

「ってところかしら？」

「あの……」

「いいわね、彼氏とかいるんでしょう？」

「……」

吹部の部長って……凄い。 あんな人だったんだ。

圧倒している。

一瞬、立雲を麗と似ているとおもった自分はなんだったのだろうか？  
空桜は二人をみて考えた。

楽器なんてとくに興味もなかったけれど、

吹奏楽部にはいつてみるのも悪くない、空桜はそうおもった。

2 - 3 、 立雲と八代（前書き）

1 2 / 5 会話を少し変更。

4 / 2 5 恥ずかしい間違いをしていたようです、修正

## 2 - 3 , 立雲と八代

夕暮れのまちを、立雲は歩いていった。  
冷たい風が、彼女の短い髪をそつとなでる。

ふと、耳元にコツ、コツと、足音がひびきだした。  
自分の近くによってくる、音の主など大体わかる。

「部活がえり？」

立雲は振り返りもせず、歩きながらそういった。

「じゃなかったらこんな時間に此処歩いてないよ」  
後ろの影もまた、歩調を変えずに応えてくる。

ききなれた、優しい男の声。

彼はとなりの男子校の、私の大切な人。

「そういうと思ったわ。でも・・・何か用があるんでしょう？」

「まあ なくはない」

この会話に、感情がこもることはまだない。

「それで、何？」

立雲は一度、足をとめた。

後ろは少し驚いたような表情をしてから便乗した。

「まだ あの高校目指しているのか？」

立雲はふっ と微笑む。

「何、いきなり・・・」

あきらめるはずないでしょう？例え未来が・・・

未来がいなくなってしまうとしても、私は目指してるわ  
あなたもそうでしょう？」

「まあ」

素っ気無い返事をかわされる。

「久しぶりだけど、素直じゃないのは変わってないのね」

「人間だからかな」

立雲は微笑を浮かべて歩き出す。

「ねえ、八代

私は今まで恐れていたの」

立雲は小さく呟いた。

「乙時雨の生徒会長か？」

「そう・・・あの不幸なめにあう、つていう噂は

未来があんなことになるまえまではなかった」

微笑が憫笑にかわっていく。

「私はあの事実を受け入れられなかった

だから刃流にうつった でも」

しばらく間をおいたのち、立雲は振り返った。

「誰かが、私が雨宮さんと似ているといった」

八代と呼ばれた彼は、無表情だった。

「そうなのかな・・・ 私は雨宮さんと似ていますか？」

そう考えたら・・・ 彼女はそんな恐ろしい人でもないって、わかつたんだ」

立雲は前を向きなおす。無表情で、八代はきいている。

「だから吹部を使つて、乙時雨にいった。

なぜか三年がいなくて・・・ 私が行き成り部長、みたいなことになったから

生徒会長さんとも会えるのになつて思った」

「それで」

人が話している時は普段、興味無さそうにきいている八代が珍しく、話をうながした。

「でも勇気がなくて、向こう側の吹部の部長さんにあっってお終い  
・  
何度いっても。

私は一度だけ、雨宮さんの姿をみたことがある。

ツインテールをしているのに腰まであるって、長い髪よね  
前は膝まであったって噂できいたけれど」

「随分と幼い髪型なんだな」  
感情のこもっていない会話。

八代は橙の空を眺めているし、立雲は足元をみている。

「話してみたいのに、言葉がみつからない。

そっか、私達もそうだったね。

私と八代と未来たちと初めて一緒にでかけたときも、そうだった  
ね。」

「あの二人にはとくに興味もなかったからな」

「未来はね、完璧だったよね。学級委員としても、

・・・選挙管理委員長としても。

私は憧れていたよ。恋愛だって欠かしていなかったし、両立で  
しよ。」

「君は？」

思いがけない応えに、一瞬戸惑った。

「恋愛に部活・・・もう大変だよ、八代」

が、立雲は愛らしい笑みを浮かべて振り返った。

「私にはとても厳しくて、もう無理そう。

文化祭での発表は人数不足で違う部の子雇うはめになるし、  
どこかの誰かさんも全然連絡くれなかったし。」

「どっちが無理なんだ？」

どうしてこの人はそう、冷静というか、なんというか。人の話、自分に関係あるところしか聞いていないし。思わずため息をもらしてしまう立雲。

「私はたとえ、あなたの方からこの関係をたとうといわれたとしても断りますから、ね。」

立雲が再び笑いかけると、今度は八代も微笑み返した。  
「いわないよ」

・・・

立雲を家までおくりとどけた後、八代はある人物を見かけた。かよっている中学の卒業生、つまり先輩。

立雲は例の生徒会長と話してみたいといっていた。恐れていた、とも。

だが自分には大して関係のない話だ。

春田未来を友達と思ったことなんてなかった。むしろ、気にしたことすらない。

彼女がいなくなったとき、立雲たちは悲しんでいた。自分だけが平然としていたらしい。

そんな八代に、声をかけた人がいた。

兩宮啓とその人は名乗った。

麗の兄にあたる人物　　・・・

「お、八代じゃないか　デートの帰りか？」

向こうも此方に気付いたようだ。

大きく手をふってくる。

「制服でデートなんてしませんよ」

無表情で応えると、啓は憫笑を浮かべる。

「そういうと思った。本当よくわからねーな、中学生って」

「妹さんとうまくいってないんですね」

ズバツといわれ、啓の顔に凶星という文字が浮かび上がる。

「本当シスコンですね　そんなだから彼女できないんですよ」

くそっ　変わっちゃいねえぜ、こいつ

八代を見ていると、ニヤニヤと憎まれ口をたたかれるより、

無表情でさりげなくいわれる皮肉のほうがいதாகじてくる。

「そうだな、シスコンだな・・・　うん、そうだよな・・・」

「あなたみたいな外れた大人にならなければ良いですね」

「そうだな・・・　って、八代っ！」

叫んだときにはすでに、八代の姿は消えていた。

「あんの皮肉屋ああっ！」

外れた大人は、街中で怒声をあげた。

2 - 3 , 立雲と八代（後書き）

椎名 八代

Y a s h i r o S h i n a

立雲の彼氏。

立雲、啓曰く「無神経で皮肉屋」だが、意外ともてる。

2 - 4 , 夜12時(前書き)

1 2 / 5 全体的に、麗の瞳色/髪色変更。

2 - 4 , 夜 1 2 時

静かな夜だった。

十一月にないている虫・・・、何の鳴き声だろう？

しぐれは自室の天井を眺めていた。

広い部屋、大きなベッド。

困ることなど何も無い。

なのに・・・。胸がとてつもなく痛かった。

眠たい。

でも、何故か寝れない。

未だ、麗のことばかりを考えているわけでもない。

麗の兄に赤面している・・・それも違う。

なんだろう。

吹奏楽部の部長のことだろうか。

あの、少し無表情で、でも本当は優しくそうな、そんな人。

私は今度、久しぶりにクラを吹ける。

しぐれはベッドから起き上がると、少し歩いてクローゼットをひらいた。

ほこりをかぶった楽器ケース。

中には愛用していた懐かしきクラリネット。

微笑を浮かべる。

久しぶりにそれをくみたててみる。

完成したその楽器を口元にあてる。

そのままふこうとしたが、12時をさす時計の針がめにはいり、や

めた。

指だけを動かす。

この曲は、はじめに教えてもらった、かえるの歌。  
そしてこれは聖者の行進。

楽しい。

時間がたつのを忘れてしまう。

しばらく戯れてから、やっと我にかえた。

ときは丑の刻。

さみしげな表情で、しぐれは眠りについた。

・・・

とくに音もなかった。

家にかえる気なんてしない。  
うるさい弟が夜遅くまで独りテレビをみているのだろう、あそこは  
流石にご免だ。

それでもって、シスコンすぎる兄のもとへなんて、なおさらいきたくない。

だから……。

ひとり、生徒会室で寝ていた。

夜くらい、鍵はかける。

こんな時間に合鍵ではいつてくる職員もいないだろう。

腕時計の針が、12時をさす。

だが、瞼はちつとも重くなかった。

逆にかかるすぎる。寝れない。

だが、やりたいこともない。

ふと、カタツ と音がした。

棚の何かが床へ落ちたようだ。

其方を向く。

鏡？

まったく見覚えのない手鏡。

誰かがおいていったのだろうか。

つい先日、此処へきた兄か……

いや、あの人は男だ。

手鏡なんて持ち歩かないだろう。  
だとしたら？

覗き込んだ鏡に、己の姿がみえた。  
整った顔立ちに、暗闇に光る漆黒の右眼。  
左は長い前髪に隠されている。  
そつと、その髪をなでる。

そしてそれを更に左へとよせる。  
久しぶりに、自らの左の瞳をみた。

オッドアイ  
虹彩異色症……。

その左眼は、優美な薔薇の赤に染まっていた。

……

そうなんだ、私は恋をしている。だから、鈍感とかいわれるんだ。  
でも……片思いではないはずなんだ。

立雲は、ぼーっと窓の外を見つめていた。  
星を数えてすごす、夜12時。

だって私は、私は無神経なあの人、八代のこと好きなんだよ。  
それで八代だって、私のこと・・・。

立雲は輝く星を眺めていた。

だが、実際みえているものは星ではない。  
想像、いや妄想の中の、八代の姿。

吹奏楽部の発表って、本当にいそがしい。

そう、私は未来みたいにくまくはいかない。

奏さんにも迷惑かかってるんだろうし・・・、八代もみにきてく  
れるかどうか心配だし。

そういえば、あっちの文化祭っていつだったっけかな・・・。

どうでもいいことばかり考えている。

なんだか、自分が可笑しい。自分まだ中学生じゃん。何やってる  
んだろう。

そうか、あの乙時雨の吹部部長のいってたとおり、恋をしているか  
らなのかな・・・？

あんな無神経な人・・・

本当何考えてるかわかんないっ

ああもう、駄目っ

何やってるの私は。

もうこんな時間なのに何をかんがえているのじゃうっ。

もう、寝ます。

寝ないと、明日の練習が眠くてできなくなりますっ。

興奮すると、たとえ心の中であっても、敬語になってしまうのが立雲だ。

立雲らしくていいのではないかと八代にはいわれたけど……。

ううん、寝るっていったじゃないですか。寝ます！

立雲は窓をしめ、敷布団に体を倒した。

……

帰ってこない……。

姉ちゃんも、兄ちゃんもかえってこない。

兄ちゃんはわかる。 独り暮らしだもん。

もう、大学もでて、立派な大人だから。

でも姉ちゃんは今頃何をしているのだろう？

見ていたテレビを消した涉は、そんなことを考えていた。

彼の大きなつり目は、姉の麗によく似ていた。

家の廊下を歩きながら、更に考える。

たまに姉ちゃんの中学校の人がきたりするけど・・・

あの人なんかトラブルにでも巻き込まれているのかな？

家にかえってこなくなる少し前から、様子変だったし・・・。

そういえば乙時雨って・・・ 半年くらい前から、奇妙な事件とか事故がおおい。

恐れているのかな？いや、すでにまきこまれてしまっって・・・

いるんだろうな・・・。

涉は何となく、実感していた。

麗が例の事柄に関わっていることを。

2 - 4 , 夜12時(後書き)

雨宮 渉

W a t a r u A m a m i y a

麗の弟。小学生。

「ね、もうすぐ刃流は文化祭なんだよねっ！」

「そうなんだ・・・」

朝から元気一杯すぎる空桜は、  
登校中にみかけた歌波にはようの挨拶もせず、呼びかけた。

何故か、気まずそうな歌波。

「どうしたの？歌波、元気くない??」

空桜が歌波の様子を察し、顔を覗き込む。

「いや・・・別になんでも。空桜ちゃん元気だね」

「当たり前じゃん！！毎日元気にいかなきゃっ！人生エンジョイエンジョイ！」

体をのりだす空桜に、歌波はそっか、と苦笑した。

それで印象もさがってしまう。

嫌そうな表情をはじめめる空桜。

歌波おかしくないか、と考え込む。

そしてさすがは細かいことを気にせない空桜、

まあいつか、と済ませ、またもルンルン気分で歌波をおいて歩いて  
いった。

その後歌波が哀しそうな表情を浮かべていたことを、空桜は知るはずも無かった。

普段は校舎内を放浪している時刻、生徒会長が見当たらない。  
やはり詳しく、話をききたい。  
そんなおもいが空桜には残っていた。

善は急げ、だ。何か違うかもしれないが、気にしない。それが  
空桜。

しかし、HRまで、あと15分もない。  
仕方がない、走ろう。

校舎中を探し回った。  
廊下を走るなど教職員に注意されながらも、空桜は必死に探した。  
だが、会長の姿をみつけることはできなかった。勿論、生徒会室に  
もない。

どこへ……？屋上にもいなかった、だとすると、欠席……？  
一刻もはやく……あの人に本当のことききたいのに、さ。

あきらめて教室へ戻ろうとしたときだった。  
「空桜ちゃん」不意に誰かに呼び止められた。  
一瞬ビクツとなり、ふりむく。

心配そうな顔で立っていたのは、歌波だった。

「授業もつすぐだから教室戻ろうっていおうとしたんだけど・・・、  
どうかしたの？」

「え?! いやっ! なんでもないよ! そうだね、もどろっか!」

「はぁ・・・」

歌波は空桜が冷や汗をながしたのを見逃してはいなかった。

「歌波はどこへいったの？」

歩きながら、歌波に問う。

「え、トイレだけど？」

歌波はきよとんとした顔で応える。

「あ、あ、あそうなんだ」

「やっぱりおかしくない？」

「歌波こそさっ! 今朝おかしかったよ!!」

不思議がられては・・・いけない。

歌波はあたしが会長探してることに、絶対反対する。

空桜は話をそらす。

「え? ああ、ごめん、私朝苦手なの」

「へえ・・・」

でもなんだか、それで安心した。

せめて、せめてだけれど、

歌波には嫌われたくない・・・。

できれば会長と友達になりたいとかおもってる。

そうだ、会長つてよぶのはやめよう。

もっと、しぐれみたく、なれなれしく。

会長きつと驚く。

うん、驚いてほしい。

普段無表情だとか、薄笑いだとか、そんなばっかりの人って  
驚くとどんな表情するのだろうか。  
楽しみ、 気になる。  
だから、だから今すぐ会いたいよ・・

キーンコーン カーンコーン

「やばっ！！！！いそごっ！！！」

鐘の音が響き終わると同時に、二人はかけだした。

### 3 - 2 , 刃流にて

立雲は生徒会室へ向かっていった。

歩きながら読んでいる、この文化祭での吹部発表の企画書を提出するために。

何度も推敲を重ねているのだが、よみあきないのは何故だろう。そんなことも考えながら、立雲は楽しんでいった。

ふと、それが宙を舞った。同時に肩になんらかの感触があった。誰かとぶつかってしまった。

「すいませんっ」

立雲はあわてながらも、相手に謝罪をした。

「ああ、此方こそ申し訳御座いません」

かえしてながら立雲の落とした企画書を拾う相手の顔を見て、立雲は目を丸くした。

「あ、ああ雨宮さん」

雨宮麗　話してみたい、そうおもっていた人物　。

「はい？」

麗は無表情で拾得した紙をかえした。

その言葉には何故自分の名前を知っているのか、そんなおもいがこめられていた。

「あなたは・・・？　ああ、此処の吹奏楽部の部長さんの・・・  
鳩羽さんですね」

「はい、あの雨宮さん・・・」  
いざ、目の前に相手がいるとなると、

言葉が見つからない。話したいことはやまほどあったのに、思い

つかない。  
でも、話しかけてしまった。

「雨宮さん・・・学校・・・今日ないんですか？乙時雨」  
咄嗟に思いついた疑問をそのまま述べてみた。

「え？ああ、三年は今日、職場体験なんですよ。僕のところは、午後だけなので。」

いく気ありませんけどね。」  
「はあ・・・」

よくわからない。

午後だけといわれても、もうすでに昼休み。

いく気がないという理由で、休めるものなのだろうか？

「丁度此方の会長さんに用事があったので。」

「それで、昼休みだから、わざわざ」

「そんな感じですよ」

いや、わからない。

昼休みにくる理由なんてないだろう。普通、生徒会が動くのは放課後、

ほかが部活をしている時間とか・・・そういうのではないのか？

「でもまさか、それだけのために昼にきたりなんてしませんよ。」  
ですよ。

「先日のバド部の交流試合の忘れ物を届けるのもかねて、きたんです。」

気付くのが遅くなってしまったので、こまっつらっしやると思っている限りはやめに、と」

なるほど。それなら納得が・・・ いや、つくのだろうか。

忘れ物に此方側は気付いていないのだろうか。

立雲は薄笑いの麗に苦笑でかえした。  
そのときだった。

「うらら〜ん!!」

ばたばたと、向こうから何かがかけてきた。

「しぐれ」「奏さん」

同時だった。

しぐれは二人の顔をみて目を丸くした。

似ている、とおもった二人が今、目の前に。

「なんで・・・うららんがここに？」

「しぐれバド部でしたね」

「え？」

しぐれの問いに答えず、麗はカバンに手を突っ込んだ。

そして取り出したのはバドの羽根。

それには黒い文字で”刃流”とかかかっていた。

「ああ・・・うんありがとう渡しとくね」

しぐれは不思議そうに麗をみていた。

無理もないだろうと、彼女の表情をみて立雲はおもった。

「あ、じゃあ私失礼します」

そういって、立雲は立ち去った。

その後姿を眺めていたしぐれの肩に、麗が手をのせる。

「頑張つて」

一言残し、麗はそのまま歩いていった。

「うん!!」

しぐれは一瞬固まるも、すぐに元気よくなえた。

「うららんずっと友達でいてね!!」

そのあと叫んだ言葉が麗の耳の届いていたかどうかはわからなかった。

### 3・3、従兄弟のような

乙時雨に転入して、もうはやくも2週間ほどたっている。そろそろ入る部活を決めたい。

部活の資料などを読みながら、空桜は6時限目終了後、家へと歩いた。

運動場や体育館から、さまざまな声、音がきこえてくる。どれも楽しそうだけど。

空桜は小さくみえる校舎の音楽室のあたりを眺めていた。歌波のところにしようかなあ・・・？  
そして資料に視線を戻した。

しばらく歩いていると、後ろから肩をポンと叩かれた。

驚いて振り向くと、小柄なしぐれがいつも以上にニコニコとして此方を見ていた。

「しぐれ」

微笑み返してよんでみると、今度は腕をつかまれた。

「今日部活休みなの」

「へ、へえ」

苦笑いを漏らす空桜。

あいかわらず微笑んでいるしぐれを、よくわからず見つめ返す。

「空桜ちゃんちにいきたい」

次に口を開いたとおもえば、唐突にそんなこと。

「え？」流石に驚いた。

「だめ？」

かよわい小動物のような、そんな真剣な眼差しを向けてくる。

断るに断れない。

「いいけど・・・なんで、あたしの？」

「ほかみんな、部活があるでしょっ」

それに、乙時雨にすれば、もしかしたら・・・っ！！！！」  
行き成り赤面しだすしぐれ。

よくわからない。誰かにあえる、とかそういうのだろうか？

「制服なんだね」

話が続かなさそうだったので、思い切って話題を変えてみた。

「空桜ちゃんも制服だよ」

「あ、いや、あたしは学校帰りだしっ」

何気に真剣なしぐれ。笑いをこらえる。

「制服と私服わけてないもん」

「・・・？」

無表情に応えられ、なんと返せばよいのかわからなくなった。

「うららんも同じだよ！」

え・・・？

制服と私服をわけていないって・・・。

常に制服を着ているってこと？

うららんも同じって・・・。確かに、会長に私服、なんて想像す

らできないけど・・・。

それって大丈夫なの？

日曜日に制服で出歩くなって、なんか嫌じゃないのかな？

不思議だ・・・。

「空桜ちゃん好きな人できた？」

「え?!」

いきなりそんなことをきかれ、焦ってしまっ。

しぐれがにやける。

「本当？」

「できてるわけないでしょ!!」

しぐれが此方をじろじろ見てくるが、嘘をついているつもりはない。

こんなはやく、できるはずもないし、

今まで恋らしい恋だっただけじゃない。

何をいきなり。そっか、わかった。

「何？しぐれこそ、好きな人いるの？」

恋の相談にでものってほしいんじゃないのかな？

素っ気無くもいたつもりが・・・ビンゴ。

赤面するしぐれ。

「で、でもねっ。付き合いたいとかあ、そんなのはないんだよっ。

友達として好きだなとか、この人いいなとか、そんなのだけなの！」

何をそんなあせっている。

せめたわけでもないのに。

かわいいなあなんて、おもってしまう。

「で、どんな人なの？」

「えっと、うららんのお兄ちゃん！」

・・・え？

会長兄弟いたの？ そりゃ、知らなくても不思議ではないけれど・・・

・・・

なんか意外だなっ。そういう家族がいるのって。

「しぐが小学生だったときに、大学生だったんだよー。

どこかの従兄弟のお兄ちゃんみたいにやさしくしてくれてねー。だ

から、好きなんだけどねっ、

恋愛面では考えてないからね!!!」

じゃあもう社会人なのかな？

「乙時雨にすればあえるかもって、その会長の兄さん？」

「うんっ！最近遊びに来ないんだあ」

そりゃあ、社会人なんですよ、忙しいんだよきつと。

いいなあ、従兄弟みたいな優しいお兄ちゃん。

私一人っ子だから、兄弟欲しいっておもってたからなおさら、友達の兄弟がそうやさしくしてくれるって羨ましいよ。

でもよくわかった。

恋愛面では考えていないけど、という気持ち。

どこかの知り合いのおじちゃんでも、

おいちゃんあそびにきてほしいな〜とか、そういうの考えたりすることあるよね。

それと同じ、ってことだ。

どうこうしてる間に、空桜の家についた。

「おじやましま〜すっ」

3 - 3 , 従兄弟のような(後書き)

雨宮 啓

A k i r a A m a m i y a

麗の兄。

八代の先輩でもある。

3 - 4 , 春田紗優(前書き)

1 2 / 2 5 誤字脱字を修正

3 - 4 , 春田紗優

自分は、あの優秀な春田未来の妹だから……私だって、優秀にみられてるんだから……完璧じゃなきゃいけないとか、おもってた。

はるた さゆ  
春田紗優。

人に好かれもせず、嫌われもせず。

平々凡々でありながらも、苦痛にたえる日々をおくっていた。

でももう無理だった。

姉はもうそばにはいない……。

もう、味方なんて……きつと、いないのかもしれない。

このまま孤独に生きるなんて、無理だ。

もう精一杯生きてきたじゃないか。

いい、もういいんだ。

私はもう、死んだって良いのではないか。

ほら、お姉ちゃんのもとへ、いけるんだから。

楽になれるよ……。

そう思い、手をかけた屋上のフェンス。

まさか、ただの通りすがりの、はじめてみた顔の子にとめられるなんて……

おもってもみなかった。

思えば人生最悪だった。

中二まで、私は生きてきたけれど……。

このさき受験も嫌。だって、支えてくれる人がいない。

目指す場所もない。

そういえば……  
生きたくないとか、そういうの思い始めたのは去年の冬だったかな。  
好きな人がいると女の子は可愛くなれる、ときいたことはあるけれど  
私にとって”好きな人”というのは、ある意味生きがいでもあった  
のかもしれない。

去年の、バレンタインデー……。

私は彼に告白しようと思っていた。

すぐ近くの男子校に通う、彼に。

この町の女子校、乙時雨／刃流　とその学校。

姉妹校に近い関係にあたっていたため、その間での”恋愛”も少な  
くはなかった。

できれば人目の少ないところで渡したかったチョコレート。

でも、ストーリーじゃないんだから、通学路なんて知るわけないじ  
ゃん。無理。

だから……　思い切って、向こうの校門のそばで、私は彼がくる  
のをまっていた。

運がよかったからなのかどうかは定かではないが、彼は一人で出てきた。

「しっ、椎名君っ!」

赤面していたかな。

私は呼びかけて、何もいえずに頑張つてラッピングした箱を差し出した。

彼は表情一つかえずにそれに視線をやった。

「有難う 気持ちだけ貰うよ」

彼はチヨコレートを受け取ってはくれなかった。

このまま去られては…… せつかくここまでできた意味がない。

「まって!」勇気をだして、呼び止めた。

無表情のまま、彼は足をとめ振り向く。

「私、その、椎名君のこと、その、いえない。難しい。」

たった二文字の言葉なのに、どうしてこんなにも難しいのだろうか。戸惑っていたときだった。

「椎名くん~~~~っ」

前方から、大勢の女子たちがかけてきた。

もしかして…… ファンクラブ?

彼女等はすぐさま彼を囲むと、次々にチヨコをさしだした。

きもい…… どうしよう。

私はそれを眺めていた。

彼はやはりチヨコを受け取らない。

気持ちだけ、といつては返品する。

やっぱりもてるんだ……。

何故だろう。 なきそうになった。

負けたくない。

彼の笑顔がみたくて・・・  
女子ばつかの学校から抜けたら、こんなまぶしい笑顔があった。  
だから生きてこれた、ともいえるんだ。

私は・・・ 負けたくないんだ。

だからといって・・・ できることは何もなくて。

弱気になってしまう。

ふと、向こうの方にショートカットの女子がみえた。

此方、いや彼を見つめている。小さなシオルダーバッグをさげて。

あれは、刃流の制服。

あの子も、彼の・・・？

ついため息をもらしてしまふ。

彼女も戸惑ってるみたい。

理由は・・・ 私と同じ？

嫌なのに、ライバルが多いことは悪いことなのに、何故か安心してしまふ。

取り残されているのは私だけじゃない、ということを実感できるんだ。

それなら、もういい。

かえったら、きつと泣こう。

そうしたらすすきりするかもしれない。

私はそうしてあきらめようとした。

でも・・・ やっぱり辛い。

家にかえって・・・ かえって何ができる？

お姉ちゃんに相談・・・ したら単純だっていわれるかな？

夕方、ひとりトボトボと、裏道をおいていた。

曲がり角をまがるうとしたとき、向こうに彼の姿がみえた。曲がれない……。どうしよう。

考えているとふと、そちらのほうから彼の声がした。

「遅いね」

「だって八代……。さっき囲まれてたから」

こたえたのは、女子の声？

驚いてちらつと盗み見してみると、彼とはなしていたのは先ほどの短髪の彼女だった。

嘘……。なんで……。

「いたんだ」

「いた。ファンクラブか何かしらないけど、ふりはらってるのみて、興奮してました。」

ほかからみたら、私ストーリーカーみたいだったのかも。「ストーリーカーじゃないの……。」

私、震えてた。

盗み聞きなんて本当はしたくなかったけど、どうしても……。まさか……。だってまさか、彼女がいたなんて……。しかもそれがあの子で……。

「でも、ただ見てたわけじゃないよ。ちゃんと用意くらいしてあるんだから。」

「用意もせずに呼び出してたんならお前女じゃないだろ」

「はいはい、そうですね」

彼は平気で皮肉いつてるし、彼女の声あきれてた。どうしてそんなに仲がいいの？

「男子っていいなあ チョコももらえるから」

「何で？」

「だってホワイトデーって、お返しじゃない？好きだからあげる、  
とかないから」

「欲しいの？」

「どうせ貴方にもらったって、お返しにしかありませんけど。」

「りつ……誰？」

「え？」

「……え？」

「誰かそこにいる よな」

嘘、きづかれてる？

「ごめんなさい、あの、此处近道で」

震える声で……ごまかすと、

「ああ、すいません。」

彼女は道をあけてくれた。

でもごまかせたのは女のほうだけ。

だって彼、私のこと覚えてるだろうから。

そしてなにより、此方を睨んでいた。

睨まれて……

私は、私は死にたいとおもった。

……、

お姉ちゃんは私のこと、単純だなんていわなかった……。

私のこと支えてくれていた。なのに。

あんなやつに……ころされて……許せるわけがないでしょう。

私はあの人をゆるさない。

現乙時雨中生徒会長……。ゆるせない。

あの時の彼の、彼女であった子だって、恨んでいないといえは嘘になるけれど。

誰より……私は。

私はあなたをゆるさない！

3 - 4 , 春田紗優 (後書き)

春田 紗優

S a y u H a r u t a

未来の妹。

3 - 5 , 部活帰り(前書き)

1 2 / 2 5 誤字脱字の修正

ほとんどの部活動はすでに終了していた。

部活帰り、同じ道を歩く女子生徒たちが生徒会長を話題にはなしている。

「生徒会長なんであんな人になっちゃったんだろうね」

「どうということ？」

「前はあんなに優しくして、人気だったじゃん。例えば、誰かが会長のこと嫌いだっていったら、

みんなその人のこと恨んでたじゃない？それだけ人気だったのに、恐ろしい人になっちゃったねって」

「ああ、それはなんとなくわかるな。でもどうしてあんな評判よかつた人が

あんなことしちゃったんだろうっておもったらさ、元々裏で何かしてたんじゃないのかとか、さ」

「うーん、どうなんだろうね」

そんな会話で、哀しげな表情をみせる者なんてとくにいない。

どうでもいいようにただ、退屈のぎにはなしている。そういった感じであった。

少しはなれた商店街。

「でさあ、キミの学校の近く、右側に文具店がありますね、っていわれたのよ。」

あたつてるとおもわない？あの子の占いまじあたるのよー わかる？」

歌波は部活の先輩に、鬱陶しい話をきかされていた。

本来はもつとはやく家にかえって明日返却日の本を読みたかったのだが、

部活がえりに特に親しいわけでもない先輩に不意にワックに誘われた。

何かおごつてあげるからお願い、とまでいわれては断れない。

「あの先輩、学校の近くに文具店があるのは当たり前です」

「えー、そう？じゃあ右側ってのはどうなのよー？」

歌波はため息をつく。

「それはどつちから見たかによるのでは？」

「え！あ！そういうことか！つて、それってインチキじゃん！危うくだまされるとこだった！」

無駄にはしゃいでいる先輩。

もうすでに騙されてたじゃん。その言葉をおさえた。

「歌波ちゃんつて才能あるよねー。楽器も上手いしさー。」

「そんなことないです。」

よく知らない、ただの先輩にほめられても別にうれしくない。

「今度刃流とコラボするかもつて話きいたー？」

それはきいた。

部長と刃流の人が話しているところ、見たから。

「向こうそろそろ文化祭でしょー？いそがしくなーい？」  
顔をのりだしてくる先輩。

「そうですね」

歌波は迷惑そうにこたえる。相手は後輩の態度なんて、まったく気に入っていない様子。

「しかも人数不足で別の部の子巻き込んだじゃうとかさー やばすぎっ。うちには無理だあ〜」

「はい……」

もうしばらくは、続きそうだ。

「未来の妹が飛び降りようとしたって、きいた？」

立雲はぼーっと空を眺めていた。

「興味すらない」

横の八代があくびする。

「また雨宮さん絡みなのかな？っていつても、興味ないんじゃないか」

ため息をついて哀しげに言葉を表現する立雲の横顔を、八代は盗み見た。

一瞬、此方を向きかけた立雲と視線がぶつかった。

赤面する立雲。

「私、今日雨宮さんにあつて、はなせたの。全然親切な方でした。でも、悪い噂が広がってるんだもんね。こんなこといえるのは私が他校の生徒だからなんだろうな」

「でも それだけの魅力があるってことじゃないの？」

「へ？」

八代の発言には驚いた。

そんな人をほめるようなこというなんて、珍しい。

私だって、この皮肉屋にまともにもほめてもらったこととか滅多にないし。

でも好きなんだよねえ……。本当はやさしいんだって。私は知ってる。

「そうだよね。何かオーラもってるって感じだったかな。

あのね、私彼女と似てるっていわれたことあるんです。でも、どうしてだか分からない。」

「その何かのオーラって奴だろ」

即答だった。

「そうなの？」

即答できた理由自体がわからない。内容なんてもつとだ。

「俺にきくな」

「無責任……」

そう立雲はつぶやいたが、彼女から哀しげな表情は消えていた。

3・6、**魔との出会い**（前書き）

1  
2 / 2  
5  
一行増やしました、

### 3 - 6 、 麗との出会い

「前までは超モテモテでホワイトデーとかお返しどころじゃなかったよ!!!」

「なのにねー、選挙があつたんでしょ？それで何人が不信任にいらつていうから、」

「みんながそいつらうざいうざいってたんだよ!!!」

空桜はしぐれから、麗のことについてきいていた。

部屋で寝転がって話している。

「こんなちっこいベッドでよく落ちないねだとか、ここまで部屋狭いと運動できなくて太っちゃうでしょとか、」

本人にそのつもりはないのだから色々と皮肉をいわれた。

「さすがはお嬢様。これでもけっこう大きいほうだと私はおもっているんだけどな。」

「それでうざいっていわれて、死んだわけ？精神がみだれたとか？」

「死んだって・・・普通にいうかなあ空桜ちゃんっ。」

「精神が乱れてそんなことになるって、オカルトチックじゃない??」  
文句を並べていたわりには寛いでいるしぐれ。

空桜は椅子に姿勢正しくすわっている。

「そうだけど、じゃなかったら”不幸”なんていうほどのこと起らないでしょ？」

「それとも会長は超能力者なの？もっとオカルトチックだよー!」

「そっかあ・・・じゃあ春田って人も、それであーなったのかな？」

「あーなった、ねえ・・・。」

「春田未来って人はたしか、選挙管理委員長を名乗って会長のことせめてたんだっけ。」

「それでまわりの人が？」

それが不幸の正体なの？でもそれってできすぎてる……。せめこみにまでいったひとが、たったそれだけのことで自殺なんてするもの？

あれ、春田さんて事故死じゃなかったっけ？

「でもさ、しぐれよくしってるよね。学校違うのに。」  
少し、疑問におもった。

「うん、調べたんだあ。色々あって。」  
「色々？」

その色々のなかに……。彼女の孤独もまじっているのではないか、そんな気はしていた。

「きいてくれる？」  
「うん？」

大きな瞳は此方にむけられいた。  
なんて深刻な……。

「しぐはさあ、中学生になってから友達できなくてえ……。  
なんでだとおもっ？」

「なんで？」  
いじめられていると、風の噂で聞いたが。  
「こわかった……………」

小学生四年生のときだったっけ。倶楽部決めるときに、本当は運動部いきたかったんだけど、  
まわりがお前チビだからくんとか、いってきて……。それですごくへこんでたの。

文化系の倶楽部だって、みんな嫌な目でみてきた。  
だからどこにも入りたくないなって思ってた。でも強制参加だもん……。

まよってたらね、知らない六年生の子がはなしかけてきたの。それがうららんだったあ。

吹部に誘ってくれたんだよ。だから、一生懸命頑張れた。仲良くなれたし、友達なんだとおもってた。

でもその春卒業しちゃって・・・。

乙時雨にいくとはきいてたんだけど、おえなくて。

でもね・・・ 刃流にはいつて・・・ 嫌になって。

そんなときはうららんのこともおもいだすようにしてたのにさあ、

あんな嫌な噂きいちゃって・・・ なんか絶望的で・・・。

しぐのしってるやさしいうららんはもういないのかなあって思った・・・。

だから友達をつくるのがこわかった。

でも違ったんだねっ。

空桜ちゃんが気付かせてくれたよ!!

うららのやさしさ!!! 友達なんだもんね!!!

「

はじめてきいた、しぐれの過去。

どうしてそんな事実を笑顔ではなせる？

もう思い出にまで化しているの？

私のおかげなんなら嬉しいけど、しぐれって凄いなあ。

幼稚な子だっておもってたけど、なんだか強い子。

逆に元気をわけてもらえるよ!

「良かったねっ。会長みたいなやさしい友達がいてっ」

「うん！……だからしぐ、空桜ちゃんに協力するね！……うららの噂をけそー！……だいさくせーん！……」

「でしょ??」

「けそー！だいさくせーん！……って、なんだ。ふきだしそうになるのをこらえる。」

「がんばろつかー！」

「元気をわけあおうよ、しぐね。」

「おー！！！」

「なんだか久しぶりに、気持ちよく笑い合えた気がした。」

3・7、**しんせうしん** (前書)

12/25 色々。

### 3・7、うるさいひと

だつるーいつ。

紗優は一人、歩いていた。

部活もやめた。

習い事は元からない。

家にいてもすることがないので、まちを少し放浪していたのだが・  
。

楽しくない。

逆に疲れた。

帰って寝よう。

そう思ったとき、不意に誰かによびとめられた。

誰だ。

驚いて振り向いたが、ただ

「おとしましたよ」とポケットティッシュを渡してきただけだった。  
紗優は受け取るうと相手の顔を見た。

そして更に驚かされた。

「あなた……、椎名君の……」

「はい？」

きょとんとされた。それもそうだろう、彼女にとって自分なんて風景の一部なのだから。

「何ですか？」

じろじろと見つめていると、不審そうに見つめ返してきた。  
名前は知っている。

確か鳩羽立雲。 刃流の吹部の部長という名の彼女をみたときは唾

然としたよ。

もう思い出にまで化した私の嫌な記憶……。

まさかこの人の顔を見るだけで思い出してしまっなんて、むかつく。

「何でもないです すいませんでした」

紗優は立ち去ろうとした。だが、

「あなた、もしかして春田さん？」

え?!

何故此方の名前をしっている？紗優は目を大きく見開いた。

「未来に妹がいるってことは知っていたけど、顔似てるのね」

お姉ちゃんの、友達？

「ワックドナルド……、良かったらどうですか？」

「はい？」

いきなり立雲が誘ってきた。

そいうのって彼氏といくものじゃないの？、思わず声にだしてしまっようになった。

「おごりますから」

そう、憫笑をうかべていわれたものだから……

おごってくれるなら話はべつだね、なんて思ってしまった。

「私、注文してくるから、何がいい？」

そこらへんの商店街の片隅、すぐ近くに店はあった。

おごってもらえるならと薄笑いをうかべながらここまで来たが、やはり沢山注文するなんて、できない。

「え・・・ あ、飲み物だけでいいです コーラのMサイズ」

「うん。オツケー。 席、とっておいてもらえますか？」

「はい」

Sにしておけばよかったかなだとか、ここはもっとLにしてくださいとか色々と考えながら紗優は適当に座った。

隣には同じ制服の二人組もいた。部活返りの寄り道だろうか。

しばらくして、立雲がやってきた。

「ありがとう、春田さん」

「はい」

ふと、隣の机にいた人と視線がぶつかった。

紗優が気まずそうにしていると、立雲も気付いたのか、振り返る。向こうは一瞬、何かを思い出したような表情をうかべた。

「あ、えつと園部さん」

立雲にもなにか心当たりがあったようだ。

「刃流の部長さんですよ。私の名前、しってるんですね。」

今一瞬、かつこいい・・・ とか、付け足さなかった？小声で。

私地獄耳だしきこえるよ！

「あなたが刃流の部長なの？今度コラボするとかいう企画たてた一人ってわけか。」

うん、中々可愛いじゃない。私も実は吹部。担当はアルトサククス。よろしく。」

「知り合いですか？」

何気声の大きいもう一人の方は無視して、紗優は立雲に耳打ちした。

「あなたと同じ学校じゃないですか。」

「でも私は知らない。」

ケチャップを真剣にしぼりだしている立雲。

まるでどこかの貧乏人のようだ。

「机、ひつつけな〜い？」

三人に同時に無視されたにもかかわらず、例の彼女は身をのりだしてきた。

そしてまた三人そろって、怪訝な顔をした。

何だ、こいつ。

でも、いいよね。

この立雲って人、私が未来の妹だって知って、近寄ってきたんだからきつとお姉ちゃんの話するにきまつてる。

友達だからとかいって、なんかいろいろいきいてきそうだし。

そういう話から逃れられるのなら、こついつづるさい人が一人くらいいたって問題ないよね。

紗優は微笑んだ。

3・7、うるさいひと（後書き）

春田 未来

M i r a i H a r u t a

元乙時雨中選挙管理委員長。  
亡くなっている。

4 - 1 , 朝の生徒会室 (前書き)

1 2 / 2 5 色々と修正。

#### 4 - 1 , 朝の生徒会室

朝目が覚めると、自分がいるのはいつも生徒会室。

生徒会の仕事が多まってしまい、部活が終わった生徒たちがかえってからも作業を続けているのだが

気が付いたら寝てしまっている、そんな毎日。

何故たまるか。此処の学校はもともと生徒会が取り仕切らなければならぬ行事が多いというのにそれを一人でこなさなくてはならない。

前回、体育祭の企画がようやく終わった、そう思えば次は吹奏楽部が隣とコラボの計画？

何故、部活での企画までもを生徒会にまかせられなければならないのだ。

自分が立候補した生徒会は、もっと活気あふれるイメージだった。

副会長がいて、書記と会計がいて、共に仕事をしていくのが楽しい、それを思い浮かべていたというのに。

自分が生徒会にはいつてからというものの、

校内の風紀は乱れ、自分自身の評判さえも悪くなっていつている。

ならば逆に・・・ それを利用してみようではないか・・・。

朝、

コンコンと、ドアをノックする音があった。

「失礼します・・・。」と、震えながら入ってきたのは、

和風なストレートロングが可愛い、歌波という子。

「あの、会長。 吹奏楽部の・・・園部です。 部長から、コラボの企画書預かってきました・・・。」

あの、えっと昼までに意見がほしいとのことなので、またきていいですか・・・。」

緊張しすぎているのか、言葉がまとまっていない。

だが麗はあまり気にしなかった。

ただ薄く微笑んで、

「わかりました。 昼までに目を通しておきますね」と、企画書を受け取った。

「ででで、では失礼しますっ・・・。」

そう、歌波がでていこうとしたときだった。

不意にドアがひらいた。

「失礼しま・・・って、歌波?!」

はいってきた、目を大きく見開く彼女は、真岸边空桜。

「あ・・・空桜ちゃん・・・。」

「何してたの？あたしちょっと、会長に用事があったの。」

「あ、私は・・・用事済んだので、失礼しますねっ。」

歌波は空桜のよこを通り抜け、かけていった。

「それで、用事って?」

走り去る歌波を怪訝な顔で見つめていた空桜に、麗が声をかけた。

「用事というか・・・その、はなしたかっただけなんですけど。」

「どうぞおかけください。」

「あ、はい!」

いつもと違って少し・・・もじもじしているかのようにみえたのだが、

見間違いだっただのだろうか。

「昨日、しぐれと話したんですよ」

「しぐれと？」

不思議そうに、でも無表情で聞き返す麗。

「はい！会長、やさしい人なんだって話ですよ！

前、すつごく人気だったんですね。それで急に変なことになったみたいけど、

それって人気だったからこそおこったようなものなんじゃないかってことです。

オカルトチックですけど」

「はあ」

意味がよくわからない。

どれが結論だ。

「だから、あたしとしぐれで会長のことっ！支えたいなって思ったんです！

例えばあたしだったら、生徒会に立候補することだってできるんですから！」

その言葉には驚いた。

支えたい？何故僕なんかを。

生徒会に立候補して何をかえようというのか……。  
いったい僕の何をもとめているんだ。

この人……。まさか。

「それで、あの、あたしもしぐれみたいに、うららんって、呼ばせて！」

「はい？」

「い……けなかつたですか?!」

反射的にたずね返してしまったせいか、急に強張った表情をみせてきた。

「いえ……構いませんが」

いきなり……何をいいだすかと思えば……。

「じゃあそうよびます！あたしのことも普通に空桜ってよんでくださいー！」

「はい……」

ほかにかえす言葉がなかった、それだけなのだ。

「じゃ、じゃあっ！昼休みとかそこらへんにまたくるんで！！そのときに何か話しませんか??」

「お待ちしております」

話すことなんてない。

ないけれど……、もしこの人が……、そうなんだとすれば……。

何かがかわるかもしれない。

僕のなかの何かではない。

だが……きつと。

#### 4 - 2 , 図書委員会

「昼休み、図書委員の方は図書室に集まってください。」

朝のHRで担任がそんなことをいつていた。

たしか歌波がそうだったかな。

一緒にきてほしかったかったけれど、仕方がない。

ひとりでいこう。

あたしはうららんと約束した！昼にまたいくつて。

急ごうとしたときだった。

「真岸辺さん」

不意によびとめられた。

「はい？」振り向くとそこにいたのは小柄な眼鏡女性、担任だ。

「まだ委員会決めていた無かったわよね、あなた。」

そういわれれば、そうである。

「それで、人数を考えて図書委員にはいつてほしいとおもって。」

ええ？！今日集まりがあるんでしょう？！

「園部さんもいるし、あなた仲が良いみたいだからね、良いかしら？」

優しそうに見えて、この人はやばい。

笑っているのに鋭い目。

「は、はあ」

さすがに断るわけにもいかない。

「早速なんだけど、朝いつたとおもっけど、今日集まりがあるの。

図書室に行つて頂戴。」

「はい……」

それじゃあ、生徒会室いけないよ？！

でも……、顔はだそう。それでいいかな……。

「どこいくの？図書室はあっちよ。」

逆方向に歩き始める空桜。

「トイレです」

なんていうのは口実にすらなっていないのだろう。

今からいくのは、うららのところだよ……

空桜は逃げるように走っていった。

「廊下は走らないように！」その声は無視した。

ついた。

生徒会室。

そこで思わぬ人物に出会ってしまった。

知らない人だったけれど。

「真岸边さんですね」

真面目な、眼鏡の女子。

「私、図書委員会の委員長勤めさせていただいてます。あなたのことは先生からききました。」

これから図書室向かいますが、一緒にどうですか？案内しますよ。」  
「いっぺんに色々……真面目にいわれては、咄嗟に口実をつくりだすことは不可能。」

仕方なく、空桜は委員会へと向かうことにした。  
でも……。

そのとき気が付いた。

生徒会室のドアが開きっぱなしになっている。

中をのぞくと、いつものように麗が何らかの資料と睨めっこしていた。

ふと、

「委員会頑張ってくださいね お二人とも」

感情のこもってない声で、応援された。

視線はまだ資料の方にあるのに……。不思議。

「うららんまたあとで来るっ！」

空桜は笑顔をつくりなおし、麗に向けて手を振った。

此方を一瞬たりともみていないのに……。麗は軽くふりかえしてくれた。

凄い。横に目でもあるのかななんて。

空桜はルンルン気分で、委員長についていった。

#### 4 - 3 , 瓜二つ

面倒くさかった昼の委員会、そして後の二時限もおわり時は放課後。

空桜は歌波は愉快に商店街を歩いていった。

歌波の部活が珍しく休みだったのだ。

歌波によると、部長の機嫌が良かったらしい。

それで、なくなった。よくわからない活動方針。

まあそんなことで、歌波が「やった〜っ！久々に休める！」なんて  
いってるものだから。

あたしもうららんに手ふりかえしてもらってまだ、嬉しいのが続い  
てるんだもんね。

しばらく買い食いをしながら歩いていると、

「歌波ちゃん！」と呼ぶ声があった。

歌波が振り向く。

「ああ、こんにちは。」

二人の、小学生？がいた。

歌波は二人に挨拶をした。

「従姉妹なの。えっと、そっちは、ボーイフレンド？」

この女の子の方が従姉妹。それで、もう一人の男の子の方は、歌波  
も知らないのかな？

空桜は頑張って関係性を把握しようとしている。

それにしてもこの子……。

「え？違うつ、違つよ！家が隣だから、一緒に塾行こうって、それ  
だけ！」

否定はしているが、顔は赤い。  
片思い、か。

ふと、歌波が隣の少年の顔を見て固まった。  
それに反応する空桜と歌波の従姉妹さん。  
彼女は首をかしげているが、私にはわかった。  
私も、思った。  
やっぱり、そうだ。

「似てる……。」

歌波がそう、呟いた。

同感。

「似てる?」

従姉妹さんがわからない、というように問う。

歌波は話題をかえようとした。

「私、園部歌波っていいです。」

「はぁ……」

さり気無く少年に自己紹介したつもりが、かえって警戒されることになる歌波。

「あああ、あたし空桜!ね!」

歌波も私も、自己紹介したくしてしてるんじゃないかと、この子の名前知りたくしてしてるんだよ。

うん、歌波もっていうのは多分だけだ。気付けよ……。

気付いてくれたのは従姉妹さんのほうだった。

「えっと、渉」

彼女が紹介してくれた。

でも、下の名前はきいてもぴんとこない。

何故私たちがそんな、彼の苗字をきにしてるかって?

だつてさ、この子……。

仕方がない。単刀直入に聞くしかない。空桜が口を開いた瞬間、  
「兩宮麗さんはご存知ですか？」

歌波にさきをこされた。

その歌波の問いに、彼は一瞬凍った。

そしてすぐに「うちの姉ですけど」とかえしてくれた。

「やっぱり！」

「似てると思いました……」

そう。

彼はとてつもなく……、麗に似ていた。

身長と髪型以外はまったく同じといつても良いほど、瓜二つという  
言葉が似合う。

どういう関係なのだろう。

空桜達は不審におもっていたのだ。

「似てると思った それだけですか？」

「え？」急に問い返され、戸惑った。

どういう意味？

「別に それなら良いです」

渉はそういつて、早足で其処から立ち去った。

「あ、渉？じゃあ、歌波ちゃんまたね！」

従姉妹さんも、彼を追いかけ走っていた。

取り残された二人は商店街の真ん中で、顔を見合わせた。

「あんなにも似通った兄弟がいるんだね、あの人にも」

「あたしも驚いたよ……っ。　　うららんそっくりなんだもんね……  
っ」

空桜がはしゃぐ。

「え？」

それに対し、歌波は目を丸くした。

「うららんって、今いった？」

「うん。なんで？」

歌波は咄嗟に、空桜への警戒の色をみせた。

「空桜ちゃん、会長とそんな親しくなったの？」

「え？うん！あたしがうららんを支えたいなって思ったのね」

「そう……」

楽しげにあたりを見回している空桜に、歌波は哀しげな顔を向けた。

「あ！あれおいしそう！買い食いしてこっ！」

空桜はそれに気付きはしなかった。

#### 4 - 4 , 定期試験

翌日のことだった。

「今週は部活ないからね。」

吹部の部長が笑顔で、そういった。

「えっ？またですか？」

「またって何よ。昨日はまあ別なんだけど、もうすぐ定期試験じゃない。」

「あ……」

忘れていた。

私、歌波もすっかり忘れていた。

最近はいってきたばかりの子と仲良くなったのは良いもの、なんだか私自身まで、何か変わったような気がする。

ふりまわされちゃって……

定期試験とか、それどころじゃなかったな。そろそろ勉強しなきゃ。

「今回からは順位はりだされるらしいのよ」「ええええっ?!」

試験結果を張り出すのは当たり前なのだろうが、

この学校に、順位が張られたことは今までなかった。

学校長がどこのこつっていついていたけれど、どうなんだろう？

やだなあ、順位とか……。

なんで今回から？二学期末試験からって……中途半端だよな。

歌波は色んなことを考えながら、部室をあとにした。  
はあ……、ためいきをつく。

ふと、前方にお気楽転入生がみえた。

あちらも歌波に気付いたようで、此方にかけてきた。

「歌波！部活あったんじゃないの？」

「ああ、はい。あると思ってただんだけど、もうすぐ試験があるから  
って、

今週いっぱいはお休みになるみたい。」

「試験?!きいてないよ!!!」

彼女もまた、驚いていた。

うん、わかる……。

「しかも、今回からは順位がはりだされるみたい」

「今回から?今まではられてなかったの?」

空桜がさらに驚く。

苦笑する歌波。

「うん、空桜ちゃんの前のところは、でてた?」

「あつたよ〜最悪!」

うつたえるような目で此方をみてる。

そんな表情みせられても。

「そっかあ」

最悪、かあ。この子の成績、どうなんだろう。気になる。

「兎に角、お互い勉強頑張ろうね。」

「ええ〜 歌波はちゃんと勉強するんだ」

空桜が怪訝な顔を見せてきた。

「しないの？」

「したくない。てか、刃流は文化祭！羨ましいしいい〜」

「そうですね」

それには同感だった。

「刃流の定期は十二月だそうです」

「馬路で！え！なんでしってんの！」

「友達がいるから、きいたの」

友達かあ。刃流の友達なら、あたしにもしぐれがいるよーだっ！

空桜が意地悪な笑みをうかべる。

「私ももうすぐだっってこと、忘れてたんだけどね。さあ頑張らなきゃ。」

その言葉で、空桜の笑いの表情はきえさった。

「がんばれえ……あたしもう今からあきらめてるから……」

「駄目だよ、それ。あと1週間以上あるから。」

「ううん……」

歌波は真剣だった。

空桜はとりあえず、うなずいておいた。

4 - 5 , 違い

「期末？うん、そう十二月　今は学園祭の準備期間だからねえっ！」  
「いいなあ・・・」

空桜は試験勉強をさぼって、しぐれと喫茶店で談笑していた。

「もうすぐなんだねえ、乙時雨は〜」

「そうそう。今回から順位オープンらしいし」

「ああ、それきいた〜　今まででなかったみたいだもんねえ」  
「きいた？あれ？だれに？」

「しぐはあ、うららんが気になる」

「うららん？」

「うん、だっていままでみんなしらなかったんでしょあ？」

しぐもしらなかったもん。うららんって頭よさそーだけど、実際に

「なのかなーて」

ああ、なるほど。

そういわれてみると、気になってくる。

「もちろん空桜ちゃんのもきになる」

あ、それはちよつと気にしないでください。

「学園祭はじまるころには期末もおわってるよね？きてよねっ」  
「ああ、うん。」

他校の文化祭って、気になる〜。

体育祭は前いたところで、従姉妹によばれて見に行った、ってのはあるけど。

「しぐも、学園祭終わったら勉強しないと」  
あら・・・この子も勉強ですか。

あたしもしたほうがいいのかな？

苦笑する空桜を、不思議そうにしぐれは見た。

「まあいつか」

まあいつか？

でもなあ

勉強みんなするんじゃないあ、あたしもしないとまずい系？  
いあ・・・

あたしの性に似合わない事したってねえ！

「学園祭、しぐ吹部の手伝いするんだあ」

「へえ〜 凄いね！しぐれ何部だっけ？」

「バド！あのねえ、吹部の部長さんにたのまれたのぉ」  
吹部の部長・・・

そつえば前部室の前にはいた・・・短髪の可愛い子。

「もしかして知ってる？」

「んーっと、名前はよく覚えてないけど・・・」  
空桜が首をかしげる。

「なんかうららんににてるよねえっ！」  
え？

唐突に笑顔で問われた。

確かにそう一度は思ったけれど・・・。  
・・・。

「あれ？思わない？」

しぐれも首をかしげる。

「思ったよっ、はじめみたとき。でも話した事ないから」  
「そかあ」

納得顔のしぐれ。

「どんな人？結構似てる？」

「え」

さり気なくきいてみたつもりが、かえって驚かせてしまったようだ。  
「うん、表情堅いからさあ、つめたいのかなって思ったらすうでもないし

よくわからないの。でも、悪い人じゃないから　あまり好きじゃないけど」

悪い人じゃない・・・　それはね、うん。  
でも

あまりすぎじゃない・・・か

しぐれの好みだってよくはわからないけど

似ているけど麗は好きで吹部長は好きじゃない・・・

違うところ・・・　オーラ？うん・・・。

わからない・・・。

## 5 - 1 , 試験当日

最近ちょっと楽しい。

まわりがみんな勉強勉強！っていつて、かまってくれなくて暇だったけど・・・

あたしと同じで試験勉強はしません！って子がいてよかったなあ。それがうららん！

生徒会室で難しい本よんでたからきいてみたら、

「ああ、来週試験でしたか忘れてました」  
平然とそういわれた。

「勉強しないの？」

そうきくと、一瞬鋭い目つきで此方をチラ見してから、  
「してますよ」

と、読んでいた本の表紙をみせてきた。

なんだこれ・・・ なんかの参考書？なんだろうけど  
これ範囲じゃないでしょ・・・  
そもそも中学レベルじゃないよ・・・  
まさか受験勉強？

「試験にも受験にも役立たないかもしれませんがね」  
彼女は不気味に笑って見せた。

そしてそのまま  
10日ほどたった。

私は緊張していた。

これから、定期試験……。

もう三年の二学期。これで失敗すると、内申があぶなくなる。そうおもうと、いつも以上に緊張してしまつ。

参考書を手にもってはいるものの、どうも集中できず無駄にばらばらとめくっているだけ。はやくおわってほしい……。

ガラッ、そのとき教室の扉がひらいた。

きたっ！ はじまる……。そう思い、扉の方をみた。

そして、驚いた。

教師ではなかった。

雨宮さん……。

二学期初めの試験が終わって以来、彼女はこの教室に顔をださなくなつた。

てつきり、この試験にもこないのかと思つていた。

が、彼女は今、扉の前に無表情で立っている。

まわりも啞然としている様子。

「おはよう 御座います」  
彼女はそういい、しばらく空席で埃がたまってしまうていた机へと向かった。

そういえば、今回から順位がはりだされる……。

兩宮さんは、答案を返却されたときだって、いつもどおりポーカーフェイスだから。

いや、それ以前にかえされた答案を、ひらくまえにしまっていた気がする。

ここでは見ない……のか。

その後はいつてきた試験監督の教師もまた、麗の顔を見て凍り付いていた。

「やめ！」

試験監督の合図で、一斉に答案用紙を裏返した。

ふう……。。。。。

小さくため息をつく。

テスト…… おわったああああつ!!

まわりで皆が終わった終わったと騒いでいる。  
つかれたよ、五時間。

「空桜ちゃん」

ふと、肩をぽんとたたかれた。

振り向いてそこにいるのはやはり歌波。

「終わったね、どうだった？」

「無理だよ〜 もうやば〜い」

「そんな」

歌波が苦笑する。

「勉強あんましできなかつたんだよねえ。」

「うん・・・ そう」

5 - 2 , 異常(前書き)

1 2 / 2 5 脱字訂正

その日の放課後もまた、生徒会室へと空桜は出向いた。  
ノックをし、返事がきこえたらドアを動かす。

いつものように、よくわからない難しい本をよんでいる麗。

「うらん、テストいったんだよね？」

「はあ」

「あ、うん」

何故第一声にそんな疑問を発したのだろう。自分がわからなくなる。

「どうだった？」

「どうって」

いつも以上に無口な麗。どうやら本に集中しているらしい。

「とけた？試験勉強してなかったじゃん」

「どうでしょう」

「どうでしょうって……」

こつこつ返事されてしまうと、ノリが悪いのかって思っちゃっつよ、  
ねえ。

「真岸边さん」

麗が唐突に、空桜の名を口にした。

「だからあ、空桜ってよんでって！」

「……」

空桜が訂正をすると黙り込む麗。

これで何度めだろうか。

そんなに下の名でよぶのがいやなの？

「部活の入部届けまだ提出してないんですよね」

「え？あ！忘れてた！そういえばこの前もらったんだっただあ  
今度は、すつと微笑んでくれた。」

「え、えつとうららんって帰宅部？」

「一応部活動には参加していません」

麗が本のページをめくりながらかえしてくる。

「じゃあ、あたしも帰宅部にして毎日ここきちゃだめ？」  
思いつきで、いってみた。

軽い気持ちで、麗の笑顔を見ようと思って、いってみた。  
それだけなんだけど。

バタツ

彼女の手から、厚いその本は落ちた。

「うららん・・・？」

空桜がつぶやくと、麗は頬を赤らめる。

・・・え？

「今日はもう・・・ 帰って頂けますか」

・・・え？

落としたモノを拾い、彼女はうつむいて言った。

「どうして」

「・・・」

無言なところを見ると、あたしのことが嫌いになったとかそういう  
のじゃない・・・

つてことがわかってなんだか安心したけれど

追い返されるなんて、嫌だ。

口実・・・ いや、口実じゃない・・・

何とか・・・ 何を・・・ 何とかするの？

わからない でも

「うららんこそ家にはかえらないの？」

少しでも、話をかえてとどまろうとした空桜の言葉に、麗は一瞬かたむいた。

そして、怪訝な目をして此方を向いた。

「親心配しないの？」

「いませんよ」

即答だった。

「いない？」

「数年前に事故で」

「……うそ」

じゃあもしかしてしぐれのいったお兄さんが……  
家族を……

でていってください、そんな鋭い目で見つめられる。

でも 負けない！

真実をしろ！

「お兄さんとか、涉くんとかは？」

そう問うと、彼女は目を丸くした。

「何故知ってるんですか」

「え……お兄さんのことはしぐれにきいたし…… 涉くんには」  
の前会ったから……」

少し時計のほうに目をやってから、再び麗のほうをむくと

「あ……つた？」

彼女は死神のような…… 強張った表情をしていた。

ポーカーフェイスが台無しすぎるその顔。

どうしてそこまで。

「会ったって・・・ いつどこで？」

「え？先々週くらい？に商店街で会ったよ？」

彼女は口に手をあててから、表情をもとにもどした。

普段の・・・ そう ”無表情”に

そして彼女は本を投げ捨てあたしを押し退け部屋からでていった。

一瞬の出来事だった。

それを呆然とみつめるしか、空桜にはできなかった。

5・3、集う兄弟（前書き）

12/25 麗の瞳色、オッドファイ虹彩異色症だからってもう片方まで非現実的ってどうなの。

うん、黒くしよう。

十> バタッ

5 - 3 , 集う兄弟

空は紅色。

夕日はもうすぐで沈んでしまっただろう。

彼女は走った。

久しぶりに帰る、自分の家へと。

風で髪がゆれる。

前髪がういて、隠している左眼がみえそうになるのをおさえる。

もう片方の漆黒の瞳は、真直ぐ前だけをみつめていた。

そしてようやく・・・ついた。

家のドアの前にたち、鍵をまわしている少年が目に入る。

あれだ・・・。

彼女はその少年に近づき、肩をたたいた。

振り向く少年。

彼の目はとてつもなく大きく見開かれていた。

「姉ちゃん・・・」

まったくといっていいほど違いのない二人の顔。

「学校・・・いつてるんですね・・・」

彼女の息はとて荒かった。

全力疾走でもしてきたのか・・・な？少年 涉はそう思う。

「いつてる」

渉はにこつと微笑んだ。

「学校・・・いったら、姉ちゃんかえって来ると思ったから・・・どうして

麗は戸惑った。

弟の言葉をきいて、彼女は戸惑った。

「だって・・・オレがずっと家にいたから・・・姉ちゃん此処が嫌いになっただろ・・・??姉ちゃんも兄ちゃんも別々に暮らしちゃって・・・お金はあるのに・・・つらかったから!!!」

「つらい?」

「つらいよ!!!」

彼の目からは涙が流れでていた。

「つらくないわけない・・・」

そういつて、渉は姉に抱きついた。

涙を流したのは 渉だけだった。

麗は感情をあらわしていない。

何を考えているのか、それは彼女自身にしかわからない。

彼がくるまで、そこにしばらく音はなかった。

その場に響いていた鳥の鳴き声をうちけた彼の足音。

二人ともすぐに気付いたようで、さっと振り向く。

渉は自分の顔を袖でふきながら。

目を丸くしたのは二人だけじゃなかった。  
歩み寄ってきた彼もまた。

「う……らら？」

震える彼の声。

「兄ちゃん……？」

呼び返したのは麗ではなく、渉。

沈黙が流れる。

さきに口を開いたのは兄、啓だった。

「麗お前 もしかして」

それをきいた麗は一度、憫笑して

「もしかしなくても……」

貴方方の望みどおりに 僕は動いてしまっていたのかも知れませ  
ね」

その場を去ろうとした。

「麗」「姉ちゃん！」

同タイミングに彼等は叫んだ。大切な人へ。

麗は振り向かず、夕日に向かって歩き去るだけだった。

5 - 4 , C H A N G E

麗がいなくなつてからも 彼等の会話は続いた。

「お前さ 一人でここいんの」

「じゃなかったら何」

男だけになつたその場に流れる、気まずい雰囲気。

「俺んとこくるか？」

手を差し伸べる、兄。

「何・・・いきなり・・・」

頬を赤らめる、弟。

「小学生一人で暮らしてるとか異常だろ」

頭をぼりぼりとかく、啓。

それをいやらしそうに、渉は見つめる。

「今までほつたらかしたってたじゃん 兄ちゃん」

「麗がいるとおもつてた・・・」

こたえた啓の泳ぐ目をみて、渉は事実を悟る。

「嘘 兄ちゃんも知ってるだろ・・・」

その言葉に啓は黙り込む。

しばらくしてから、彼は口をひらく。

「・・・知ってる」

そして沈黙がながれ、 啓がそれを打ち消すように口を開いたものの

「お前 何食つてんの？」

「コンビニとかで買ってる」

「・・・」

話が続かない。

「金は」

「困るか」

まあ…… そうなただけだな……

啓も涉ももう 限界に達しているのかもしれない

何の限界か……？ それぞれの そう、限界

「兄ちゃん、かえるな……」

啓はついに そう、きりだした。

「とりあえずさあ 顔出しかでもいいから、来いよ 学校行ける  
んなら来い。」

「……」

歩き出そうとする啓の姿を、ただ見つめる涉。

「今すぐ俺んとこ来いってもお前無理だろ？だから住み込むのは  
無理でも

とりあえず来てくれ。

まずお前がかわんねえと 姉ちゃんもかわんないぜ？涉」

涉ははつとして、顔をあげる。

そこには兄の笑顔があった。

「じゃあ」

兄は笑んだまま、沈みきった夕日の方へ、姉と同じようにきえてい  
った。

”まずお前がかわんねえと 姉ちゃんもかわんないぜ？”

その言葉が何度も何度も 涉の脳内を廻った。

そうしたら、みんな変わるのか？

6 - 1 , 試験結果

「雨宮」

社会科の教師であるわたしは、例の問題児に話しかけてみることにした。

彼女は普通に、ふりむいた。

「はい」

「今回の定期、どうしたんだ？」

「何がですか」

感情のこもってない声。

「何って、点数だよ」

あきれてしまう。

「お前、授業に参加してこないから定期こないのかと思っていたのだがな。」

「……」

じつと、見つめられる。

真剣な目。

「で、受けてみたら点数がこれだ」

「これ？」

「初めてだよな。お前の誤字減点」

「……」

相変わらず無口なんだな。

「何かあったみたいだな」

「ないです」

「そうか？」

「誤字脱字がトラブルに関係していてもいっつのですか」  
トラブルねえ。

こいつ・・・一体。

「今まであの点数とってきて、どうなんだ？」

「どうとは。」

「勉強したらとれるものなのか・・・わたしは正直よくわからない。」

「勉強？そうですね・・・」

わたしはそのとき初めて、彼女の笑みをみた。

薄い、笑み。　　なんだかすごく、不気味な笑み。

「そんな珍しい点数なのでしょうか？試験のための勉強もとくにはしていませんしね。」

していない？珍しい点数なのか？

ありえないだろう。

珍しいものにも、平均点50、60であの点数は有り得ないだろう・・・。

空桜と歌波は順位ののっている掲示板のまえにたっていた。

「1学年100人前後かあ。やっぱりこれくらいなんだね。」

初の順位発表緊張するんだけどおおつ。」

「うん…… そうだねっ！」

「みよつか、順位！」

緊張気味な歌波に、空桜が笑いかける。

「え、ああ、うんっ」

二人は自分の名前をさがした。

「あっ！歌波あったあ！」

「えっ?!どこ?!」

空桜が指差すさきを、歌波は焦りながら見た。

「あ……。」

なんとかトップ20には入っているってところ、か。

「歌波すごいねえ」

空桜はにこにこ顔で、さらに順位を眺めていた。

歌波も空桜をさがすことにした。

あった。

「あ、空桜ちゃん平均的……。」

無理だあなんていうから、てつきりもつと悪いのかと……。

と……、なんだか向こうのほうが騒がしい。

あつちは…… 三年生の、かな？

「見てみる？」

となりの空桜も、どうやら気付いたようだ。

うなずく歌波。

そして二人はみた。

「……………」

一瞬で凍りついた。

まさか……………。

1位のらんにかかれた、その名前……………。

雨宮麗

499点……………。

「5教科で失点1……………?!」  
つぶやいた自分の言葉がとて、恐ろしく。

あの人、試験勉強してなかったよね……………。

まわりの表情、そしてざわめきも同じことだったらしい。

「う……………らん……………凄い」

あの空桜までが、苦笑をしている。

ありえない……………この人……………。

平均いくつだと思ってるの……………。

変な噂が広まる前・・・

彼女がまだ、人気だったころだって、彼女の成績を知る者は異常に  
少なかった。

でもまさか・・・。

「やばくない？」

そう、私に耳打ちをしてくる人物があった。

返事をしようとはしているのだが・・・ 呂律がまわらない。

やばいよ？やばすぎる。

でもなんなんだろう、この感じ・・・。

3位の私は何を思う・・・・・・・・・・。

「珍しいなんてレベルじゃないだろう。今まで毎回全科満点。

ところが今回急に失点をつくった。」

「・・・・・・・・」

わたしはがんばって問い詰めていた。

「急に失点といわれましても・・・、僕だって人間ですよ？」

しばらく授業に出席しなかったことは全然気にしていなかった様ですが・・・

試験にはうるさいのですね。」

いや、それは、その。

校内の風紀を乱すような噂がたっってしまったか

気にするわけにもいかなかった、それだけのことなのだが。

にしても。

毎回思うのだが、こいつはその、人間ばなれした実力をもつという神やら悪魔やらなのか。

それとも天才肌というものなのだろうか。

否、たとえそうであろうとこの不気味すぎる雰囲気と今回の失点から考えると

何か細工をしているに違いないのだ。だからこそ問い詰めているのではないか。

「話しかわるがお前、高校どうするつもりだ？進路の希望調査票、だしてないだろう。」

その学力でなら、偏差値70ごえも余裕だろう」

遠まわしに色々ときいてみればわかるはず。

「決めて ないですね そのうち提出しますよ」

6 - 2 , 豪邸に行きたい

そんなこんなで平均的な点数をゲットしたけれど……。勉強してないわりにはまあ、良かったんじゃないかな？ 実際今までもこんなだったし、気にしなくていいよね。

歌波は凄かったし、うららんも天才としかいいようないけどさあ……。

空桜は廊下を歩いていた。

どこへいこう？

歌波は部活の集まりがあるっていったっちゃったし、うららんは生徒会室にいないし。

……暇だな。

ひとり、ぼーっと歩いていた。

ふと、擦れ違った上級生。

彼女は険しい顔をして、空桜をチラ見していった。

空桜も、怪訝な表情をして見つめ返す。

何？あの人……。

そつと振り返る。

と、彼女もまた此方を見ていた。

あわてて視線をそらす二人。

そして再び目が合う。

「……気まずい。」

「凄く……気まずいんですけど。何？この人……、本当に。」

「しばらく流れた沈黙をといたのは、そこへ偶然やってきた人物だった。」

「何してるの、空桜ちゃん」

「かつ、歌波い！！部活終わったの！！」

「やってきたそのひと、歌波をみて空桜の表情はぱあと明るくなった。」

「その光景をみて、彼女は走り去る。」

「なんだっただらう、でも……、  
なんというか……助かった！」

「ねえ、さっきの人は？」

「ほっとしていると、唐突に聞かれた。」

「一瞬びくっとする。」

「知らない。何か擦れ違って、こつちみてきて……」

「じゃあ、知り合いでもなんでもないの？」

「え？何？有名な人？」

「何か、家がすごい金持ちだっけ聞いたんだ。でも綺麗な人だったよね」

「……綺麗？そう？」

「お金もちかあ、いいなあ」

金持ち・・・ といえば、しぐれもお嬢様だったっけ。  
金持ちの家ってどんなのだろう？大豪邸・・・？

・・・あっ

しぐれの家いつてみたいっ！  
会ったら交渉してみよっ

時って本当に嫌に過ぎていく

夢のように消え去って

残るのは少しの記憶だけ・・・

残しておきたい楽しい思い出は

ずっと胸の奥にしまっておけるけど

逆に忘れたい事は 消えてほしくても叶わない

人の夢とかいて儂い・・・

そう 人生なんて儂くて 哀しくて・・・

何のために生きているのだろう

自分は何のために大人になっていくのだろう

そしてこの空は

どこまで続いているのだろう

屋上は好きな場所・・・

できればずっとここにいたいけれど・・・

そうもいかないだろう・・・

久しぶりに・・・

明日から・・・

でてみようか・・・ 授業に・・・

6・2・ 豪邸に行きたい（後書き）

今度、某アニメのキャラクターソングで「記憶の果て」という曲がでるそう  
ですね。

題名カタカナにしておいて良かった・・・

## 6 - 3 , シスコン相談

「八代、ちょっと相談のつてくれないか」  
久々に部活が休みで気分転換ができると思っていたのに、  
面倒臭い先輩に呼び出されてしまった。

何故自分なんかに？

兄弟がいるわけでもないのに、シスコンバカの相談に呼び出される理由がわからない。

「お、来たな。15分も遅刻してるぞ？てっきりもう来ないのかと思ってたよ」

15分？そりや大変だな、体内時計直しておかないと。

「で、妹さんのことですか？」

「だ、だからっ！なんでそう・・・ まあ、でもまあそれに近いんだが・・・」

焦っているのか、なんなのか。

「それで」

「中学生ってさあ、クリスマスどういうもの欲しがるのだろうか」

その真剣さに、思わず噴出してしまいそうになった、がこらえた。

「何故僕に」

「いや、そのだな？んんん・・・ よし、質問をかえよう。」

八代君は、クリスマス、彼女に何をあげますか」

はあ・・・

ため息しかでてこない。

もうなんだかんだいって、相談にのることよりも

この人を先輩とよぶことのほうが面倒臭い気がしてきた。

無視しておけばよかったのか。

「妹さんに直接きけばいいじゃないですか」

「きくつて……そのな？あの、あれだよ、あれ。」

「っていうか！単刀直入にいえてこと？それ？馬路でお前な……」

「単刀直入でなきや。」

「どうやってら行き成り僕の方の話になるんだよって。」

「とにかく話題をそらしておく、か。」

「でも 何よりも気持ちのこもったものが一番なんじゃないですかね？」

「え？気持ち？」

「きよんとする先輩。」

「そして、こいつこんなこという奴だったつけ……みたいな目で見てくる。」

「う、ん…… まあわかった！取りあえずサンキューな、八代」

「何ですか？とりあえずって。すいませんね、お役にたてなかったようです？」

「いや、そういう意味じゃないんだよ、御免！御免て！」

「あつれえ？啓兄ちゃん？」

「ふと、後ろのほうから甲高い声がきこえてきた。」

「お兄ちゃん？え、妹ってもしかして」

「しぐれちゃん？」

「返事をする先輩。」

「しぐれ？誰だ、それ。名前麗っていったよな、確か。」

「これ妹じゃないのか？」

「久しぶりだなっ！」

「うん！……何してるの？」

「え？うん、まあちよっと男同士の会話だよ」

気持ち悪いよ それ。

「へえ。そうなんだあ。じゃあしぐ、もういったほうがいいって」とだよねえ……」

「え?! いや、いやいやあ。久しぶりだしね、」  
何がいいたいのか。

「あつ、じゃあ一つだけいってもいい?

あのね、しぐ、空桜ちゃんって子と、

うららの悪い噂消そうってことになったから!

これからはしぐたちにまかせてね! じゃあね〜!」

そういつて、その子は走っていった。

どうやらこの子はその、うららんとか呼ばれているらしい、先輩の妹  
そして立がいつていた生徒会長 の友達に近い存在であるようだ。

「嬉しいな、何か。しぐれちゃん元気がいいなあ。麗もなあ……。」

何に対して赤面をしているのやら。

「すみません先輩。シスコンに付き合っている時間が惜しくなってきたので

そろそろ僕、行きます」

「ん? ああ、ごめん長くなつたな。て、シスコンて呼ぶのやめよう

」

「じゃあロリコンでいいですか?」

「え、しぐれちゃんってロリ? あ、そうかも…… って、おい」  
「ラ! 待てっ!」

「このやるおおおおっ!」

6・4・部活って正直めんどいよね(前書き)

お久しぶりです、

## 6 - 4 , 部活って正直めんどいよね

しぐれ見つからないし、どうしよう？

なんか暇だし、誰かほかに部活休んでる・・・っていうか帰宅部の  
人いないのかなー？

試験後だからあまりないのかな？？休みって

一人、学校周辺を放浪する空桜。

そこらへんで小学生達がワイワイ騒いでいる。

今日はいないかあー

そりゃあ、住んでるところ知らないわけだしそう毎日毎日会えるわ  
けないよね・・・

刃流中の場所もそんなよく知らないし・・・  
いや・・・きたばかりだから一応

でも本当

良いまちだよ・・・ 此処

個性的な子が沢山いて楽しいし・・・  
頼れる友達もできたし

よし、決めた！

帰宅部にしよう！

放課後まだ明るい時間にここらをぶらぶらしていたいしねっ！

「推薦？私ですか？」

部活の時間に呼び出されたと思ったら・・・

「ああ。君の第一志望校であつたはずだが」

「はい・・・嬉しい、です」

面倒臭い部活をさぼることができたということも嬉しいです先生

第一志望・・・

高校なんて正直どうでも良い

けれど・・・ 推薦してくれるというのならば それは嬉しいこと

かもしれない

「どうした？浮かない顔して」

「いえ」

「そうか？・・・今回、おしかったな」

「何がですか」

「試験結果 3位だっただろ」

・・・試験結果？

3位・・・？

本当はもう少しいいけると思っていた・・・

けれどまさか……ふっ……

「気にしてるんだな？」

え？

「雨宮の点数だろ？」

凶星……

「あれには本当魂消たよなあ」

「はあ……」

「あの 雨宮さん…… 以前もそうだったんですか？」

「まあ……な」

躊躇った？

もしかして……

今までは失点がなかったとか……

まさか……

「あの入っ 裏で何かやってるんですか?! 先生何か…… 知  
ってますか？」

「……」

……

沈黙が流れる。

知っているのか……？それともほんとうに知らないのか……

「わたしもあいつのことは以前から不思議におもっていた……」

「それで？先生」

「だが、何より証拠がない。悪い噂が広まっているようだけれども、  
所詮噂に過ぎていない。

何か裏でしているという確信がまったくないのだよ」

「そうですね……」

先生 私あの人のこと嫌いですよ  
あなたが不思議に思っているように  
私あの人の恨んでますよ

「だが最近・・・ 妙な一年が雨宮あいつと仲良くやっているようだが・・・」  
妙 そんな言葉使っているんですね先生  
確かに妙ですけど

「最近はいってきたばかりの真岸边空桜さん 図書委員」

「ああ、そう 真岸边」

絶対名前しらなかったでしょ なら

「それで あの二人って今どういう関係なんでしょう・・・  
見た感じでは真岸边さん、元気の塊みたいな方ですし一方的ってこ  
とも考えられそうですよね」

「ん、あ、ああ そうだな・・・」

お前随分と詳しいんだな」

「気になって・・・ 色々と」

「そうか・・・」

「ですので 先生何かわかりましたら教えてくださいませんか」

「ん？あ、ああ わかった・・・」

悩んでいるというか、なんというか・・・  
面倒くさいんですよ先生 わかります

私は複雑な気持ちで職員室をあとにした。

6・5、「優等生」はモテ要素に入っていない

わたしはあの女のが嫌いなことが嫌い  
努力なんてしていなさそうだし　今まで散々・・・　あんなことや  
つてきておいて

わたしより頭がいいのね？

ええ、2位の人も勿論嫌いよ。　ライバルだものね。  
でも・・・　あなたは一体なんなの？

人間とおもえないあの結果・・・　いわば神かそれとも悪魔か

担任も何も知らないようだし

わたしが調べるしかないようです

とくに・・・

真岸边空桜という子・・・

さきほど擦れ違った際には何もかんじられなかった  
ただの平々凡々な人にしか見えなかったのよね・・・

きく？直接？

友達とおもわれるあの長髪の子か？

それとも接触のあるあの刃流のチビか？

それとも・・・　あの女に？

頭がいたくなってくる。

わたしの好敵手ともよべるほどの頭脳をもつ人が  
よりによってあんな人

ふざけないでほしい

順位が掲載されるときいて喜んでいたのも束の間で・・・  
あの日あるとき扉をあけてはいつてきたあのツインテール・・・  
なんだかゆるせない

わたしだって人よりは努力していないほうだとおもってもそれをいいことに 今まで生きてきた

わたしの・・・ わたしの美学をなんだとおもっているの雨宮麗

と そのとき彼女の目にある人物がうつった

あれは・・・ 下校途中の刃流チビ・・・？  
目の前にいてはしかたがない。

わたしは彼女をよびとめた。

ふりむく彼女。 何度みても小さい。

「いきなりだけど・・・ ひとつきいていい？  
あなたにとつて真岸边空桜ってなに？」

「は？」  
即答。 無理もないだろうが・・・

「友達。 だからなに？」

ああ、この子 口悪いかも。

「いえ？きいてみたかっただけ ありがとう」

「なに?」

「……めんどくさい子

「あ、よかったら名前教えてくれる?」

「しぐれ」

「……一問一答つてきいてほづ漣くつかれるのよ、ねえわかる?」

「そう しぐれちゃんね」

「だから」

「あ えつとわたしは……まど……  
「窓?」

「まどか……ですけど」

「ふうん」

ムカツクー! チビのくせになにこいつ ツンデレ?クレーデレ?

アニメとかそういうところで見ると萌え要素なんだろうけど、現実  
にいやうとキーモニー!

ああ、だめだわ わたし本性でてる

真面目でしずかな優等生を演じているのに……くっ

気付くと彼女、立ち去ろうとしている。

「ちよつと まちなさーい?」

あわててよびとめるわたし、あたし新まどか。

「なに」

「あ もつすこし ゆっくりはなさない? なにかおいる」

「おごらなくていいよ しぐお金あるから」

わっ わたしの家がどんなものかしらないのかしらっ……?!

「とにかく!!」

「うさぎにつの?」

ウザイ!!!わたし喋ってるしそもそもかいても漢字つかわないし  
!ふざけんなチビツ!

だめだめだめ わたし・・・ もっと演じなければっ

ほら、こういう子ってやさしいお姉様キャラによわいんでしょう?  
多分

だってなによわたし、優等生よ?

こうなったら強引につ・・・

なにがなんでも事情聴取!

と 腕をつかみ、ぐいとひっぱろうとしたそのときだった。

・・・力はいらない・・・?

おさえられている・・・?

この子・・・そんな力がっ!!

しぐれの方をぱつと向き、まどかは啞然とする。

「あ、あああ、雨宮さん?! なななんここにつ・・・」

うそでしょ? なんているのよ? うそでしょ? うそよね?

「なにしてるんですか・・・?」

「なっ なにも?! わたし通りかかっただけよ? ねえ? じゃあ、ま  
たっ」

彼女の冷静な問いかけはその場を立ち去る以外の選択肢をあたえて  
はくれなかった。

やっぱり恐ろしい人です・・・

走りながらわたしは思う。

「なにしてたんですか・・・？」

「うらん・・・ あの人キモイ」

しぐれがそう訴えると、麗はにっこりと微笑みこついった。

「僕もそう思います」

6・6、涙の理由くらいわかるから

しぐれの家

そこに、珍しい客が来ていた。

広い部屋の真ん中あたりにある、ふかふかのソファア。そこで優雅に紅茶を注ぐメイド。

そして注がれた紅茶を美味しそうにのんでいるしぐれ。そんな彼女を、じっとみつめる客。

「あれ？うちらん、もしかしてコーヒー派だった？」

「いえ……」

「えっと……緊張してる？まさか……大丈夫だよ、美味し

いから飲んで飲んで！」

「……」

もぞもぞとしている客、麗。

それを不思議な笑顔でしぐれは見つめながらも、優雅にティータイムを楽しむ。

何故なら彼女は一流のお嬢様だから。

「うちらん、うちくるの初めてだっけ？」

「はい……」

「もしかしてこつこついうの苦手？」

「いえ……」

赤面しているわけではないのだが、口数が普段より少ない麗。しぐれも段々と、気にし始める。

「もしかして・・・しぐ、強引にさそっちゃったかなあ？

さつき偶然あったから、きてほしいなって思ったんだけど・・・

」

「大丈夫です」

「そうー？うららん顔色悪くない？学校の外にでると調子悪いとか  
く??？」

「ちっ 違いますよ・・・」

「えゝ ほんとく??？」

からかつてみても、反応が変わらない麗。

「ねえっ 本当にさあ・・・どうかしちゃったの？」

「・・・」

一瞬だけ、麗の瞳が揺らいだ。

しぐれはその瞬間を見逃しはしなかった。

「正直にこたえてね？うららん、こついう家は苦手なのね？」

「・・・」

「・・・」

「・・・すみません・・・」

「だよねえ・・・やっぱり」

「・・・」

沈黙が流れる。

「・・・あれっ？うららん家ってお金持ちじゃなかったっけ？」

しぐれがふと、きりだした。

きよとんとする麗。

「そうよべたのかもしれませんが・・・でもそれは昔の話ですよ」「昔?」

「弟が生まれて間も無く、両親が事故死したんです」「えっ・・・それで・・・ごめん・・・」

「いえ・・・そこで、僕の8歳上の・・・当時13歳だったでしょうか・・・?」

兄が弟の面倒をみてたんですけど・・・」

「それぞれ成長したあと別々になった」

「はい」

「そっか・・・両親のお金をそれぞれの生活費につてことなんだ・・・」

「ごめんね・・・見せ付けるようなことしちゃって・・・本当にごめんっっ!」

しぐ・・・うららんのことまだまだ全然しらなかったんだなって思うと、本当くやしっ・・・」

「気にしないでください、しぐれは悪くないですよ・・・?僕も・・・なれないとおもってますから」

うららん・・・本当に自分はなにもしらなかった

うらんの気持ちなんて全然考えていなかった・・・?慣れる?なにに?しぐの環境になれたら、両親おもいだすですよ??

やめてっ……悪いのはしぐなの……やめてっ　もうそれ以上……っ

「つくづく思いますよ

自分は本当に不幸な人間なんだと」

「そんなことないっ！！！！」

思わず叫んでしまっしぐれ、麗は目をまるくする。

「確かに！！うららの周り、色んな人が不幸なことになってる！でもっ……でも

うららは不幸なんかじゃないっ！！！！

うららはどうおもってるのかしらない！しらないけど……いまここにしぐがいるじゃないっ！

空桜ちゃんだっているんだよ！しぐたちはうららのこと友達だっもおもってるんだよ！！！！

あきらめてちゃ前になんか進めないよ！何も見えてこないっ！！！！

前に進めばっ……　今まで見えなかったこともきつとみえてくるっ！！！！

自分を信じないで……　ほかにだれをしんじるの？　だれの力をかりて生きていくの？

ひとりじゃ人は生きていけないんだよ　誰かに愛されてるからこそここに生きていられるんだよ???!」

ハア　ハア　……

啞然とする麗。

かすかにふるえている。

「しぐたちはうららんのことずっと支えたいって思ってる  
そしてずつとうららんに支えてほしいって思ってる

だから 泣かないで」

はっとする麗。

本人も、気付いていなかったようだ。

涙が流れでていたことに。

うららんきつと・・・

さみしかったんだよね

いつもつよがってばかりいて・・・

誰にも素顔をみせないようにしてる・・・

でも本当は・・・

本当はさみしかったんだよね・・・

周りの人がどんどん消えていく

そして自分は悪者扱い

無理もないことだが うけいれられない

夢を・・・

夢をみていたはずなんだ

何か希望が・・・ あつたはずなんだ

かなえてあげたい・・・

まず、まず自分が・・・・・・・・支えてあげなきゃ・・・・・・・・！

しぐれは強く、心にちかった。

7-1、蛙の兄は蛙以外の何者でもないはず

本日も快晴っ！

そして今日は土曜日だっ！！

帰宅部のわたしにとってはかなり楽な曜日なのです  
歌波とかしぐれとかは部活あるんだろうし・・・

うーらんは何やってるんだろう？

暇だしっ！晴れてるしっ！いつてみよう！

何故いつもよりテンションが高いのかって？ 理由なんてないよ  
普通！

なんせわたしはいつでも元気もりっもりだかね！

しいていうならもうすぐクリスマスだからとかかなっ！！

るんると、スキップをしている気分で学校へと向かう空桜。

だって、本当にスキップしたらわたし変な人になるから・・・。  
したいけど・・・。

いつもの商店街をぬける空桜はおもっ。

今日やけに男子多くないか・・・？向こうの男子校、部活が休みにな  
ったりとかしてんのかな・・・？

と、ぼーっとしていたとき、不意に呼び止められた。

「はい？」

振り返るとそこにいるのはやはり男子。

「落ちてたけど」

え・・・？ ああ、ハンカチ。でもこれ

「わたしのじゃないんです」

「そう」

「あでも・・・それ絶対女子のだし わたしが預かりましようか？」

まわりにきいてみるんで」

つていつても、心当たりもないし持ち主が見つかるわけがない。

ただ・・・なんとなく？

「うん・・・あ」

「あ？」

「それ、名前かいてある」

指差すハンカチ。

「あ、ほんとだ」

よくみると、薄い色で刺繍がされている。

これ普通気付かないよね・・・。

「SAYU・・・さゆ？ つて誰だ？」

どこかできたことがあるような・・・ ないような。

と、空桜はそのハンカチをひろった男子が立ち去ろうとしていることに気付く。

「あの・・・」

空桜が彼を呼び止める声は、

「あれ 八代じゃねーか 最近よく会うよなーお前」

という青年の笑い声に消された。

「何ですか」

「何って、ほら 偶然だつて！ んお？えっ、新しい彼女か？！あつれ〜 りっちゃんどうしたんだよお前！」

えっ わたし？！

え・・・ え？！何？！

「違いますからね」

そういつて彼は再び立ち去ろうとする。  
今度はだれもとめなかった。

「お前」 やっぱ彼女なんだろう？」

「え？つと・・・ 違います 知り合いですらないですよ」  
誤解はとかないときがすまないタイプなんですよ、わたし  
つていうかこのひと、だれ？

知らない男の人だし、わたしも去らなきゃ・・・ と、歩き出すが  
男もまた、ついてくる。

「あの・・・ ついてこないでください」

「ついてってないよ 偶然だから でさあ、どうい関係なの」  
無視っ！

こんなヘンタイ相手になんかつ！！

校門をくぐってもなお、ついてくる男。

なんなのっ・・・！！

うつ・・・ 生徒会室に逃げ込むう！！

勢いよく扉をあけると、そこにいた麗は当然のように啞然とする。  
だってさ、知らない男の人ついてきてるんだよっ  
ねえ、先生よばない？よんだほうがよくない？

「何度もいいますけど！！ここ女子校ですよ？！ノコノコとはいり  
こんでこないでください！！」

何度いつたらわかるんですか？なんなんですか？あなたヘンタイ  
ですか？」

あ・・・

あの、うつららん？

なに？うららんちよつと　そういう人だっけ？

「なんかお前人柄かわってね？」

それでこの男なに？ストーカーなの？うららんの？まじで？

「かえってください　今すぐ」

あのさ、うららん　わたしの存在……

「空桜さんも何故つれてきたんですか！」

あ、気付いてた。

何故って………　つれてきたわけじゃないんだけど。

つて、あれ？　ん？

いま、空桜さんってよんだよね？　進化した？！　真岸边さんから、

ついに空桜さんに！

でもまだ敬称ついてるんだよねえ　不自然……

つて、今はそういうのはおいておいて……！

「女子校女子校いうけど、ここの職員、　普通に通してくれるじゃん」

「………」

「ほら、一応保護者だし。　授業参観ってお父さんくるだろ？ならお兄さんだっつい……うごっ！」

喋り終わる前に、麗の華麗なるキックが、見事大事なところに命中……。

つていうか！お兄さんだとおおおおおお？！  
に、にてねえ

弟はにてるのに何で兄似てないんだっ

っていうか！何で兄が訪問してきてるんだっ！  
シスコンでしたかっ えっ、シスコンンンンッ？！

「それで！用がないならかえってくださいね  
何しにきたんですか。」

「用くらいあるって。これ渡しに着たんだよ」  
ポケットをゴソゴソといじるお兄さん。  
取り出したのは一通の手紙・・・？

「渉から」

「・・・」

渉ってたしか、弟の名前・・・だっけ？

「何でまたあなたが」

「ほら、渉が直接わたしにきたらさ、この女子たちにモテモテに  
なって・・・がはっ！」

ブラコンでもありましたかああ！

華麗なるキーツク二発目・・・。 南無・・・。

たしかに渉クン、かわいいけどねえ・・・。

「これですみましたか？かえってください」

「ったく つめてえな・・・ いてて」

ようやくかえる気になったらしい、お兄さん。  
ガラガラと 扉のあく音がする。

その音にまじってきこえたお兄さんの声。

「できそこない妹だけど仲良くしてあげてよ」

できそこないお兄さんもってるなんてご愁傷様ですよ……！

7・2、知りたくない事実を調査すること

時間は少し さかのぼる。  
それは先日の夜のはなし。

彼女の家のチャイムは突然、なった。

時刻は夜の8時。

こんな時間に……？

彼女はそんな疑問を抱きながら玄関へとでる。

そしてあけたドアの先にたっていたのは見知った顔の彼。

「どうしたの？」

「ききたいことがあったから」

「えっ 電話でいいじゃない……」

「なんとなくきたかった」

その言葉をきいて彼女はすっと微笑んだ。

彼を通し、静かなリビングへと案内した。

「今お茶いれるね」

「いや、いい」

「え？」

しばらく黙ってから、彼女も向かい側の椅子に座った。

「春田が亡くなったの いったっけ」

「は……?」

いきなりすぎるその質問に、彼女は言葉をうしなう。

「7月10日…… 未来の誕生日の日…… だよ」

「やっぱりそうか……」

「どうして?」

「携帯のさ、 メール整理しようとおもってたらみつけたんだよね

春田からの着信、 7月9日」

「え? 7月9日??」

「自分は何があってもあの生徒会長を疑い続けると思う。そしてうらみ続けると思う。っていう感じの文章だった」

「どうしてそんなものが……」

「君、あるいはほかの誰かと間違えたんじゃないか?」

「…… 私? か誰か?」

彼女は戸惑っていた。

どうして…… どうしてそんな文章を亡くなる前日に……

そしてどうして彼のところへ……?

「俺そのときは気にかけてなかったけど……

今みたらさ。これ、事故死じゃなくて自殺だったんじゃないかとか「ちがつ!!」

思わず、彼の口をふさいでしまった。

「ごめん…… ごめん…… 私もそうじゃないかって思ったことあるのに……

私…… だめ…… 受け入れたくなくて…… ふわ」

今にも泣きそうな彼女を、彼は抱きしめた。

赤面する彼女。

しばらく・・・ 彼等はそのままだった。

## 翌日

彼は一人、商店街を歩いていた。

そこで見つけたのは、一枚のハンカチ。

SAYUと名前のかかれた女物。

よくみると、前に女子がいる。

彼は話しかけた。

「落ちてたけど」

呼び止めた女子は、そのハンカチを受け取ってから、こういう。

「わたしのじゃないんです」

そう、彼女は答えたが、どうやら持ち主をさがしてくれるらしい。  
有難い。

ならばもう、用はない。

彼は立ち去ろうとしたとき、不意によびとめられた。  
最近よくみかけるシスコン野郎だった。

なんとかかそいつをおしきり、彼は再び歩き出す。

そのとき、携帯の着信があった。

メール・・・？

八代「、未来の妹のさゆちゃんについてわかったことがあるから、後ではなしきいてくださいね」。

その内容をよんで、彼ははっとした。

先ほどのハンカチに書かれた名前……

さゆ……

まさか。

7・3、生徒会長は全生徒の顔と名前を知っている

「それでこのハンカチなんだけど……」

麗の兄がかえったあと、空桜はうららに尋ねてみた。  
先ほど預かったハンカチについて。

「それ、名前はかかれていないのですか」

「かいてあるよ、さゆって」

「さゆ？それだけですか？」

「うん そう わかる？」

麗はしばらくかんがえ、そして口をひらいた。

「この学校に”さゆ”の文字がつく女子生徒は4人いますね

3年B組前迫小百合さん、2年A組春田紗優さん、2年C組白北  
さゆねさん、

そして1年A組山本沙友里さんです」

それをきいて空桜は啞然とした。

「なんでわかんのか……」

全員の名前おぼえてんの？」

「はい」

即答。

開いた口がふさがらなくなってしまった空桜。  
それを怪訝な表情でみつめる麗。

どうして不思議な光景である。

「わわわ・・・わたし、春田さんって人しか知らないや・・・  
」

「ええ、僕も事実上は」

事実上・・・？

ほか三人はただ名前をしっているだけってことですか・・・？

「じゃああたし、春田さんって人にきいてきたほうがいいよね・・・  
」

「あ、僕がいきましようか」

え、でも・・・。

その人とうららは・・・。

「いきますね。かしてください」

はい・・・。

仲直りするつもりなのかな  
誤解をとくつもりなのかな

春田さんはうららんのこと 嫌ってた・・・。

仲良くしたいのかな

過去を忘れてほしいのかな

うららんは春田さんのこと どうおもってるんだらう……

情けない？

それとも憎い？

忘れたい存在？

謝っておきたい人？

それとも謝ってほしい？

わからない。

わからないまま、わたしはあのハンカチをわたしてしまった。

もしそれが彼女のものだったとしたら？

もしちがっていたとしたら？

彼女はどんな反応をするのだろう。

わからない。

わからないけれど、うまくいってほしい。

そう願ったのか、わたしはわたししてしまった。

うららはでいてってしまった。

うららん……

ごめん ごめん

ごめんね 無責任で

ごめんね

悩ませちゃって

ごめんね

こういふとき 支えてあげられなくて

悔しい

悔しい

悔しい

自分が 憎い

うすらん

ごめん

わたし・・・・・・・・

#### 7・4・支えあつからこそ生きていける

彼女は屋上にいた。

いつものように、空を眺めて。  
それから、フェンスに手をかけ下を見て。

もし私が死んだとしたら 悲しんでくれる人はどれくらいいる？  
まず雨宮は必ず喜ぶし

お姉ちゃんの友達らしいあの立雲って人や椎名君が悲しんでくれる  
わけもないし

お母さんお父さんはお姉ちゃんのことしかみていなかった

それにもしかしたらお姉ちゃん、はやく私も 傍にきてほしいとか、  
おもってるかもしれない。

私がいんだら喜ぶかもしれない。

ならば、たとえ私が悲しまれなくとも

お姉ちゃんを喜ばせられるのなら……………。

でも

一度とめられてしまうと なんだかもう 勇気がでない。

あの子の言葉は強烈だった。 思い出したくない人もいた。

そのせいなのか……………？

今此処で立ちすくんでしまっているのは……………。

そのときだった。 すぐ横に人影を感じたのは。

驚きそちらを向くと、風に流れた二つ結びが私の顔にあたった。  
気がつかなかった……………。

その人は

とても とてもとてもとても恨んでいた・・・ いや今もなお恨み  
続けている人なのに

とても とてもとてもとても憎き存在なのに  
その横顔が神の彫刻のように思えて

彼女は此方にハンカチのようなモノをさしだした。

SAYUとかかれたそのハンカチ。

それは昔 お姉ちゃんがかつてくれて・・・

すぐモノをなくす私のために名前をかいてくれた 大切な 大切な  
モノだった。

私 また落としてたんだ

どうして気がつかなかつたのだろう  
自分が悔しい。

くやしみながら、私はそれを受け取った。

ありがとう、なんていわない。

何故ならこの人は憎い人だから。

ひろってもらっても 嬉しくもなんともない、そう思ったかったか  
ら。

「綺麗な字ですね お姉さんですか？」

神の横顔は私に笑いかける。

「お前はその綺麗な字の私の姉をころした」

なおも笑い続けている彼女。

麗しき笑顔。

今までこんな感情をいただいたことは、あつただろうか・・・。

「あなたのお姉さんをひいた車を 僕が運転していたとでも？」

「違う お前がいたからひかれたんだよ」

「ならば 僕がおしたとでも」

「精神的にね」

ゆずらない。ゆずれない。

だって お姉ちゃんが事故死した原因は・・・ この人なのだから。

そういえばこいつのこんな笑み・・・ はじめてみた

こんな風に笑えたのか・・・？

お姉ちゃんの死を・・・ 嘲笑っているのか？

ふざけるな

「未来が死んだ日は彼女の誕生日の前日です」

お前・・・！！

そのとき彼女は割りはいってきた。

驚いているのは私、紗優だけではなかった。 横の彼女もまた。

「未来はいつていました。

自分は何があっても雨宮さんを疑い続けて、うらみ続けると思う、

て。」

「……………」

「でも私は雨宮さんはそんな人ではないと思っています。

噂は耳にしていたんです、大人気の生徒会長の噂。

それで私、昨日から考えていました。

彼女を精神的においつめたのは 雨宮さん自身ではなく 雨宮さんのフアンの子たち」

……………は？

いきなりきて 何をべらべらと…………

「うららんに不信任いれた3人を探そうと、ほかの人たちがして  
それで傷つけて 傷つけられた3人は自らをおいこみころして  
それがうららんのせいだと皆が思った  
だから比較的めだっていた春田未来つて子をみんなはまた傷つけた  
それでうららんの噂のはなしができあがった」

こいつ……………?!

麗は目をまるくしていた。

突然現れた、二人の刃流生……………。

そして突然いいはった、事実……………。

「先輩に、うららんのこときかれて 色々教えたら 色々わかったから

しぐ、うららんに会いたくなって きちゃったの」

「しぐれ……………」

「すみません私 勝手に調べてしまつて。

先日………… 未来のこと思い出して、それで奏さんが詳しいときいたもので」

「鳩羽さん……………」

啞然としている麗と、怪訝な表情の紗優。

こいつら 何者……………?

紗優は眉間にしわをよせる。

それに対して しぐれは屈託無い笑みをみせた。

こいつら

笑い方 似てる……………?

でも雨宮は屈託無くない感じがする…………

寧ろ、悩み事を隠して笑っているように感じられた。

でも似てる……………。

紗優は不思議でたまらなかつた。

「ほーらっ しぐ、うららんのこと支えるっていったっしょ

だからね………… 悪い噂を明らかにして、それでといて、うららんの人気をとりもどしてあげたいなーって。

そしたらね、しぐ、うららんファンクラブの会長になるんだあ

「

「私も 未来が本当は悩んでいたのではないかと、事実を知っていたからあんな風になっていたのではないかと

思っています。。。そのためにも私は雨宮さんに協力したくて。

駄目ですか？」

「嬉しい……………です」

7・4・支えあつからこそいきていける(後書き)

登場人物の人気投票に最近憧れています

7 - 5 , 続いて紗優革命

大人気の生徒会長・・・ そんな言葉 自分にはきつとにあわない

自分は人に嫌われないよう 生きていた  
でも 結局は嫌われてしまった 憎まれてしまった

自分は最低な人間だ  
愚かな人間だ

自分は 生きることの楽しさを忘れてしまっていた

それでも そんな自分をみとめてくれる  
そんな人がまだいたなんて 夢にもみなかった 寧ろ諦めきっていた

嬉しかった

ただ ただなんとなく嬉しくて

「だから紗優ちゃんももう、雨宮さんのこと責めないでください  
未来はのぞんでないはずなの」

「お前・・・ お姉ちゃんの友達なんだろ・・・ 憎いとはお  
もわないのか？」

「友達だからこそ 未来を助けてあげたいんですよ

あなたのお姉さん、そしてあなたに復讐なんて言葉は似合いませんもの

「事実を信じましょう?」

「事実を信じる?ふざけんな お前は良い子ぶってるだけだろ・・・

」

最後が弱かった。

うつむく紗優。

それをじっとみつめているのはしぐれ。

無表情である。

「確かに 私は良い子ぶっているようにみえるかもしれませんが、きちんと親友のことをおもっているつもりです

でも、あなたは違うはずですよ

良い子ぶっているようにもみえないくらい あなたのお姉さんへのおもいは強いはずですよ

紗優は言葉を失った。

瞳がゆらいでいる。

そして小さく 「お姉ちゃん・・・」

そう、つぶやいた。

「私も奏さんも・・・ 他校の人間ですよ? それでも

協力者として認めてくれますか? 雨宮さん

認める・・・??

こちら側が・・・?

今まで いや今、 自分は誰かにみとめてもらえてとても嬉しく感じている

そんな自分に 相手をみとめると？

断る権利が・・・ もうないではないか

「ずるい人ですね・・・ 鳩羽さんて」

彼女は微笑んだ。

「笑ってるうららんが一番素敵だよ

可愛いんだからさ」

しぐれもまた 満面の笑みでかえした。

「雨宮さん 一応同じ学年ですから 友達になってくださいよね そのうち」

立雲の笑みもまた 爽やかだった。

紗優はその日も空をながめていた。

ただ、前までとは違う感情をいだいていた。

「お姉ちゃん 私お姉ちゃんの方まできちんと生きるから  
だからいつまでも見守ってね・・・」

屋上で 彼女は叫んだ。

## 8 - 1 , 人に好かれる人間

人間は 実に不思議な生き物である

例えば 優等生を演じるこの自分

人間は 人の心をみぬけぬ者ばかり

だからみな 騙される

このわたしにたいしてお世辞ともいえないようなほめ言葉をかけてくる同級生や後輩

このわたしをいとも簡単に志望校へと推薦してくれた教師

そのまえに、このわたしにどうでも良いような高校を志望させた両親

実に不思議だ

刃向かえば墮とされる そんな妙な噂を耳にしたときは 半信半疑  
だったけれど

実に不思議だ

まさか本当にそのようなことがありえたとは

わかっている

その噂が どのようにしてなりたったのかなど、考えなくてもわかる

簡単すぎるトリック

なのにまわりは気付いていない  
噂を信じきっている たかが噂なのに

実に不思議だ

噂をしんじているくせに 事実をみぬけていなかったくせに  
彼女に近づき笑顔でふるまっていたあの一年生

擦れ違いざまに私を怪訝な表情で見、見て見ぬふりをしてくれたあの一年生

あときはとくに何もかんじなかったけれど

何故そこまでこだわる

最近耳にはいつてくる噂は 数ヶ月前とは異なり  
あの一年生のことばかりではないか

実に不思議だ

こつもわかるものなのか  
こつもかわった人間がいるものなのか

わからない

何故あのような接し方ができるのだろうか

わからない

彼女は一体何を考えているのだろうか

わからない

自分も一人の人間でありながら わからないこと わかること  
どちらもたくさんありすぎて  
なんだかんだいって わかっているのにわからない

人間は実に不思議で興味深くて  
わたしの感情をくすぐり

兎に角 楽しいものである。

「あつたらっしちゃん」

と、そうこう考えているうちに授業が終わっていたようだ。

「さっきの時間、なんかずっとぼーっとしてたけどどうしたの？」

「うん 考え事してた ちょっとね」

つくり笑いを見せる。

こいつはわたしの友達を名乗る奴。

「そっか 体調でもわるいのかなっておもっちゃったよ」

「まさか」

「うん よかった」

微笑みながら、彼女は隣の席に視線をやった。

「気になるの？」

「・・・気にならなくはないかな？ 頭いいみたいだったし・・・」  
ほとんど毎日、あいている席。

学校にはきちんとしているのに 何故か授業にでてこない  
テストはきちんとうけていたのに。  
あんな点数をとって。

はあ・・・  
信じられない。

「雨宮さんと話してみたい・・・私」

話してみたいって・・・ 何故に

「だって・・・ 可愛いじゃん・・・」

はあ・・・  
ばかばかしい。

「可愛い子と友達になるのが夢だったからねっ だから新ちゃんとも友達なわけで」

わたしはあなたのこと 友達だとおもっていませんよ クラスメイ  
トさん

そういう理由でわたしをえらばないでくださるかしら・・・  
結構繊細なの 可愛いなんていわれても嬉しくくないです

「新ちゃんは、ある？話した事」

・・・ある

3年前・・・入学式の日

わたしに一番最初に声をかけてくれた人

まさかあんな人になるとはおもっていなかったから

友達になるうなんておもって見たけれど 人気な人って苦手

わたし ひいたもの

あの子のあの姿みて

まあ

きっと彼女は私のこと 覚えてはいるだろうけど

時の流れも残酷よね

8 - 2 , 2年半前(前書き)

現3年生の 入学式の時の話

8 - 2 , 2 年半前

桜も空も とても綺麗な日だった  
皆の笑顔もまた輝いていた

ただ一つ 曇っていたのは己の心中  
これからはじまるは中学校生活  
期待も何もせず  
ただ

周りの声に鬱陶しさを感じていた

クラスが発表されている掲示板  
毎年恒例 私は出席番号1番  
何組かなんてすぐにわかった

なのに何故

あの日あのとき

自分の一つ下の名前に 興味をもったのだろう

「雨宮・・・レイ？」

つぶやいた私に、後ろから

「うららです」

と 声をかけてきた人に 不思議なオーラを感じたのだろう

「同じクラスみたいですネ よろしくお願いいたします」  
彼女の笑顔は無邪気で可愛らしかった  
そんな感情を抱いたのはそのときが初めてだった

「嗚呼、うん えっと私 新まどか」

苦手ながらも、私は笑って見せた。  
作り笑顔だったのか、心底から笑っていたのか・  
今となってはどうでも良いことだが。

「雨宮麗です」

彼女もまた . . . . .

「あ、あつた 同じクラスだ」  
「お、おおー！本当だ！良かった〜立〜」

隣の板のあたりでは、また違った笑顔がみられた。  
ボードの中のをあたりをさす二人。

「出席番号並んでるし〜！私ら最強だね！」  
「頭文字同じだからねー 苗字」  
「あ そっか！春田も鳩羽も同じじゃん！」  
「あれ 気付いてなかったの？」

友情。

それは輝かしい、友達同士の、笑み。

「ん？ねえ未来」

「何？」

一人がある方向を指差したからだろう、二人は同じ方を向いた。

「教頭・・・だっけ？何してるんだらう？」

「何ていつてるかきこえる？」

と、

「新入生代表の挨拶だってー」

「え？あの子が？ああ、新さん？」

「違う違う、あっちのツインの方」

そんな声がきこえてきた。

どうやら、教頭らしき人物が挨拶について話しているようだ。

「ああ、そういうことか」

「っていうか、あの子誰？あれって、入試トップだった子じゃないの？うち私立だし一応・・・」

「何で？」

「ほら、あの隣にいる子、新まどかちゃんっていうんだけど、何か小学校で超成績良かったらしいんだよ」

だからあの子がトップだっと思って・・・」

「あ、それだったら私もきいたことあるよ。あの子たちじゃないけど、頭良いつて子が」

「あの人 誰・・・？」

二人がみつめる先の その少女

二つ結びが可憐らしく

.....

### 8・3、どちらを選ぶか頑張るか

「一人ずつたてついたら殺されるんなら・・・ 集団でランチしちやえばこつちのものなんじゃないの？」

「いや、はじめは3人だったよ。てかたてついたらわけじゃないじゃん」

「ためしてみる？」

「誰が何を」

「やってみる みたいな」

「断る 私は断る」

「私も」

「お前やれよ」

「は無理」

体育館裏

4、5人の女子が集まって こそこそと話している。  
そのわりには声大きいが。

「一人目と三人目はさ、ありえるけど 二人目と・・・あの春田つてやつは自殺なんですよ？」

「てか一人目死んでないから」

「え？春田って事故死じゃないの？」

「自ら道路にとびだしたってやつだよ」

「馬路で しらなかつた」

「兎に角 分担よ」

「分担？」

「一人はほら、兩宮のところいく、ね。で、あとの奴らで仲間集め。」

あ、私は企画しとくからどこにもはいらんわ。」

「ずるくね？」

「一人とか誰がいくし」

「歌波いけば？」

「え 私？」

歌波はそのときはじめて その場で口を開いた。

「さつきから黙って聞いてたけどさ どうなの」

「だって こわくない？ 集団っていても・・・この人数じゃ」

「これから集めるんだし」

全員の視線が歌波に向けられている。

だが歌波は決して震えたりはしない。

「歌波あれでしょ、真岸辺だっけ。あれとつるんでるから」

「え、私よりあっちすか？」

「それはない」

「じゃあそれ利用して話しかけて、最終的に裏切るみたいなことや  
つちやいなよ」

「え」

凍りつく。

にやけている顔もあれば、無表情もあるが 彼女だけは・・・。

「裏切るって」

「友達になる 偽りのね」

「馬路すか ちよつと頭いいよね」

「いいじゃんいいじゃん がんばってこいよー」

「.....」

言葉がでてこない 呂律が回らない

どうしたら良いかわからない どうしようもない

「じゃあよろしくね！」

さて 私らを裏切るか 計画通りあいつを裏切ってくるか.....

・ アハハハハハ」

どうする

どうする

どうしよう

どうしようも ない

ならば裏切るのは

勿論 .....

「何考えてんの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？ああ、ごめん」

近くの商店街  
とある喫茶店

一組のカップル

「それよりいいの 文化祭の準備」

「うん・・・・・・・・ だいたいできあがったし、吹部は。 まああの子

次第じゃない」

「助っ人の」

「そう奏さん」

会話が続かない

それぞれ頼んだ飲み物を飲みながら

一人が窓の外を見ながら話すも

もう一人は上の空で

「春田に関係してる人だっけ それ」

「ん？ うん雨宮さんと」

「あ この間春田の妹に何かいったとかいってたね」

「……うん いった 自分でも信じられないよ 雨宮さんにあんなこといった私」

「うん 聞いた」

「うん いったよ」

「頑張ればいいじゃん」

「え？」

目があった。

「きてくれるかもよ、雨宮 ……吹部の演奏ききに」

八代………

「頑張ったらいいよ 立」

………うん

頑張る 頑張るよ

頑張るよ

まさか八代がそんなこというなんて おもってもみなかったけれど………  
まさかこんなにも 恥ずかしくて嬉しいことだとは 考えもしなかったけれど………

頑張れば 良いんだ

頑張れば 良いんだよ

頑張るよ

八代のために

雨宮さんのために

聴きにきてくれる人たちのために

そしてなにより

自分のために

8 - 4 , 行事は始まる前が一番楽しい

翌日 文化祭準備で盛り上げる学院内 . . . .

友達と話しながら道具などを運んでいる生徒がほとんどのなか  
しぐれは一人、無言で 尚且つ笑顔で歩いていた。  
手に、黒い楽器ケースだけをもち。

周りから噂声がきこえるが 気にしない。

くすくすと笑ってくる人がいても しぐれは決して気にしない。

そんなしぐれは、音楽室の前で一度、足をとめた。

「先輩います か」  
扉も開かずただ入り口にたち 笑顔のわりには感情のなさすぎる声  
で。

だが扉はひらいた。

しぐれが超能力を使ったわけではない。

先輩と呼ばれた人物が、中からでてきたのである。

「奏さん！きてくれたんですね」

鳩羽立雲。

ショートカットでボーイッシュな外見をしているわりには優しげで  
ある。

そして麗と似たオーラをまとっている。

「. . . . .リハー. . . . .サル」

「はりきってるのね奏さん。」

ええ、もう少しでステージもできあがるそうだから、後でいきましよう。」

「・・・で」

「それまで練習します？どうぞ、入ってください」

楽しそうではある。

だがあまり呂律がまわっていないようで 言葉が途切れ途切れになっ  
てしまっている。

緊張ではない。違和感、だ。

目の前の人物とは 数日前に仲良くなった。

だが無意識に 同じく数日前に 微笑んだ麗の顔と照らし合わせて  
しまう。

どこか似ているその面影

顔も声も性格も 別人なのに何故か・・・ そう、何故か。

麗が笑うと 嬉しくなる 楽しくなる

立雲が笑うと 勿論嬉しいけれど まず麗をおもいだす

不思議な自分

不思議すぎてわからない 自分。

入った音楽室でならんで座っていた奏者たちに、しぐれに声をかけ  
るものなどいないけれど

立雲がその場にいるのならそれで十分だった。

「では もう一度いきましようか」

立雲の美声が響いた。

「おつかれさまです奏さん」

空が赤くなってくる頃 解散となった後。

今度は立雲の方からしぐれに声をかけた。

「あ、おつかれさまですけど・・・」

「暗いですよ？」

「え？」

「表情」

「あ」

ついには表情までもがくらくらなくなっていたのか自分。  
何を考えていたの自分。

話題、話題。

考えないと 続かないかな。

「あの、先輩っていつ引退するんですか部活」

「え？ああ・・・ 文化祭終わったらしようと思ってますね」

「そうなんですか」

「ここはエスケーターなので・・・ 簡単でしょ？だから皆遅い  
んだと思います」

「そうなんですか・・・」

そういえばつらはんは部活は……  
なんてまた考えてしまう自分は本当になんなのだ。

この間微笑みをみることができたというのに、何を心配しているというのだ。

話題………、話題！

「あの、先輩別に敬語じゃなくても……」  
何の話だ自分っ！

「え、いや……… ついくせで………」  
え、あ、そうなんですか………

つらはんもあの敬語、くせなのかな………って ああもう 話題  
！話題話題話題！！！！

「あの」  
「奏さんって本当 雨宮さんのこと好きなんですね？」

………？

「顔にそうかいてありますよ」

………

「冗談です………あ、れ もしかして凶星でした………」  
「？」

「先輩は好きじゃないんですか？」

「え？」

「うちらんのこと 嫌いなんですか？」

必死だった。

わからない。自分なんてもうわからなくていい、くそくらえ。

「嫌いじゃないです！寧ろ好きです！あ、それで私 もっと雨宮さんのこと知りたいですし」

「本当」

「これは・・・本当ですよ いったじゃないですか・・・前」

.....。

立雲は協力してくれた。あの日の屋上で、そう。

「それに、私だけじゃないはずですよ。乙時雨はともかく、刃流で私が・・・私たちが、広めましょう。」

雨宮さんは悪い人じゃないって」

「.....うん!!!!!!」

「笑顔が一番ですね」

微笑むしぐれに 立雲もあわせた。

8・5、どちらかが演技だったとしたならば

同時刻、乙時雨では

「このたび図書室に新しい本が入ったようですので 整理をしたいとおもいます」

空桜の目の前には、まじめそうな先輩。

その時間、図書委員はこの先輩、正確にいえば委員長 によびだされていた。

先刻、あくびをしてにらまれた。

そのせいでもあるかもしれない。どうも目があわせづらい。

「本の並べ方のプリントを配布します」

隣にすわっている歌波はなぜか真剣。

こんな面倒くさい行事に本気にな<sup>マッ</sup>れる理由がまずわからない。

「歌波つて委員会すきななの？」

そつと耳打ちした。

歌波は首をよこにもたてにもふらず、ただ微笑んだけだった。再び委員長に鋭い視線をむけられる空桜。

このまじめな人、嫌い。そう、空桜は当然のごとく思う。

「では作業にうつってください」

そんなこんなで終わる、説明。

ぜんぜんきいてなかった・・・。

いいや、歌波にきくか適当で。

と、

「真岸边さん」

委員長に手招きをされた。

きつとおこられるのだろう、そうおもいながらそちらへ向かうと彼女は深刻そうな顔をしてみせた。

「真岸边さん、生徒会長と仲いいよねえー？」

随分と嫌そう。

話し方も、先ほどとはまるで別人。

それがまた気に入らない。

麗を悪くいう人は、嫌い。それが空桜の脳内。

「だから・・・なんですか？」

「本の一覧表を生徒会の方にあずけたままだったんだよねーとってきてくれる？」

この人・・・何？

もしかしてさつきまでまじめぶってただけ・・・？

「じゃーよろしくね」

「は・・・はあ」

やっぱり嫌いだなあ、この人。

気持ち悪いつたらありゃしない。

「何・・・変な顔になってるよ？」

「はい？」

「険しい顔・・・っていうの？何、私に恨みでもあるの、気持ち悪いからやめて。」

「っっていうか早くいけよ。」  
「・・・・・・・・・・は？」

は？

は？

まじめぶるにもほどがあるんじゃないですか。  
いわゆる二重人格ってやつでは。  
まさかね。

いや、現実にそんなのいないって。

まさか。

「かすがさき春日崎さん」

と、そこで委員長に声をかけたのは担当の先生。

「あー、はい？」

声調が微妙に戻る。

「ちよつとこつち困ってるんだけど・・・」

「あ、いまいきます。」

違う、この人は意識してやってる。  
自分、わかってる。

何・・・？ こつちが何、だよな。

何・・・？ 私のこと嫌いなわけ？私、委員長ににらまれるような  
ことしたっけ？

何・・・？ 私がたった今あとにした部屋の中で・・・ 歌波と委  
員長がはなしてる。

何・・・？ 二人ともスマイル。 何でスマイル。 むかつくほど  
スマイル。

「うららんに・・・相談するか。」

「うららんならしってるもんね、顔と名前。」 うん、知ってる。

予想通り。

「図書委員長？春日崎真夜かすがさき まやさんのことでしょうか？」  
知っていた。

そしてその名前、ききおぼえがあった。

「え、それってもしかしてこの間のテスト2位だった人？」

空桜がきくと、麗はかすかに眉間にしわをよせた。

「何でそんなことがわかるんですか？」

「うん、3年生の結構見てたから覚えてた。」  
目をそらす空桜。

「・・・そうなんですか」

「で。なんかすっごいむかつくのその人。」

何あれ？二重人格を意識してやってるみたいな。」

「・・・。。。そうですね」

・・・？

「気まずい・・・。。。。」

「僕は嫌いです。彼女のこと。」

・・・。。。。

「ついでをいうと 新さんって方も嫌いです」

.....。

「でも 一番嫌いなのは自分」

.....。

何て なんて返せばいいの？

何で なんでそんなしんみりとしたこというの？

気がしずむよ・・・

最近楽しいのに 気が・・・しずむじゃない・・・？

何考えてるのさ？

「すみません、無駄な話を。それで、何かほかに用事があったのでは・・・」

「え、ああうん。 図書の・・・なんだっけ。本の一覧表？」

「嗚呼、新しく寄付していただいた本ですね。今もってきます」  
「うん・・・」

.....うん

あんな楽しそうな顔してたのにこのあいだ。

やっぱり心のなかに・・・まだ何か・・・暗いものが、あるのかな？

「うらんななんかあったんだったら、相談のるけど・・・」

「・・・・・・・・いえ 何もありませんよ？ はい、一覧表これです」

「あ・・・・・・・・ありがとう じゃあ・・・」

「はい」

まずくはないよね。

そついう雰囲気のかなか部屋でたつて・・・ まずくは・・・ないよね・・・。

私まで不安になったら・・・だめだよね。

8 - 6 , 文化祭前 いろんなところで

「今週末、刃流の文化祭だか学園祭だかがあるんだっけね 行く?」  
「行くと思うよー あいつが行くらしいからさー ちょっとやらかしにいこうかなーとか?」  
くすくすと笑う二つの影 . . .

「てかあいつ何しに行くの?」  
「奏しぐれだよ」  
「え、それってあの奏家の?」  
「そーそ。何か仲いいらしいんだよね?」  
「馬路かよ」  
笑いの耐えない二つの影 . . .

「ていうか歌波たち誘った?」  
「あ、忘れてた けど歌波あれでしょ、ほかに誘ってくれる奴いるつしよ。」  
「そっかーあの何だっけ?おしべだっけめしべだっけ?」  
「真岸边だよ」  
「そーそれぞれ」  
ついには大爆笑と変わる二つの . . . 影。

生徒会室

「でさ?さっきまで委員会だったじゃん?本当ツラざいのね、あの

委員長！

まじめぶっちゃってさーあ！内申目当てかよーみたいなあー！」  
机をバンバンたたく空桜と、黙ってきいている麗。

「うららんどーおもつ？むかつくよね？」

「そうですね」

苦笑する麗。

そしてやはり空桜は不安になる。

さつきみたいな空気にならないように・・・ 必死に話題選んでるのに。

愚痴ってやっぱどんよりしちゃうのかな・・・？

うららのばかつ・・・。

でもここは 私自身が笑顔でいなきゃ

他人にわかることは・・・ できないっ！

だから！

「で、頭いいんでしょう？なんかもう・・・ねっ！

頭いいっていったらうららんもつとすごいよねー！

どづいう勉強してるの??？」

「え?」

「なんかよくわからない本よんでたけど・・・」

「あ・・・ いえ あれは」

「すごいな」 もしかして勉強なしで・・・??うつわ天才!」

「……………」

盛り上がらない……………」

だけど！

「刃流の文化祭いくよね？」

「あ、はい そのつもりではいます」

「そっか！楽しみだね〜」

「ですね」

続かない……………」

だからこそ！

……………」なにをすればいいの？

文化祭大丈夫なのかな……………」あ

## 刃流の屋上

すぐ傍の男子校の屋上にむかって手を振っている立雲。

それをしかとしている向こう側は勿論八代。

反対側には若干遠いが乙時雨が見える。

視力が正常ならそこにいる人数を把握できるだろう距離だ。

下に見える運動場、そして中庭では文化祭の準備が行われている。  
完成した舞台上で演劇部の練習がはじまる。

……あれは

校門のあたりでキョロキョロしているあれは…… 奏さん？  
あんなところで何を……？

と、いきなり走り出すしぐね。

向かうのは商店街の方……？

乙時雨ではないということ…… 家にかえるかもしくは商店街  
そのものに用事が？

何か買いに行くのかな？いや、高校じゃあるまいし。

何やってるんだろう……？

っていうか私もこんなところで準備さぼっていいのかな

## 9 - 1 , 刃流祭開幕

「10時から演劇部、11時から軽音・・・  
昼をみんなで吹部は2時から・・・  
うーんちよつとはやくきすぎちゃったね。」

「吹部だけが目的みたいな発言ですね」

「んー まあ、しぐれのクラスももちろんまわるよ。あと、立雲さ  
ん」

「知り合い以外には興味なし ですか」

「うーん・・・ そうかな！だってまわるよりお店はんのほつが  
楽しいもん学園祭は」

能天気な空桜と、相変わらず薄い笑みを浮かべている麗。

校門のあたりで刃流の生徒たちがビラをくばっている。  
吹部のものだけをもらい、校舎へ向かう二人。

「あー！早速立雲さん発見だー！！」

と、いきなり走り出す空桜。

麗はもちろんそれを追いかける。

「あ、空桜ちゃん雨宮さん はやいねー」  
「いやーって・・・あれ？その人もしかして・・・」

彼女は立雲の隣に一人の男子をみた。

センスの良い私服姿に、仏頂面。

見たことのある人……そうだ、この間商店街でハンカチを……

「ああ、そう 八代」

立雲は笑みをみせる。

「やっぱり彼氏ー！！！！いたんですね……羨ましい」

立雲はちらつと八代をみる。

八代の視線がむけられていたのはハイテンションな空桜ではなく……

「あなたが雨宮麗……さん」

「……椎名八代くん……ですね

こうして会うのは初めて……ですかね」

うなづく八代。

それに、空桜と立雲も気づいて時間をとめた。

「あなたのことは 聞いてます」

「そのようですね」

二人の視線が同時に立雲にむけられる。

虫酸がはしる。

「今度ゆっくり話させてください」

「僕もしたいと思ってました」

・・・あれ？

雨宮さんも八代のことをしっていた？

怪訝な表情の二人。そして立雲もいま、かすかに。

のこされた空桜は 当然のごとく不安におちいる。

・・・この人、うちらんに何らか・・・

絡んでる・・・？

## 9 - 2 , 表裏のはじまり

### 音楽室

そこでは最終確認が行われていた。

本来吹部でない人も混じって奏でたそのメロディーはもうすでに100%をこす美しい音色となっていた。

「おつかれさま。 わざわざ集まってもらっちゃってごめんね、みんな。

でも、覚えてて。

限界に挑戦するのは練習でだけ。 本番は限界よりさらに上を目指すものなの。

緊張なんてしなくていいのよ？ただこれまでにつくってきたものをこそうと思つてやればいいの。

失敗したってかまわない。気持ちが成功すればいいのよ。良い？

精一杯、やりましょう」

「はい！！」

文化部とは思えないくらい盛大にその返事はかえってきた。

部長は笑顔でうなずいた。

しぐれもまた さわやかな笑みを浮かべていた。

だが心中 . . . . .

二人に不安、心配 . . . の気持ちがある。

八代待たせることになっちゃったけど……何してるんだ  
るつ？

……  
うららは空桜ちゃんと一緒にいるから大丈夫なんだろうけど・

……  
もしかしたら さっきの……つづきが……

同じことを考えて、目が合う二人。  
その視線だけで……やはり通じていた。

練習は終わった あとは本番前はやくいくだけ……  
早く……なるべくはやく 合流しないと……

二人ともがそう、考えた。

雨宮麗はきていないの……かしら

さつきから姿がみあたらないけれど。

私もあの人が気にしている此処の子について知りたいからね  
きてしまったけれど・・・ういてないわよね、大丈夫だいじょう  
ぶ。

と、

「新さんひとり？」

話しかけてきたその女

うわあ・・・私と同じ優等生ぶってるだけの人種の・・・。  
苦手なのよね この人。

「一緒にまわる？」

「え、いいです」

「でも一人なんでしょ？」

「でも」

「わかってるって。雨宮なんでしょ？だいじょーぶー 私らもだし  
ね？」

微笑を浮かべたその女

なんで知ってる・・・？もしかしてこいつも・・・。  
春日崎真夜といったか・・・よくわからない人だわ・・・ね  
え。

「私にはわかるのー ーせあなたのことだしねえ？  
私とこない理由なんてほかにないじゃない？  
ね、きなさいよ？」

「……………こいつ

前々からいやなやつだと思ってはいたが……まさかここまで過  
激だったとは。

思考がもろ人間をこしているじゃないか。  
本当に意識された二面性なのか……？

「春日崎さんは何をしたくて？」

「何って……………そうねえー 興味？というかあー嫌いだからか  
な」

それは 私だって嫌いよ。

「頭良いのがむかつくでしょー？まず。」

まず……………？

「それから……………まあたくさんあるから。もう正直あんたづるさい。  
いいから黙ってついてきて。 ねえ？」

病んでいる……………。

その表情は小悪魔の笑み。

「妨害でもしにいくんじゃないでしょうね」

「あれ、それ、駄目なの？」

なっ……

「いちいち説明させないでほしいな」。

まあでも、安心したらいいんじゃない？

別に直接的に妨害とかするつもりはないのね」

「なら間接的に……」

「うーん…… まあそうかなっ ふふんっ」

無邪気なのにどこか気味が悪くて………。

私より点数が高いなんて思えないし…… 思いたくもなさすぎる。

「早く。」

……ならば

とりあえずは様子見といきますか。

面白みがなかったらそのときは「こちら側が仕掛ければ良いのだから……」

試験結果はともかく

負けるはずはきつと

ない

9 - 3 , 線路は続くーよーの歌と同じ原理で

「あ、涉くんたち」

遠くの方に見つけた知り合い。

隣の八代はみようともしない。

「何みにきたんだろう？遊びに来ただけかな？」

「暇なんだよ」

「そんなもの？」

「あの人基本的に何も考えてないから」

苦笑する立雲。

対して八代は無表情。

「間違った方向にいつてるってか方向性ないし」

真顔でおっしゃりますか . . . . .

「でも悪い人じゃあないじゃん？」

「教育に悪い大人だよ」

「いやあ . . . . .」

立雲の苦い笑いは終わりそうになく。

快晴は続く。

「しぐれちゃん達まだかなー ンフフ」

「ロリコン」

「ロリツ?! いや、確かにしぐれちゃんは可愛いけどな?!

決してそういう・・・」

そこでやっと、雨宮啓は周囲の視線に気がついた。

やれやれと肩をすくめるツツコミ役、渉。

何も考えていないわけではなかった。

だが間違った方向にいつているのは事実。

流石に立ち止まって苦笑い。

そしてすぐにまた歩き出した。

「いやあ、でも渉と外出なんて久しぶりで兄ちゃん嬉しいわー」

「そう」

「なんだよーお前は嬉しくないのか?」

「いや・・・なんで刃流なのさ」

姉ちゃんは乙時雨でしょ?」

「だから! しぐれちゃんがいるだろ?」

「やっぱロリコン」

くだらない会話。

くだらないけれど それはとっても有意義なものでもあり

・・・

「お、やっぱラブラブだなーあの二人は」

視線の先には立雲と八代。

渉も一応知ってはいるが、スルー。

「そういやりつちゃんも吹部だったな」

”りつちゃん”はやめよ？」

「いーじゃねーかーまったくお前かたいなあ」

「兄ちゃんて絶対頭悪いよね？・・・姉ちゃんと違って」

「なっ・・・確かに麗は頭いいよ?! いいけどなあ?!」

俺だってちゃんと・・・」

「そういうところが」

「なあっ?!」

「・・・姉ちゃんもきてると思うよ」

「は?え?刃流祭?」

「うん」

「・・・え ああ、しぐれちゃん」

「それだけじゃないと思う」

それだけじゃ

ない?

「きつと・・・・・・・・」

「多分だけどさ・・・・・・・・」

9 - 4 , 心と硝子と

何しにきたんだらう私……………

何かが見たいわけでもないし……………

ノリで……………そう、ノリで来ちゃったよ……………

春田紗優は一人、刃流の校内を歩いていた。

配られたビラは無表情で受け取り、個人的にやってくる宣伝などは苦笑いで振り切る。

何もする気がしない。

どこか、喫茶的な出し物をやっているところにもいこうか……………

そんなことを考えながら廊下の窓のほうをみると、下では演劇部のステージが行われている。

舞台裏に楽器をもった人たちが入っていく。

それをみて、紗優は行き先をかえた。

そういえば姉ちゃんの友達の……………立雲ちゃん……………吹奏楽やってたんだっけ

見に行くのも悪くは……………ないかな。

階段を降りて、外へ……………  
見えてきた。舞台がわずかに見えて……………

と、 刹那

ガラスが割れる音を耳にした。

パリーンと砕け散る音。

驚いて、きた道を戻る。

駆け上がる階段。緊張なのか それとも好奇心なのか・・・  
自身にもわからなかった。  
だが、気づけば夢中でかけていた。

そして目にした光景。

群衆と、散っているガラスと・・・  
これは・・・軽音楽部の・・・

折れたドラムスティック。

誰かが外から投げたのだろうかと考えたのは紗優だけではなかった  
ようで、

窓の外を見る人が何人もいた。

ガラスが行き先を阻んでいて、紗優には見えない。

下では何がおきているのだろうか。  
階段を降りればわかることなのだろうか、何故か動けない。

・・・いや・・・これ

使ってるの軽音だけじゃなくない・・・

吹奏楽の・・・パーカッションにこういうのなかったっけ・・・  
・・・

どうやったらこんなことが起こるのかすらわからないけれど  
細かいこと気にしてる自分はどうかしてる・・・

ただ立ち竦んでいた。

紗優はただ・・・

9 - 5 , 疑問と後悔と

同時刻。

「あ、きてたんですねえ、生徒会長」

売店で並んでいると、一見真面目そうな

「春日崎さんに新さん。それから・・・」  
に、声をかけられた。

売店に彼女らがいたきっかけは簡単だった。

「演劇部の舞台見に行く？」

麗と空桜、二人つきり。

二階の廊下

無言で歩いていたが、空桜が口をひらいてみた。

「僕は別に・・・どちらでも」  
微笑む麗。

「うーんあたしも正直どっちでもいいんだけどなあ  
暇だし、何か買ってからいい。」

そう、麗たちは来た。

それを春日崎真夜たちは、そばでみていたのだ。

そして待ち伏せた。

「珍しいですね？学校の外にいるなんて。それに、真岸さんとい  
るんですねえ？」

「こんにちは委員長 お素敵なファッションですね、いつもと違っ  
て」

皮肉の意をこめて発せられた言葉に、空桜も負けじと言い返す。

「うふふー、真岸辺さんたちはどうしてまた制服で？」

「おそろいできたかったんですー」

単に、麗が制服で来ることを予想し、浮かないようにと合わせただ  
けなのだが。

「そうなんだ。私たちもそうすればよかった。ねえ、新さん？」

無視。

「あつ、こんなところで話してるのもなんですよ。何買いにきた  
んですか？」

「まとめて買ってきますよ。」

いきなり口調が……

空桜が真夜を一瞬だけ睨んだのを、新まどかは見逃さなかった。  
が、見て見ぬふり。

「あ、大丈夫ですよ、春日崎さん。少しのどが渴いただけですし、  
ね？」

「う、うん！そう！……ですよ！あたしたち自分でかえますから  
！またあとで会いましょう！ー！」

また・・・あとで？

自分の言葉に疑問を、そして後悔を。

「わかりましたあ。後でまた会えるといいですねえ？」

そう、真夜は黒く笑いながら自分たちの分だけを手に、店を後にした。

まどかは最後まで無表情を貫き通し、麗に軽く頭をさげて真夜についていった。

「あ、うららんどうする？」

「え？ああ、何でも良いですけど」

「じゃあー、それくださいー」

.....

しばらく、して。

彼女らはすでに外にでていた。

「もうそろそろ終わっちゃってるかもねえ、演劇部。

もう次の次じゃん！」

と そのときだった。

硝子の割れる音がしたのは。

「何いまのっ?!」

「・・・・・・・・何か・・・・・・・・われたようですね」

「あ!窓!二階の!」

先ほどでてきたばかりの校舎を指差す空桜。

「・・・・・・・・見事に」

「あちゃあ何でなんだろ・・・・・・・・?????  
近くいつてみる?」

「いや・・・・・・・・ここで、見てみましょう」

「え?」

麗の言葉の意味を理解することはできなかった。  
だが、ほかに何も・・・・・・・・できなかった。

9 - 6 , 病みに闇を

売店のそばで、不適な笑みをこぼす人物がいた。

「何がそんなに面白いのよ」

隣の冷静沈着な少女が、顔も合わせずつぶやく。

「わからない？」

腕をくんで壁によりかかる、春日崎真夜。

「わからないわよ、あなたみたいな病んだ人の考えなんて」

それに対してとなり、新まどかは傍で違う方向を見つめている。

勿論無表情。

「ひつどい表現ねえ？だって、あれおちてるの軽音部のやつなんだからうけどさあ

あんな軽いので窓ガラス割れるわけないじゃん。どんだけもろいのってかんじじゃない」

微笑む。

そばで硝子を見つめていた人でも振り向いてしまっような、そんな恐ろしい笑みを、浮かべる。

「なんか外と中の温度差でパリーンっていくことってあるんでしょ？夏の冷房とかで！」

「今11月だし、廊下に冷房なんてきいてないわよ」

冷静なる態度をたもっていたまどかだったが、

「あれ、真夜がなんかしたわけ？」

不意にそんな声が耳に入り、衝動的に真夜の方を向いてしまった。

そしてすぐに気が付く。自分の焦りに。

「うふふふ…… そんなこと」

その言葉の続きを、祈るようにまっていた。

誰かのためではない。決して違う。断じて違う。

だが、自分のためかといえればそれも肯定できない。  
わからない。

なぜ、

なにゆえに、

私は……

「私が黒幕ですみたいなことだったら、新さんどんな顔するかなー  
つてのは

すごい気になるんだけどねえー、

残念ながら違うのよね。これはそう、偶然。偶然よ？私には関係  
ないっ」

くすくすと笑いながら、そしてどこにも焦点をあわせず、  
ただ……。

まるで、地獄か何かを妄想し……、目の前にみているかの  
ように。

「それで……楽しんでるのね 最低よね」

「だって！ 暇でしょう？あなたも。」

ただふつうに現実には、日常にひたっているだけじゃ、つまらない  
つて、おもうでしょ？

あなたはそーいう人でしょ？ねえ新さん？」

否定 できない。  
けれど私は

「だったら！楽しみたいじゃない！そのために人が犠牲になったってね、

私には私の生き方があるんだから関係ないんだよね！最低？別にうざいとか思わないよ？

そーいう言葉。」

アハハハと、笑いながら話す真夜。

「アニメのみすぎじゃなくて？」

真剣な表情をしてはいるが、冷や汗が たれる。

「アニメなんてみないよ？テレビとかあんなのきどってるだけじゃんつまんない！

さっき私のこと病んでるっていったけど、別に否定しない！

普段は優等生を演じて、実は……中々非日常的で楽しいとおもわない

だって

あなたもそうでしょ？」

私は

私は

確かにすべてがどうでもよくて  
だけどもわりからちやほやされて  
ちよっといい子ぶってみたくて

だけど私は

「でもねえ

惑わされてちゃいけないのよ？あくまでここは現実なんだから…  
すべてがすべて思い通りになるわけじゃないー？

雨宮麗は実に面白い子だと思う。今まであつてきた人の中で最も  
非現実的！

だから近づいてみたかったのぉー。」

何の為に

自分の退屈しのぎのために？

「私」

ここは勇気をだすしか、ない。

勇気なんて言葉は妥当ではないかもしれない。

でも、一言でいうならそうだと・・・思った。

私は

「私は、別に雨宮麗の味方につくわけじゃないけど。

むしろ憎いからね色々。

でもね、私 あなたの味方にはなれそうにない。協力なんて無理  
だわ。

少しの間だったけど、とりあえずまあ一緒にまわってくれてあり  
がとう。」

そして、立ち去る。

立ち去れば、すべてが元通りに、なる。

春日崎真夜との関係はもう、これ以上・・・

「新さんは客観的に見ていたってことなのね」

・・・。

「・・・フツ

別に構いませんよ、あなたの力なんて元から必要ない。」

表向き表情、口調に戻した真夜の声はもう、まどかの耳に届いていなかった。

9・6、病みに闇を（後書き）

いたさが尋常じゃない気がしますこの子  
本当ごめんなさい。

「うーんよく見えない・・・ 近くいかない？」

舞台付近、少し前からそこで、割れた窓を見ていた。

誰かがよんだ事務の人っぽい人がきて、なんかやつてる・・・  
人並に視力はあると思うんだけど・・・ やっぱり遠いか。  
そんなことをただ、空桜は考えていた。

「ねえ、うららん？」

麗は突っ立っている。

やはり視線は窓のほうに向いているのだが、まるで焦点があつていないよう。

「峰岡<sup>みねおか</sup>さんて、今軽音部でしたっけ」

と、不意につぶやいた。

「え？峰岡さん？」

麗の視線は変わっていない。窓の向こう・・・ 何でそんな顔まで見えるのよ？

麗の顔を覗き込む。

斜め上を向いているため、長い前髪が少し垂れている。

もう少しで普段は隠れている方の目が見える。

気になって、じっと見つめてしまう。

「あの窓割ったのやっぱりボールですね しかも故意的に」

「・・・ん？やっぱり？ボール？ん？」

我にかえったが、話が理解し難く、戸惑ってしまった。

「さつき向こうの方にいたじゃないですか。峰岡さん。窓の方にいた方々とコンタクトをとっていたようで。」

その直後ですからね、割れたの」

「え、峰岡さんて・・・もしかして軽音部のライブとかによくでてる峰岡先輩のこと・・・？」

「ええ。ソフトやってらっしやるようなんですよ。」

その人が近距離で投げて、向こうにいた人が受け取った。

事務の方がひろっていたドラムスティックは軽音部のでしょうね、何であつたのかは知りませんが」

え？何いつてるの？

ひろつてた・・・とか、見えた？の？ここから？

「割れる瞬間はみてませんが。」

まあ、関係ないことなんですけどね」

すっと微笑み、麗は歩き出そうとしていた。

あわててついていこうとする、空桜。

「え、ちょっとうららん 何？もしかして全部見えたの？見えてたの？」

「見えましたけど」

あれ、驚かれた

・・・うららん視力いくつよ？

片目隠れてるし。

前から思ってたけど、それ絶対目悪くなるよね？

「視力・・・ 気にしたことなかったですね」

そういつて、片目だけ、気にする素振りを見せた。

「あの、聞いちゃだめかもだけどさ」

「左ですか？」

あ……

次の瞬間、麗は哀しげに微笑んだ。

「見えないんですよ」

え……

当然のごとく

少女は言葉を失った。

考えたこともなかった。

何もかもが人並で、元気だけが取り柄だったような少女は、驚きと哀れみに支配された。

人を支えたいと思いつけ

初めてそんな友達ができた少女には  
どうすることも

できなかつた

「いいんですよ空桜さん……あの」

少女は見つめていた。

かすかに震えながら、少女は 空桜は

「ごめん・・・なさい 私聞いておきながら」

「謝られる理由わけがわかりませんよ・・・？」

「ごめんなさい・・・」

ごめん ごめん・・・

心の中で

何度も 何度も

何度も

「あの・・・私、お・・・トイレいつてきます  
らしくない、敬語になっていた。」

ないてしまいそうだった。

どうしてかはあまりよく、わからない。

事実を知っただけなのに

自分には何もできないし それはきつと自分だけでなく

誰にもどうしようもないことなのに

なぜだかわからないけれど

彼女を支えてあげたいと思っていた自分の心に何か刺さってしま  
ったように

気づくと自分は走っていた。

9 - 7 , 真相、事実。(後書き)

羞恥心がひどいです・・・

トイレを済ませ、わけもなく・・・

わけもなくもう一度謝ろうと 空桜は思っていた。

麗を探す。探しているが、なかなか見つからない。

「空桜ちゃんだっけ？」

と 不意に話しかけられた。

「あ、えっとうららの・・・」

「ああ 啓、な」

そっだ、うららの、お兄さんと、弟の涉くん

「どうした？浮かない顔して」

「え、いや・・・あの・・・ うららの、目・・・のこまきい  
て・・・私・・・」

視線をそらす。

心配そうな啓の顔も、麗と瓜二つな涉の顔も、見れる気がしなくて。

「そんなこと気にしてたのか？」

「私・・・」

「そんなの、空桜ちゃんが気にしたってしょうがないんじゃないかなあ？」

「そうです・・・けど」

落ち着かない。  
なんだか・・・

「麗な、左が見えないかわりに、右目の視力が半端ないんだぜ」

え？

あ、そつか

だから見えてたんだ

あれ、見えてた・・・

そういえば峰岡先輩のこと結局・・・

顔をあげてみると、彼らは笑っていた。

「笑おうよ？そんな顔してたら、姉ちゃん余計不安になるじゃん？  
笑わせて・・・あげてくれるんでしょ？」

渉の笑顔は いつかの麗の笑顔に、似ていた。

「なんか硝子だのなんだの、大変なことになってるっばいけど、  
祭りを楽しもうぜ、麗なら多分あそこにいる」

中庭・・・？

啓がさすさき、芝の茂った中庭。

小さな子供たちが駆け回っている。

平和な、光景。

そっだよな

気にするも何も・・・ね

ああばかりみたい、自分ってなんでこんなこと気にして  
後先考えず突っ走っちゃうんだろう  
それが一番

うららんを傷つけていたのかもしれない・・・

やっぱり、ごめんね・・・

空桜が礼をいって走り去ったあと、啓は渉の肩に手をおいた。  
渉は静かに微笑むだけだった。

中性的な顔立ちをした小学生

彼もまた 夢をみていた

希望を捨て

家で一人泣いていた日々ことはもう すっかり忘れていた。

両親が事故に遭ったときも

自分に巡ってきた運命を

姉が庇ってくれたときも

そのせいで彼女の目をあんな風にしてしまったことを知ったときも

わかっていた

いつの日も いつの日も

今だって わかっている

けれど今はもう違うから

だから今度は自分が 誰かを変えるべきなんだと

今、いま、

走る少女の姿を、ただ見つめた

9・9、笑って笑って始まって

日がさしていた

少し向こうで大勢の人が動き回っているが、そこは平和だった

「気持ちいいよね 芝生とか」

不意に声がした。

振り向くと悲しそうに笑うしぐれがいた。

「あ、ね、準備してなくて良いんですか？」

「別に、いい 何か今軽音が大変だし」

「うーらん、何で一人？」

答える気力はなかった。

だが、答える必要はもたらなかった。

こちらに手を振り歩み寄ってくるのは、先ほどまで一緒にいた空桜。しぐれの表情も、少し柔らかくなっていた。

「すみません、場所をかえてしまっ

「いや・・・ あたしこそ、全然わかってなくて・・・本当にごめん」

心なしかしぐれの瞳孔が一瞬、開いていたように見えた。

「もうすぐお昼だね　しぐれも一緒に食べようよ」  
「うん」

やはり気のせい・・・だったのだろうか

「うざらんどつするー?」

「あまりお腹がすいていないのですが」

「いいじゃん!食べたなら吹部なんだし」

「そうですね・・・」

なんとなく、気まずかった。

それはきつと空桜もしぐれも、薄々感づいてはいる。

「あの、しぐれ」

「ね!　せっかく刃流祭なんだからさっ　楽しもうよ、ね?」

言葉を遮るように、しぐれが顔を明るくして見せた。

「さっきいったところは別に喫茶あるっばいし、いいっつよ!」  
空桜もあわせていた。

深く考えるだけ、無駄なようだ。

どうせ、表に出さぬよう、しているのだから。

きいてもきつと答えない。

だから無理に探ろうとするのは、やめる。

それがいちばん、いい。

「いきましようか」  
作り笑いだっただのかもしれない。  
でも、たしかに微笑んでいた。

「うららは笑ってた方が可愛いーよー」  
空桜としぐれもまた、笑顔だった。

「あんたも馬鹿だよね」

少し離れたところで、春日崎真夜は薄笑いを浮かべていた。

「あんなことなっただけどそう混乱しなかったねい  
ていうかあの子は勘がよすぎるよ ばれてるもの」

「何いつてるんすか先輩？ そんなこと百も承知だったんじゃない  
んですか」

ドラムスティックを片手で器用に回している少女、 名を峰岡。

「どうかしら」

でも私はあくまで見てただけだし、責任は負わない」

「本当に悪魔です」

「よくいわれる」

くすくす、くすくすと

真夜はしばらく微笑していた。

喫茶には、優雅にお茶をする男女の姿があった。

「立雲さんたち！」

「あなたも吹部の準備、いいんですか？」

立雲と八代がくつろいでいるよこに、三人は腰を掛ける。

「さっきトラブルがあったでしょ、

それでまだちよつと時間がかかるっばいから、待機中」

「手伝えばいいのにな」

「だってあんな展開予想外 私たちで解決できる問題じゃないよ」

相変わらず仲が良い二人。

羨ましそつにみつめる空桜。

「奏ちゃんも大変だよね。ごめんね」

「え？いやっ、別にいいんです！先輩が謝るところじゃ」

「しぐれちよつと礼儀正しくなつてない？」

「成長しましたね」

しばらくは、笑い合っていた。

八代や麗も珍しく、楽しそうだった。

こんな時間がずっと、続けばいいのにと 空桜は思っていた。  
そんなうまくはいかないと、わかっていながら強く願っていた。

「ところで大丈夫かな？さっきのパリーン」

「効果音」

八代やしぐれが微笑む。空桜が、何かを思い出したかのように机をたたく。

「あつ、あれってたぶん峰岡先輩って人が、って、さっきつららん  
いってたよねっ？」

「あ、はい」

それで麗もやっと思い出す。

「峰岡ー？ あ、峰岡って、もしかしたら知ってるかも」

「え！」

立雲と八代が顔を見合わせていた。それも、真剣に。

「ちよっと、昔話していい？」

そのころ彼女らはまだ、小学生だった。

私立の中学を受けるため、塾に通い  
そこで彼らは出会った。

塾には知り合いがいなかった。

もしかすると、同じ小学校の子がまずいないのかもと思うほどであ  
った。

他校の子に話しかけるがそう簡単に仲良くなれるはずもなく、立雲  
は大抵の時間を一人で過ごしていた。

一人に慣れたころ、クラス替えが行われた。

立雲はひとより何倍も熱心だった。その努力が実り、トップクラ

スに編入することとなった。

このみんなは頭がいい

だから、きつと一人の子なんてたくさんいる  
それが、みんなで仲良しなんだ

そんなかすかな希望が、芽生えつつあった。

だが何故、仲良くしてくれる子ができる、と思わなかったのか  
今ではわからない。

緊張しながら授業を受けていたはずだった。  
不意に扉のあく音がきこえた。

「椎名」 また遅刻だぞー これで何回目だ」

「いちいち数えませんよ」

ぶっきらぼうな彼と、一瞬目があった。

「せっかく今日、クラスあがってきた何人が自己紹介してたのに」

「席替えしたんですか？」

・・・あ、一瞬私の方向いたの、元の席だったから

「お前、最前列。 じゃないといつの間にか寝てるからな」

なんて不真面目なんだろう、

どうしてそんな人がここにいるんだろう

不思議でたまらなかった。

再び目をやると彼もまた、こちらを見ていた。

「って、これ二人の出会いじゃないー！！峰岡先輩関係ないー！！」  
微妙に頬の赤い空桜がつっこみ、話が途絶える。

「え〜しぐもっとききたい〜」

「じゃあもっどどっでもいい話するよー？」

「やったあー！！」

実に嬉しそうだった。

9 - 11、 やしろくんと昔話

初めて出会ってから 何か月か、 たっていた。

「へえ、面白い子だね」

「面白いかな？なんか不真面目でよくわかんない人」

「私、そういう人、すき」

「えー？未来おかしい」

立雲は春田未来とよく話した。

親友とまでよべる仲だった。

「りつちゃん、乙時雨と刃流両方受けるんだよね」

「うん！未来が乙時雨だからそっちが第一かな！未来がいなかったら刃流かも！」

「何それー わっ」

刹那誰かの肩とぶつかっていた。

「ごめんっ」「悪い・・・」

「あ、ね、 八代、くん？」

名前は覚えていた。

ずっと、見ていたから。

少し気になって、見ていたから。

「・・・誰」

でも彼は、私のこと

「立雲です 鳩羽立雲です 同じ塾、の  
あの、同じ学校、だったんだねって思って」

「あ、そう」

それだけだった。

別に 見ていたといつてもただの好奇心だったし……  
別に 傷ついて、ないし

別に

「もしかして、さっきの子が」

別に

「好きなの？」

「好きなわけないよ！あんな変な人  
なんか妙に気になるだけ！」

そうだよ

なんか、不真面目だから、なんか、不思議なだけ

でも彼にはなんか、人をよせつけるような魅力が、あるんだと思う

そう、「なんか」。

「塾つてことはやっぱり、私立かな？でも男の子だから、乙時雨も刃流もダメだね残念」

「どうして残念？」

「んー りっちゃん気付いてないなーって思ってた」

え、気付いてない

何か月かちょっと話したり話さなかったりしたただけだし

「あつぶなーいー!!」

不意に今度は声がした。  
声がして

パリッ

鋭い音と共に、窓ガラスにひびが入った。

「峰岡ー!!!」と、中庭の方で怒声がした。

「やつちゃったね、あの子 五年生？」

窓から見下ろすさきの少女。案の定説教をくらっていた。

いま。

「わー！それで、峰岡先輩にたどりつくわけだ！じゃあ、前にもわったことあるんだ」

「ひびが入っただけだよ」

空桜としぐねが小さい子供のようにはしゃいでいた。  
対するほか三人はなんとも大人で、対照的。

「そこから、どう展開して今の関係になったんですか？」

「そうそう！まだまだ片思いにさえ気付いてない感じだったのに！」

「え？こっからさきはトップシークレットだよーっ」と

「ケチー！！！」

その声は大きく、まわりの何人かがこちらをみていた。  
そしてひそひそと耳打ちしあっている。

「女4対男1って状況がまずいのかなー？」

「ふつうにいうか？」

まったく気にしない空桜としぐね。

能天気、と立雲や麗は思うわけで。

「でも、あんまり手がかりにはならなかったね」

「峰岡さんが普段的に窓ガラスをわっている人だということはわかりました」

「何その日常茶飯事的な言い方？」

「つまり、そう気にする必要もないということですよ。お手洗いいつてきますね。」

見送る側は、笑っていた。

だが気にする必要が実際にはあるということを、麗は誰よりもよくわかっていた。

「来ると思っていましたよー 雨宮先輩？」

9 - 12 , 新しい味方

「何が目的なんですか？春日崎さん」  
しずかに、無表情で。

「目的？うーん 退屈しのぎ？みたいなの？」  
対する真夜は笑顔である。

「ですよね」

「わかってたと？でも硝子わっちゃったのは峰岡ちゃんだよ？」  
私にとっても予想外だったものお」

隣で微笑する峰岡。

麗は目をあわさぬよう、ひそかに努力している。

「あなたはもしものときのことを考えて できなかつた」  
その眼光は鋭かつた。

一瞬沈黙したのち、真夜は不適な笑みを浮かべた。  
「へえ・・・」が、目は笑っていない。

峰岡も一瞬凍った。

冷や汗をたらしながら、真夜の顔をのぞきこむ。  
そして、体をふるわせた。

「やっぱり頭はいいのね」

けど

やろつと思えばできたけど？

何をいおうとしてるのかしら？内申？ 関係ないわねえそんなの」

「内申というより 自身の株ですよね先輩？」  
不意に声がした。

峰岡が知っていた。  
彼女のクラスメイトのひとり、

「紗優・・・さん？」

「なんだかわかった気がするんです・・・  
自分間違ってたんだと思うんです・・・

春日崎先輩って最低な人ですね」

驚いていたのは一瞬だけだった。

「雨宮さん疑った次は私ですかあ〜？」  
わざとらしく笑ってみせる。  
が、紗優は真夜をにらみつづける。

「悪かったって思ってますよ  
だからこそわかるんです、あなたは最低です」

麗と峰岡の表情はいまにも崩れそうだった。  
二人とも頑張ってたもっている。

「紗優さん、あの」

「てゆーか、峰岡さんももっと良い人だと思ってたけど……  
ま、ろくにはなしたことはないからわかんなかったけど

……もうやめにしませんか？先輩

傷つく人がふえてそれで嬉しいんですか？

兩宮先輩別に悪くないじゃないんですか？

何かされたわけでもないのに、そんな」

「されたわけでもないのに？

されたあなたはどなのよ？」

真夜のほうが、はるかにするどかった。

もともと目つきの悪い真夜が 本気になっていた。

「もう、解決しました」

紗優も負けていない。

「だまされてるんじゃない、この女に」

「そんなこと」

だが不安になる。

「そういう人だって知ってるじゃない？

あなたのお姉さん、ほら」

一瞬目の前が真っ白になった。

「違うっ！！！！ちがうっ……！！

ちがう………違うよ!」

言い返す言葉ならたくさんある。

けれど その言葉が本当に正しいのかどうか  
まだあまりよくわからない。

「確かにうらんでた…… 確かに、  
雨宮先輩のせいだって思っ  
てた……」

でもっでもでもでも、  
そんなことないの……

違うの…… もうわかったんだし……」

何がわかったのだろう。

それがわからない。  
考えたくもない。

涙があふれだしそうだった。

まばたきをこらえる。

「紗優さん、自分自身を信じてあげてください……」

……え?

「無理しているように見えるんです、どこか……」

紗優さんは僕と違って「

「違つて?」

真夜が反応した。

表情は暗かった。

先ほどまでの余裕はどこにもない。

「あなた・・・自分だけ不幸だとか思ってるでしょ？」

「うちらん遅くない？」

空桜は心配していた。

空桜だけではない。だが、少なくともしぐれは、わかっていた。

「さきにさ、吹部のところいこうよ。」

うちらんあとできっとくるから。

信じてるもん。」

ほかにいいたいことはたくさんあった。

けれど、しぐれは笑顔でそれだけいってみせた。

反対意見はなかった。

「あなた・・・自分だけが不幸だとか思ってるでしょ？」

「どういうことですか？」

麗の微笑みも、消えていた。

「その子の気持ちわかった気になってるけどねえ・・・  
人の悲しみってそれぞれ違うの」

そういつて、真夜は麗に向かって手をのばした。  
そして左目を覆う前髪を乱雑にめくる。

峰岡と紗優が目を見開く。  
真夜と麗はにらみ合った。

「交通事故で視力を失い 更に虹彩異色症？  
血の色に染まったってわけ？」

峰岡が震えだす。

紗優に助けを求めるが、彼女もまた立ち尽くしたままだった。

怪訝な表情の麗を、鋭い眼差しで真夜は見つめる。

「どうしてしってるのかって？ 同じ部屋に入院してたからよ  
あんたも私も そのとき両親を失った」

え………？

真夜の言葉が、頭の中で何度も繰り返される。

知らない

覚えてない

そんな考えと共に。

「あなたは……」

自分の声が震えていることに、麗は気付いていた。

「不幸を背負って……」

真っ直ぐ真夜を見つめた。

彼女は真剣で 今にも泣き出しそうまで

「どうして？」

怒りがこもっていた。

「どうして ” あなたは ” なの？

どうして ” あなたも ” じゃないの？！

あんなことがあったのに・・・あなたは楽しそうに生活してた  
学校中の人気者だった

どうして？

あんだだっで・・・」

峰岡も紗優も そして麗も

彼女の弱みをきくのは初めてだった

いつも勝ち誇っていて

いつも誰かをバカにして

いつも良い人ぶっていて

そんな真夜の目が うるんでいた

麗に返せる言葉はなかった。

両親と別れたのは同じ

けれど自分には兄弟がいた

いまもこの先も、兄弟がいる

「それから私が一人でどう生きてきたか あんたには到底わからない  
い・・・

何故ならあんたは」

「わかりませんよ」

言い終わる前に、麗の口が開かれた。

「僕にあなたの気持ちはわからない

そして裕福な家庭に生まれ 不自由なく過ごしていたあなたに  
親に愛されなかった僕の気持ちは わからない」

裕福、その言葉に反応した。

「あの・・・」

峰岡だった。

「数年前に有名な財団のお偉いさんが無理心中を図ったっていう二  
ユース・・・」

やっぱりあれは先輩の・・・」

場の空気が凍りついた。

まさか・・・と、自分にいいきかせる紗優、麗。

「峰岡さんどうして数年前のニュースなんて覚えてるの」  
震える声で紗優がきく。

「父さんが・・・ファイリングしてあったのをこの間見つけた・・・」

「  
うつむく峰岡。

真夜も麗から視線をそらしていた。

「知ってたから・・・協力してたんですね」

「だって・・・春日崎先輩はあたしの憧れだったから！」

なのに苦しんでたんだって思って・・・ほっとけなかったんだも  
ん」

とうとう崩れ落ちた。

その肩に 紗優がやさしく手をのせる。

「春日崎先輩も・・・ 人気者だったんですよきつと  
だって、ほら」

紗優の温かい声に、真夜は目をおよがせた。

「ふざけんな・・・ 人気？どこが？」

私に憧れるところなんてないし 私はあの日以来誰も愛せないで  
自分だけを見て生きてきたの」

「雨宮先輩のこと、見てるじゃないですか」  
多少おびえながら、紗優が発言する。

「ずっと視界に入れたくなかった でも入ってきて嫌いだった  
私より人気で 私より頭が良くて 私より美人で  
許せなかった

何でそんなやつが私の視界にうつるのってずっと憎んでた  
だから下種共の前でいい子ぶったりとかもしてみた けど私は」  
「いい加減にしてください」

迫力がありつつも 静かな 綺麗な声だった。

まっすぐ、真夜を見つめていた。

「あなたは十分幸せです  
数はいなくとも あなたを好いてる人がいる  
あなたに憧れあなたをめざす人がいる  
あなたを愛した人がいる  
それ以上に何があるというんですか？」

人と比べたくなるほど あなたは幸せだった  
幸せだったから 一瞬の出来事ですっかり心を閉ざしてしまった  
それだけなんです」

しばらくうつむいてきいていた真夜の足元に  
小さなしずくが ほんのわずかな音をたてて

その刹那を 麗は見逃したりはしなかった。

「一人でいるのをさみしいと感じるなら  
人に愛されるくらいやさしくなればいい  
誰かに認めてほしいと願うなら  
まず自分を愛せばいい

あなたにとってはそれくらい 朝飯前ですよね？」

麗の微笑みを、紗優も峰岡も 嬉しそうにみていた。

「良かった」

やさしげな笑みを浮かべ、麗もつぶやいた。  
そんな麗を、真夜は再びにらむ。  
それは嫉妬だった。

「二人とも悪い人じゃなかったんですね」  
「なにをつ…… 私、あなたに」  
真夜がかみつく。  
祈るように麗を見つめた。

「もういいんです  
春日崎さんのこときけて……良かったと思っんです」  
微笑みかける麗。

そして

「何も知らなくてごめんなさい」

空は晴れた。

「ごめん……なさい……」

真夜もまた、その場に崩れ落ち、  
そして思いつきり泣いた。

今までためてきたすべての苦しみを  
全部流した。

流して、感じて また流して……

「先輩、これからは友達として……接してくれませんか？」

下の名前で呼んでください えっと……千景ちかげっていいんですけど  
……知ってました？」

「うん…… 知ってる」

峰岡千景の笑顔は 一時の幸せを運んだ。

「さあ急ぎましょうか 吹部、はじまっていますから」

吹部の発表は無事行われた。

「本日はお忙しい中ありがとうございます」  
と、立雲に続いて礼をするしぐれの姿は  
とても初々しく、見ていて楽しかった。

始まる直前、観客席で空桜と麗たちは合流した。

事情を説明している間に、真夜はどこかへ姿を消していたのだが。

千景と紗優と、麗と空桜と、偶然近くにいた八代と。

表情の硬いしぐれや楽しそうな立雲を見て、くすくすと笑い合った。

後ろの方で、啓と渉も楽しんでいた。

空桜たちがようやく彼らの存在に気付いたのは、しぐれが最後に  
舞台から手をふったときだった。

やわらかくなつた麗の表情をみて、啓も渉も幸せそうだった。

しばらくすると彼らはもうすでに帰っていた。

舞台からおりてくる立雲にしぐれ。

八代のほうへ駆ける立雲をみて、紗優はかつてのことを思い出し、  
憫笑する。

きつと二人とも、あたしのこと、覚えてないよね・・・  
そう考えていると、不意に立雲がこちらに微笑みかけてきて、あせ  
る。

それをさらに笑われ、赤面する。

しぐれのほづも、麗や空桜と、楽しそうに話していた。

麗に啓のことをきき、冷たくかえされるしぐれ。

「うららんはお兄さんのことあんまり好きじゃないんだよね」

「何でー？いい人じゃん！」

笑顔の空桜に対して、しぐれは真顔。

「のんびりまわってから 帰りましょうか」

話題を逸らしたことに對するツッコミもなく、三人は歩き出した。

立雲と八代もあとを追う。

「あの二人はいいの？」

よく理解していないしぐれが問う。

「仲良くなってみたいから二人でまわるって。どういうことだろう・

・？」

「青春だあ！」

空桜と麗が顔を見合す。そして微笑む。

真面目そうにみえて不真面目で

どことなくミステリアスな彼女は

人をやさしくする。

思いつきで行動してしまうくらい

純粹で誰よりもやさしく正直な彼女は

人を明るくする。

思考や言動が多少幼稚だからこそ

そこにいるだけで雰囲気明るくする彼女は

人を笑顔にする。

失ってから気付いても

時間は戻らないけれど

経験も成長も きっと伴ってくれる。

失った悲しみは

いまある喜びで打ち消せばいい。

いまを思いつきり楽しめばいい。

そのために友達がいる。

個性豊かな友達がいる。

友達がいるからこそ 自分でいられる。

「うららん笑ってる的可愛いよね」

率直な気持ちも、伝えられる。

「うん！空桜もかわいいーよーお」

笑顔があふれる。

「そんなことないよ！しぐれのほうが可愛いって」

かすかに赤面している麗、楽しげな二人。

そしていつものことながら、仲のよすぎるカップル。

「まわりみんな可愛い女の子たちばかりだから、八代ちよつと意識しちゃったりとかする？」

「しない」

「本当に？」

「なんですかの？」

「あ、ちよつとみんなにひどい」

会話も、いつも通り。  
ほんの一時ながらも、平穩が戻った気がした。

## 屋上

休憩する人々でにぎわう屋上の片隅に、まどかを見つけた。

声をかけようと一瞬思ったものの、戸惑ってしまった。

その結果、相手がさきに気付いた。

「春日崎さん・・・珍しい来客なこと」

「私にとっても意外だけど？」

表情の硬いまどかを、悲しげに見つめる真夜。

「・・・何か用かしら」

いつもと雰囲気の違いを真夜を見て、まどかは怪訝な顔をみせる。

それに気づいた真夜、あわてて普段の口調に戻す。

「ううん〜 偶然ここにきただけ〜」

まあ、ちようどいいわ・・・ さっきのはなし、なかったことに  
して

「じゃあね〜」

「ちよつ 待ちなさいよ」

理解しきれず、立ち去ろうとする真夜をとめた。

「まったくあなたって人は どこまでが本心なのかわからないわね・

・  
・  
なんかみてたらわかるから、詳しい話はあえてきかないで  
おいてあげるけど

「今度会うときは敵同士よ」

真夜はふりむかない。きいてはいるが、歩き続けている。  
どんな表情でいるのか、まどかからは見えない。  
けれどまどかは、微笑み、続けた。

「次の定期試験は私が勝つから」

結局、姿が見えなくなるまで ふりむくことはなかった。  
けれど彼女はきちんと 笑っていた。

生徒会室。いつものように、麗が一人でくつろいでいた。その日は日本史の本を読んでいた。

不意にノックの音を耳にし、本をとじると戸をあけてはいつてきたのは春田紗優だった。

「あの・・・あたし、きちんと謝ろうと思っててもぞもぞしながら麗の対面に腰掛ける。」

「ずっと・・・ごめんなさい。仇だとか、ずっと、思ってた」「いえ・・・」

麗の笑みに、紗優は胸をなでおろす。

「色々な人に出会って、励まされて・・・」

あたしが間違ってたんだなって思って・・・

そしたら、春日崎先輩の話を目にして、それでなんだか助けたくなって

だって・・・あたしと似てるのかなって思ったから」

目を合わせて話す勇氣はまだなかった。

うつむきながら憫笑を浮かべ　そして麗がゆるしてくれることを願った。

「生徒会長になるの、お姉ちゃん夢だったんです。

でも・・・一年生のとき、書記に立候補したの落ちちゃって、自信なくしちゃって・・・」

少し勉強はできても、運動は苦手だし、容姿もふつうだしって、マイナス思考だったんです」

口をつぐんではいるものの、麗は必死に耳をかたむけていた。麗がきちんときているのかいないのか、紗優は気にせず自分にいいきかせるように、語り続けていた。

「だからもし同級生が自分のかわりになったら、どんな人なのか気になるからって

選挙管理委員やったんだったって言ってました。

・・・そこに雨宮先輩が現れて、快拳を達成して、お姉ちゃん、先輩のことかるく嫉妬したんです

それで・・・不安定だったんだと思うんです・・・だから・・・」

必死で涙をこらえていた。

ずっとわかっていた・・・

でも、わかっていたからこそ、自分は 姉が憎んでいた人をおかわりに憎んだ。

姉が逝ってしまった原因は、麗にあると・・・ 憎んだ。

けれどわかっていたいなかった・・・

姉、未来が どんな気持ちで麗を見ていたのか

嫉妬と共に憧れが芽生えていたのではないかと 今では思う。

「春田さんは・・・ 素敵な人だったと思いますけど・・・」

「お世辞ですか？まいつちやいますよ・・・

だって先輩頭良くて可愛い上に、運動もできるんですよ？

お姉ちゃんが嫌いになった理由、よくわかります・・・  
ごまかした。

そうでもしないと、泣いてしまいそうだったから。

「でもやさしいんですね」  
微笑む。

麗をまっすぐ見つめて、 と思ったら

麗は窓の方を向いていた。  
少しがっかりする。

「雪降ってますね」  
静かな声だった。

紗優もそちらをむく。

今年に入って初めてだった気がする。  
雪・・・ なんとなく、切ない。

「お姉さんのかわりに、しっかりと目に焼きつけてくださいね・・・  
生徒会室の窓からみた、風景」

お姉ちゃんが憧れた部屋からみた、初雪・・・。。  
ただ、嬉しかった。

空をみあげれば、そこに未来がいる気がする。  
そこから、白いふわふわしたものが降ってくる。  
天からの贈り物に見えて 幸せな気持ちになる。

「また、何度でも・・・ここにきて、  
こうして、見てもいいですか？」

麗の肯定に、違う涙が流れた。  
感謝の言葉も浮かんでこないくらい、嬉しくて 哀しくて。

「先輩は…… どうして…… 生徒会長になろうと…… 思った  
んですか」

涙のせいでうまく喋れない。

けれど、きいてみたかった。ずっと前から。

その質問に、麗は驚いていた。

「春日崎さんの前では…… 強がってたんですよ……」  
微笑を浮かべる。

「幸せな家庭に憧れてたんです でも…… 僕にはなかった  
だから…… 家が無理なら学校を幸せな場所に……  
みんなが安心して楽しく通える場所に したかったから」

紗優の涙が 一瞬とまった。

見上げる。

麗は哀しげな笑みを浮かべ、空を見ていた。

幸せに…… したかった なのに

逆に不幸になるといわれて……

それ以上の不幸…… ないじゃない……

「あたっ、あたし…… 最低なこと…… 考え……」  
「事実じゃないですか」

え……

「みんな…… 僕のせいですよね？」

そんなこと……  
だってそれは先輩が……  
先輩……が？

「それは……」

「信頼って怖いんですね……」

刹那、扉があげられた。

振り返る紗優。

本の束をかかえた少女が、失礼しますと入ってくる。

「え……園部さん？」

「何で驚くんですか？私、図書委員なので・・・」  
机の上に、大量の本をおく。  
歴史に関する本ばかりだった。

「あ・・・あの・・・う、

空桜ちゃんが、会長は悪い人じゃないっていったので、  
大丈夫かなって思ったんですけど・・・

いけなかったですか・・・」

急に消極的になる園部歌波。

どこかわざとらしかった。

「あ、いえお気になさらず」

「はい」

歌波の様子がおかしいことに、麗は気付いていた。

紗優も不思議そうにみつめている。

「それでこれ、何なんですか？」

「委員長からです。」

図書委員の委員長？

紗優は考える。

・・・春日崎先輩？

「いまどきこういう本読んでるの会長くらいしかいないからって、  
いつてましたけど・・・」

机の端においてあった日本史の本に目をやる歌波。

「あと、謝罪とも」

麗の表情を、歌波は確認しない。

対する紗優は、麗に微笑みかけていた。

麗は

廊下を歩いていた。

「真夜ちゃん」

唐突に 英語科の先生に呼び止められる。

振り向くと彼女は満面の笑みをうかべていた。

どうやら刃流祭の件ではないらしい。

「第一志望、英語面接が必要だっていつてたわよね？」

「はい」

なんだ、そんなことか。

「練習とか、した方が良いわよね？ 来週あたりの放課後にどうか

しら」

「助かります。・・・私はいつでも構いません。」

「わかった。真夜ちゃんはいつでも礼儀正しいのね」  
.....

礼儀正しい、お世辞でもそうでなくとも

私にとってそれは、いわれて嬉しい言葉ではない。

自分の辞書には、当然 と記されているのだから。

「真夜ちゃんだったら内申書 なんでもかけるから、担任の先生も  
きつと楽よね。」

でも、みんなにやさしくね。」

笑顔のまま、彼女は去っていった。

みんなにやさしく？

・・・やはりやさしさを演じるのは難しかった・・・のか  
それとも演じているからこそ やさしくないのか・・・

やっぱり・・・ やさしくないんだ私って

別に.....

やさしくないって..... 嬉しい気もするけど

不適な笑みがこぼれた。

「じゃあ私、失礼しますねえ・・・」  
深く一礼して、歌波は再び扉をあける。

紗優が呼び止めようとする。

だが、とくにはなしたくないことがあったわけではない。  
気付いたときにはもう、歌波の姿はなかった。

そんな歌波を、麗はじっとみつめていた。

10 - 3、初めての贈り物

「うららん、いる？」

次に生徒会室のドアをあけたのは空桜だった。

いつも以上に楽しげな表情で、入ってくる。

麗も自然と笑顔になる。

「どうしたんですか？」

よんでいた本をとじ、椅子をすすめる。

「あのねっ もうすぐ12月でしょ？」

12月といえばクリスマスでしょ？

クリスマスといえばパーティでしょ！」

やけに顔が近い。

「それでー、しぐれんちで、やんない??」

麗の笑顔が一瞬凍った。

「しぐれの・・・ですか？ そう・・・ですね」

視線をそらす。怪訝な表情で空桜がみつめる。

短い沈黙が流れてから、麗は賛成した。

空桜はよかつたくと満面の笑み。

それみて、苦笑する麗。

しぐれの、家。

心のなかで何度も自分にいいきかす。

きっと大丈夫、ですよね・・・。

何度も、何度もひびかせる。

「・・・体調悪い？」

「えっ?! いや、そういうわけでは・・・」

「・・・えっと心配してくださいましたのならごめんなさい・・・」

「あ、うん・・・」

雰囲気気まずくなってくる。

不安そうな空桜は、らしくない。

麗が笑ってごまかしても、きかない。

「何かあるんだったら、相談・・・してよね」

寂しげにつぶやく。

そして立ち上がり、椅子をひく。

出ていく間際

空桜は振り返り 再び微笑んだ。

麗の頬がほんのり 赤くなった気がした。

「・・・クリスマスパーティーといえば、プレゼントが必要ですね・・・  
景色をながめながら、麗は考えていた。

そして、思い出していた。

・・・

「今年はサンタさんに何お願いしよ?」

走り回る少年の姿、

幼き日の自分の姿。

当時高校生だった兄が、園児の弟に笑いかけている。  
麗は部屋の端でひとり、読書していた。

「麗は何かほしいものあるか？」

兄の声が耳にとどく。

「ない」

けれど、本当はあった。

お金で買えないものがずっと、欲しい。

サンタは毎年兄だった。

両親に何かを買ってもらった記憶は、まったくといっていいほどない。

それ以前に

両親を愛した記憶も 愛された記憶も

彼女にはなかった。

自分を愛してくれたのは 兄と弟あまじつわたるだけだった。

「姉ちゃんなんで欲しいモノないの？」

ゲームとかお菓子とか、いっぱいあるじゃん！」

渉はいつでも樂觀的だった。

両親が亡くなるその日まで。

「渉はお願いしたら」

簡単に手に入るようなものを欲しいなんて 思ったことはなく  
毎日ただ つまらない本ばかり 麗は読んでいた。

だから啓からのプレゼントも 何らかの本であることが多かった。それも、啓の好きな歴史の本。

興味があつたわけではない。けれど、兄がくれたから。だから、四六時中読んでいた。

「じゃあね、もし姉ちゃん何か欲しいモノできたら かわりにお願いしてあげるからね」  
啓も渋も、やさしかった。

そんな二人に 今まで一度も 贈り物をしたことがない。今更、気付いた。

「とりあえず、四人分かつておきますか……」  
生徒会室で、ひとりつぶやく。

「……立雲さんや紗優さん……は……」  
外を走るバド部を眺めながら、数えていた。

商店街を一人歩いていた。

歌波やしぐれは部活、麗はあんな調子。

自分も何らかの部活に入れば暇じゃなくなりそうだけど・・・などと考える。

でも、興味あるものって、なんだかありすぎてわからない。

とりあえずクリスマス用のプレゼントをさがす。

雑貨屋をまわってみるものの、麗やしぐれの好みはいまいちよくわからない。

誰かに相談したほうがはやい気がする。

けれど、するならばクリスマスと一緒に過ごさないであろう人。誰がいる？

結局何もわからない。

店のなかでぼーっとしていると、外に見知った顔がみえた。

あの子・・・!

衝動的に、駆けていた。

すぐに相手も気がついた。

が、若干忘れられているようで。

「渉くん、だっけ？」

「うん」

こいつ誰だっけ、的な顔で見ないでほしいなあ・・・  
空桜がかかるく苦笑する。

「あ、のね、うららんってどういうモノが好きなのかな？」

えっと、もらつとしたら

「え」

何度みてもそっくり。

そっくりというより、同じ顔。

何故って渉が中性的だから？

渉はしばらく考えてこんでいた。

辛抱強く待っているもの・・・遅い。

「・・・兄ちゃんはいつも本だったけど

別に嬉しくなさそうだったし？

かといって何が欲しいってきいても何もいわないから

「・・・もしかして歴史の」

「そう」

うららんがいつも読んでる本、あれ 大切なものなんだね・・・。

でも・・・結局何をあげれば良いのかわかってない・・・。

「姉ちゃんて多分、お金で買えるものに興味ないんだと思う

だから気持ちの問題だよな」

・・・。

返す言葉さえも見つからなかった。

自分は何もわかっていないけれど、渉は麗を知りすぎていると思う。

姉弟として当然のことだとは思って・・・。

「じゃあ、そういうことだから」

「あ、ありがとう!」

完全に見えなくなるまで、その後ろ姿を見ていた。

少し離れた定食屋の窓から 空桜をみていた人もまたありけり。

学校で認めてもらったのは初めてかもしれない。

こうして駄弁ったのは 初めてかもしれない。

しぐれの、久しぶりのバド部。

学園祭のために吹部にいつていたため、しばらく休んでいたのだ。

友達らしい友達も、かまってくれる先輩も、いつもならいなかった。けれどその日の休憩時間、やさしげな笑みを浮かべた二年生が隣にすわっていた。

「もうすぐクリスマスやなあ」

「はい」

能天気な先輩。けれど、バドの腕は確かだ。

結構大会にもでているらしい。

憧れをいだくまでにはいつていないものの、いつもみていた。

「友達とパーティとかするん？」

学校でしょっちゅう一人にいるのに 友達のことをきくなんて、この人……。

表情がかたくなる。

「しますけど……？」

何で自分に 話しかけてくれているのだろう

そんなことを考えながら。

「やっぱするんや」 こないだ学祭一緒におった人ら？」

「え、なんで知って」

「うち見てたからな。クラ上手くてびっくりしたわ。」  
赤面するしぐれ。

こんな風にほめられたのはじめてかもしれない……。  
お世辞でないことを願う。

「他校の子と仲良いつてええな。」

満面の笑み。どこか空桜に似ている。

しぐれもほほえむ。

「あ、うち、部活で笑ってんのはじめてみた」

とても嬉しそう。

しぐれ自身は驚いていた。

今まで……

……この先輩に、色々きいてみたいことができた。  
たくさん、たくさん。

「奏さんの笑顔で、なんか一番の贈り物になりそーやなー」  
先輩の率直な気持ちは

とても、とても嬉しかった。

涙がでてもおかしくなくらい、嬉しい。

学校で認めてもらったのは初めてかもしれない。  
こうして駄弁つたのは初めてかもしれない。

新鮮でやさしくて、温かくて。

「先輩……」

「ん？」

この人のこと、もっとしりたい。

そう思ってみたけれど 実際呼んでみると何から話せば良いのかわからない。

「もうー すぐそんな不安そうな顔するやる？  
笑つとき？可愛いねんから！」

とてもやさしい。

今まで浮いていたことが嘘のように思えてくる。

自分からも何か、何か話さないと・・・

「クリスマス会 来ますか?!」

衝動的にそう、いつてしまった。

あわてて口をおさえるしぐれ。

先輩がくすくすと笑う。

「いってもええんなら、いきたいわー。」

けど、他校の子らが嫌やいうんならいかんほうがええやるーけど

ええん？」

わざとらしさがまた、嬉しくて。

「嫌なんかじゃないです・・・みんなきつと歓迎してくれるから・・・」

空桜や麗がこの人を拒むはずがない。

むしろ学校で友達ができたって、自慢すればきつとよるしぶ。

「ほないかせてもらおうわ！誰の家でやるん？」

「しぐんち！」

嬉しすぎて、即答してしまう。

表情もいつも以上に明るい。

「そうなんや。何人くらいあつまんの？」  
え？

何人くるんだろう。  
空桜とうららんと……

あと、りっちゃん先輩たちも誘うかな？  
それと、うららんが紗優・ちゃん？とか峰岡なんか……とか  
いった気もするけどな

「ああ、千景か」  
あれ？知ってるの？

「幼馴染や」  
えっ っと……

そうなんだ……  
じゃあまあ、知り合いもいるってことで……？

「よくわからなくなってきたな」 とりあえずまあ、よーさんおん  
ねんな？

「楽しみやわー」

楽しみ……  
しぐと一緒に遊ぶのが  
楽しみ……

嬉しい。

そんなふうに思ってくれる人がいるなんて

とても・・・とても。

しぐも・・・っ

楽しみっ！

けど・・・クリスマスの前に・・・

うーん、うららん覚えてるかな？・・・？

「ちーつよちゃんっ」

幼いあたしは 公園で友達を見つけていた。

振り向くちよちゃん。

手をふってくれる、ちよちゃん。

手をふりかえず、あたし。

とても楽しかった。

とても幸せだった。

「ちよちゃん何してるの？」

ちよちゃんは、花壇をみていた。

「お花つて可愛えなー思て！」

目が輝いていた。

ちよちゃんは、可愛いものが好きだった。

あたしはそんなちよちゃんが、好きだった。

「峰岡ー」

・・・っ?!

気付いたら、そこは教室の中だった。

夢・・・か

どうやら幼いころの夢を見ていたようだ。

居眠りしていたあたしを、クラスメイトたちが嘲笑う。  
日常茶飯事だけだ。

ちよちゃんかあ 最近会ってないな・・・

中学わかれてからめったに連絡もとらなくなったし

・・・家は近いのに

・・・会いに行ってみようかな

黒板横のカレンダーを見る。

クリスマス・・・か

そういえば雨宮先輩たちに誘われた。

真夜先輩も誘おうと思ってるっていつてたけど・・・

結局どうなったんだろうか？

ききにいつてみようかな・・・？

・・・あたし

参加することになってるのかな

まだまだ親しくは話せないと思う

紗優ちゃんとも話してみたけど 何か壁を感じた

真夜先輩もきつともう 恐ろしいこと企てるような人じゃなくなっ

たはずだけど

やっぱりなんか 隔たりって、存在してる。

つまりあたし浮いてるのかな・・・

ため息をつく。 のを、隣の席の子が見て笑う。

「起立」

クラス委員の声がした。

ああ、もう終わりの時間が

誰かに・・・ 会いに行くべきだよねえ・・・

同時刻、刃流

退屈な授業をきいていると、後ろから手紙がまわってきた。

今日カラオケ行かない？

行きたいねんけど・・・

空きスペースに返事をかく。

こういう時間は、楽しい。

「えー 来週実力テストがあるからな、しっかり復習をしておくよ

うにー」

はげ・・・じゃなくて先生の話はかるく受け流す。

部活なんてさぼっちゃえばいいじゃん！

大会？え、もう冬なのに？

へえー じゃー終わったらカラオケで

かなりのスピードでかえってくる。

眠気が吹き飛ぶ。

窓のほうをみる。

隣の男子校の校舎が見える。

私立である分 敷地はひろいのに、何故か両校とも校舎が端にある。

乙時雨はさすがに離れてて見えへんけど。

乙時雨・・・

そついや千景・・・

11-1、ちよとまどかの月曜日

実力テスト前ということ、部活が休みになった。  
大会やのになあ……

定期ならともかく、実力で休みになるとか刃流ありえへん！。  
普段なら友達と遊ぶんやけど、今日はそーいう気分じゃないねんな。  
……

……ん

乙時雨の制服や

店先で悩んでいる乙時雨生。

近づいて顔をのぞきこむと、案の定知らない子だった。

「何か……？」

「ん、いやあ、険しい顔してたから 何さがしてんのかなー思て

「……幼馴染がこの町にくるから、名産食べさせてあげたくて」  
無表情。見た感じで、二年生か三年生。

「名産ていうか……お土産っぽい感じやんな？んーこの饅頭っぽい  
やつは？」

「基本的に食べたことないから、おいしいかどうかわからないのよ  
ね。」

あなたそれ、食べたことあるの？」

「ないけど まあ」

「じゃあそれにする」

購入してから、しばらく一緒に歩いた。

「私、こんな風に他校生と歩くの初めて」

「幼馴染とはないん？」

「学校離れてから会うのは今回が初めてなの。なんとなく可愛い笑顔。」

「そついえば、名前きいていい？」

かみちか  
「神近ちよ」

「・・・二年やけど、もしかして三年生やったりする？」

「あ、うん でも別に大丈夫。」

私、まどか。あたし新まどか。」

「三年生なんや。じゃあ、やっぱり乙時雨のあの話、ほんまなん？」

生徒会長がつていう「

「え？あ、あれ・・・」

まどかは考える。

あの迷信は・・・

もしかしたら本当かもしれないけれど

私は偶然か何かだと思う・・・

・・・人をひきつける魅力があるらしいのだけれど。

それで春日崎さんみたいな人もひきつけてしまったわけだし

まあ、私からみたらテストで勝ちたい相手。

それだけ。

「不思議に思ってたん

結構仲良さそうに話してたし うちの一年と」

え

ああ、そういえばそんな子いたわね・・・

「機会あつたら試してみたいねんなー

ほんまに死んだらどーしよ？」

けらけらと笑うちよ。

・・・死ぬのが怖くないわけ？

「死なないわよ。あんなの迷信。

・・・本気で怒らせたらどうなるかはわからないけど・・・

あの人めつたに怒らないし」

「くわしいな？」

・・・

よめない。

抜けているようで きちんと計算されている。

機会を・・・

「・・・あの刃流の一年生に近づいた・・・ってこと？」  
まどかもまた頭がきれる。

もしかしてこの人も春日崎さんみたいな人？  
だから乙時雨の制服をきた私に近づいた

「近づいたって・・・仲良くなるう思っただけやけど？」

まあ、生徒会長と仲良さそうやったことに興味をもったんは事実  
やけどなー」

どこまでが本心なのか、わからない。

つくづくおそろしい人だと、まどかは思う。

でも・・・

私に話したことを後悔させてあげる・・・

私は便乗するほど悪い人ではないけど

黙って悪事を見逃すほど良い人でもないのよ・・・

11-2、立雲と八代の火曜日

夕方。

部活帰りの八代を待ち伏せする。

実力テストなんて糞くらえだけど、

おかげで部活ないわけだし。

たまには、ねえ。

うちも向こうもエスカレーター式だから、三年になった今も部活は  
続けている。

あれ？八代って何部だっけ？

と、校門からでてくる八代がみえる。

・・・んっ?!

今更、門の反対側に乙時雨生がいたことに気付く。

え、これいわゆるダブルブッキングってやつ？

あれ、それは予約が・・・だっけ？・・・わからん。

「立・・・?」

怪訝な表情で私を見る八代。

そんな八代を見て、例の乙時雨生が驚く。

あ、もしかして

私の視線を気にしたのか、八代もふりむく。

目があう二人。

「うっ……うっ、ごめんなさいっ……!」

「え、ちょ」

走り去る少女。

あ、やっぱりそうなんだ……

「本当モテるね……」

あきれるくらい。

そして八代は珍しく顔が赤い。

ふふっ 明日は雨?

クリスマス周辺の予定をついでにきくつもりだったけれど……  
なんかいやな雰囲気。

とりあえず隣で歩いてるんだけど 家近いし。

なんか…… いやな雰囲気!

「さ、最近……どう?」

「どうって」

「んと……部活とか?」

「……三年はもう試合ないから、指導してるけど  
……別に普通」

普通、普通か。

そうだよ、普通だよ。

「……そういえば

この間兩宮先輩の卒業文集見つけた」

「あ、うららんのお兄さんの！マジで?!」

「うららんで……」

だって、親しくなるうって、決めただもん。

「で？内容は？もしかしてシスコンなこと？」

……!

八代がふいた!!

明日は嵐だ……!

やっぱり、八代といるときが一番楽しいな。

うららんたちに誘われたけど……

クリスマス…… 八代と二人がいいな……。

でも断ったら傷つけちゃいそうでこわい。

八代も一緒につて、いってくれたけど……

途中で抜ければ…… でもな。

それも相談しようと思ってきた。

けど……

なんか八代みてたら、そんな悩むほどのことでもないような気がしてきた。

……あとで電話しよう。

11-3、空桜と歌波の水曜日

「ふわっつ・・・眠い・・・」  
「ねたら？」

心地良い風。

隣には爽やかな笑みを浮かべた歌波。

昼休みの生徒会室

そこに麗の姿はなかった。

仕方なく一人で屋上へ向かうと、その途中歌波に誘われた。  
そしていまに至る。

「屋上つて案外静かだよねー」  
毎日のようにきている場所。  
でも 毎日のように変わる雰囲気。

「もう寒いからね。中庭とかはまだまだ人気なのに。」  
フェンス越しに見下ろす。  
乙時雨の中庭が一望できる。  
遠くには、かすかに刃流が見える。

「私高いところ好き」  
歌波の髪が風になびく。  
「へえ。イメージ的には高所恐怖症って感じだったんだけど。」  
「よくいわれる。」

笑いあいながら、二人はその場に弁当をひろげる。

「あ！サンドイッチ！」

「うん 手作りなのー。」

「凄いね！歌波いいママになるよ」

「本当？」

歌波も空桜も楽しげだった。

ただ ほんの、一瞬だけ

「・・・歌波っていつも自分でつくってるよね。大変じゃない？それが苦笑となっていた。

「まあ、料理は・・・嫌いじゃないし」

歌波の目がおよぐのを、空桜は見逃さない。

しぐれやうららんと接して こういうとこ、敏感になった。でも歌波はとくに何も 悩んだりとか、してなさそうだし。

と、足音がした。

期待していた。

振り返ると、階段をあがってきたのは二年生だった。

・・・やっぱうららんこないか。

「こんにちはー・・・」

歌波はふつうに礼儀正しい。

先輩方は軽く手を振り、反対側へと向かった。一人がこっちをにらんでいた気がした。

・・・気のせいだよ。知らない人だもん。

「歌波つて真面目だよ」

「んー・・・空桜ちゃんっているんな先輩と仲良いよね。

だからなのかな。なんか・・・疎といなって思うの」

疎い？

「ほら、私が真面目なんじゃなくて 先輩に挨拶つてぶつうだと思  
うの・・・」

・・・そうかな？

・・・確かに この一か月間で色々な先輩と親しくなった。

けれど、先輩は先輩だつてきちんと思ってる・・・

・・・うららは友達

・・・よくよく考えたらあたし、馴れ馴れしすぎたのかなあ？みんなに。

「でも、それも良いとこだよ、空桜ちゃんの。」

やさしげな笑みをみていると、麗を思い出してしまつ。

今日まだ一度も会っていない、ただそれだけで とてもさみしい。  
どうして？

あたしにも・・・さみしいって感情があつたっていいじゃない。

つらいとき 友達は心の糧となるのだから。

「・・・そうだよ。仲が良いならいいとして、

先輩には謹んで接すべきだよ」

「謹むつて・・・」

楽しそうだった。

歌波はいつも 楽しそう。・・・朝はよわいけど

あたしももっともっと 人に好かれる人間になりたい・・・な。

11-4、真夜と千景の木曜日

峰岡千景が図書室へ行くと、隅の方の席に真夜がいた。隣に座ろうと、一瞬思う。

やっぱり気まずいとも、一瞬思う。

そうこうしている間に、向こうから声をかけられた。あわてながらも、結局すわることにした。

真夜のよんでいる小説は、英語でかかれていた。ページをめくるスピードがはやい。

「よくそんなにはやく英語なんて読めますねえ……」のぞきこんでみる。

ところどころしかわからないが、どこか違和感がある。すると

「これ、イギリス英語」と真夜がおしえてくれた。

それで、違和感。納得する千景。もっていた本をとりだす。

この間紗優にかりたものだ。

千景が話題を探していると、

「……留学」

ぼそつと 真夜が突然言い放った。

わけがわからず、間抜けな声をだしてしまふ千景。

「高校からは英国でって小学生のころ思ってたけど  
親いないし……諦めた」

めくる手を休めず、冷たい声で言った。

真夜先輩が自分のこと語るなんて・・・  
まずそれに驚く。

・・・いま居候させてもらってる人に頼むのって、勇気がいるよね・・・。

でも諦めること、ないよ。

そんな大きな目標、すてちゃだめだよ。

あたしが・・・勇気づけなきゃ。

「えっと・・・イ・・・ギリスツ?・・・好きなんですか?」

何でそんなこときいたんだろう。

言った直後に後悔する。

「幼馴染が・・・・・・」

途中でとめる。

何かを考えている様子。

幼馴染・・・と 会いたくて?

っていうか、真夜先輩つてもしやバイリンガル・・・?

「約束してくれた張本人が夢を壊した・・・

私も刺されて入院してたとき

あの子ならわかってくれるんじゃないかって思ったけど」

雨宮先輩のこと・・・。

真夜はそれ以上何もいわなかった。

夢があつて　そのために頑張つてたんだ  
なのに・・・

・・・そりゃ、思うよ。

自分と似た境遇の人に会ったら　わかつてほしいって、思うよ。

・・・で？

雨宮先輩は、何

理解してあげなかったの・・・？

・・・

どうして？

だから・・・　憎いんでしょう？

廊下を歩いていると、進路指導の先生にとめられた。

「雨宮さん……いつになったら志望校調査だすの？」

眉間にしわをよせ、せまってくる。

「いきたい高校、ないの？ほら……刃流とか、すぐ近くにあるけど。」

「……ないです」

事実。

乙時雨は刃流と違って、高校がない。

そのため三年生は受験勉強に励んでいる真っ只中であった。

ため息をつく先生。

「あのね、みんなもう願書とかかいているの。どうするつもり……？」

「どうするといわれましても」

本当、どうしようもない。

高校なんて自分のなかでは みんながいくからいかなきゃってだけだし

とくに目指したいものもないし。

「……あなた頭良いんだから、どこでもいけると思っけど……」

……この地域の進学校っていったら

華音かのんとか、神代くましろとか…… どう？

「じゃあそれでいいです」

「ちょ……っと、ちゃんと自分の意思で決めなさいよ。」

もう…… 昨日、二年生の子が先輩を留学させてください！なんてきたのよねえ 先輩おもしろいよね。」

え？二年生？

「春日崎さん知ってるでしょ？あなたみたいに毎回五教科満点、とまではいかないけれど」

英語がいつもすごい。最近知ったんだけど、母国語だったらしいのよね〜」

・・・はあ

それは初耳・・・え？あれ？

「・・・興味ないか」

再びため息をつき、あきれた、とでも言いたげにその場を去ろうとした。

・・・きいたことがあった気がする

よく思い出せないけれど・・・

呼び止めようとして、やめた。

呼んだところでききたいこともないし

春日崎さんとこれ以上関わられる気もしない。

そして何よりあの人のことを気にしていると

なんだか嫌なことまで思い出してしまいそうで、こわい。

興味ないってことに・・・しておきますか。

「先輩」

不意に声がした。

「あ、紗優さん」

「・・・あのう、普通に紗優ってよんでください

なんか・・・堅苦しいって言うか・・・見下ろされてる・・・って  
言うか・・・」

「・・・すいません」

前から思っていたけれど、紗優って妙に正直。  
真っ直ぐなのはいいことだけだ。

「さっき華音って・・・いってましたよね  
ええっと・・・」

「それ、お姉ちゃんの志望校だったんです  
・・・はあ

本当に、耳がいたいことばかり。  
間接的にせめられてる。

だから今はそういう系の話、ききたくない。

「先輩は頭良いから、いけると思っています。

でも・・・少しだけ下だけど、刃流の方が良いんじゃないです  
か？」

刃流？

「なんか、学祭とか参加してて・・・なんか・・・似合っ  
ていうか輝けそうって言うか・・・」

あ、あくまで個人的な意見です」

「あ・・・ありがとございますー！」

予想外、麗の笑顔に紗優は驚く。  
そして赤面する。

刃流ね。

そう、ですよね……。

深く考えすぎず 目の前にあるところへいくのが一番はいい……

春日崎さんには きっと夢があるんだと思う。

考えたくはないけど きっと彼女なりに頑張ってる。

ならば自分だって

自分なりに努力してみれば…… 何かが見えるかもしれない。

……刃流か。

しばらく無言で廊下を歩いていた。

窓の外を見る。

冬の風景。

冬が過ぎたら 春がくるんですね……。

白い空に微笑んだ。

11 - 6 , 刃流の土曜日

「実力終わったあーっ」

元気よく部室の扉をあける立雲。

くすくすと笑う部員たち。

「あれ、部長、彼氏さんとデートしなくていいんですか？」

「え？なんで？」

楽器をとりだしながら、いつものスマイル。

「せっかくの土曜日なのに」

「んー 向こうも部活だろうから？」

吹奏楽部の部室はいつも明るい。

そしてみんな、仲が良い。

「先輩方、高校はそのままなんですか？」

「うん、なんで？」

「共学にかえないのかなーって」

「あ、そっかー でもせっかく中高一貫なんだし」

私に関する話題には、必ずといっていいほど八代がでてくる。  
なんか、恥ずかしいよ、毎回。

ほかの部員の恋バナしようとする　みんな黙りこんじゃうくせに。

「あ、うちの高校って、乙時雨からも結構きますよねー。」

お、よくぞ話をそらしてくれました・・・！

結構くる・・・か。

うららははどうするんだろう？

刃流こないかな？

かすかな期待からついうかべてしまった微笑を、後輩たちが嘲笑う。まあ、こういうのは日常茶飯事なんだけどね……。

### 同時刻、バド部

二年生は冬の大会があるらしい。

一年生でもうまい人はでれるらしいんだけど、うちの部は残念ながら……。

あと、三学期はじめには乙時雨との交流試合があるから楽しみ。

なわけで、土日も練習に励んでいる。

この間話しかけてくれた先輩は、いつものことながら上手い。声にはださずとも、心のなかで毎回応援するようになった。

それで気付いたのは、思っていたよりもずっとファンが多く、その先輩のする試合で応援の声が途絶えることはほとんどない、ということ。

誰にでもやさしいんだろうなと、少し嫉妬してしまう。

目があうと笑いかけてくれる。それに最近、こたえられるようになった。

自分も負けないうようにと、頑張った。

勝率がだいぶあがった……気がする。

「奏さんって、神近先輩のことすきでしょ」  
先日きかれた。

同級生に話しかけられたのは久しぶりだった。  
それも、先輩の話題。

すきかときかれたら、すきと答えると思う。  
尊敬という意味でのすきだと、自分のなかでは認識している。

「神近先輩って 見てると、自分も頑張ろうって気持ちになるよね。」  
同感だった。

妙にやさしい同級生のことも気になったが、これも先輩の力かもと  
嬉しくなる。

先輩、本当強い。  
強くて、手本になるし 笑顔が綺麗だしやさしいし  
なんだかうららんみたいっ

とっても嬉しい。  
実力テストが終わって、部活がまたはじまって・・・ 楽しい。

しぐは部活が大好きです！

「おつかれーちよー やっぱ強いねー」  
帰り際、先輩方の会話をきいた。

「そーでもないでー」  
やっぱり楽しそう。

先輩きつと大会、上位に入るよね・・・  
靴をはきかえながら、想像する。賞状をもらっ先輩の姿を。  
絵になるよなあ・・・。

「そーいえばー聞こうと思ってたんだけど、クリスマスあいてる？」

あ・・・。

「んーまあ あいてるっちゃあいてるけど 何かするん？」

え？

あいてる？んだ？

「いや、詳しいこときまってるけどさ。遊ぶでしょ？やっぱ？」

「せやなー あ、でも一年生の子にちょっと誘われてんねんー」

「はー マジで？」

うわあ、いやそう・・・。

そりゃそうか・・・。

やっぱり、しぐたちのところなんかより 友達とあそんでください  
って言おうかな？

きてほしいって・・・思うけど

でも、遊びたい人と遊ばなきゃ・・・だめだしね。

「ちよつと考えてみるわ！」

軽く罪悪感がした。

11・7・乙時雨の日曜日 前

「え？クリスマス？」

歌波も誘ってみた。

彼女はこまったような顔をして、しばらく考え込んでいた。

「私はいけるかもしれないし・・・いけないかもしれないかなあ」  
なんて曖昧な返事をされる。

歌波にしては珍しい。

吹部は日曜が休みということ、二人でぶらぶらしている。  
歌波の私服が可愛いすぎて、私・・・って感じだけどまあ、気にしない。

「あれっ、刃流って期末があるんじゃないかなかったっけ？」

「え？あれっ？そっか、12月だっけ？」

「・・・この間実テって行ってたんだけどなー」

「大変だよなー」

じゃあしぐれとか、しばらく遊ばないほうがいいのかな？

冬休みはじまるまできつと勉強するだろうし。

しぐれもつらんみたく頭良かったらどうしよう？

「何ニヨニヨしてるのー？」

・・・顔にでていたらしい。

歌波がくすくすと笑う。

「あー、そーだ！

ちよっと雑貨屋いかない？」

え、いいけど　と怪訝な表情な歌波。

クリスマスの交換用、結局買えてないだった。  
気持ちがかもってれば・・みたいなことを教えられたけど  
やっぱちよつとわかんないし。

「気持ちっていったら、マフラーあんだりとか、クッキーやいたり  
とか、でもいいんじゃない？」  
手作り？

あー、手作りだよね　気持ちって。  
でも裁縫とか料理とかそんないかにも女の子って感じのことほとん  
どやったことないし。

歌波はもう外見からしてそういうの得意そうだけど。

「まあ、雑貨っていうのはいい考えだよね」  
なんて笑顔で言いながら、商店街の方へ二人は向かう。

十二月、そろそろ息も白い。  
去年は外で遊びまくって風邪ひいたんだよねーと空桜は考えながら、  
前開きの上着をしめる。  
寒さには強いつもりなんだけど。

一人で苦笑しているとなりで、歌波はマフラーを巻きなおす。  
可愛いなーと再びニヨニヨ。  
それに気付いた歌波がぷつと吹き出す。  
笑顔でごまかす空桜。

ふと、歌波の視線が斜め前へ向けられてとまった。  
空桜でも知ってる、高級ブランド店。  
そこから出てきた一人の少年。

「刃流の隣のとこの制服だよなー 知り合い？」

ずっと見つめている歌波に問う。

我に返る歌波。

「あ、いや、いっこ」

焦っている。

顔がかすかに赤い。

あー、好きなんだ・・・と直感する空桜。

確かに、結構いい感じかもだけど。

「あつ、空桜ちゃん、あの男子校、初浦っていうんだけど知ってた？！」

空桜がその少年を遠目で眺めているところを、歌波が妨害する。

「知らなかった〜」今度は空桜が微笑む。

やっぱり可愛いもんなー歌波。好きな人くらいいるよねー、うん。

最近いろいろありすぎてそういうこと鈍感になってきてるなー私。

まあ、そんな1、2か月で人好きになったりするほどさみしい女じゃないけどさあ。

赤面する歌波をみていると、

「いつでも相談のるよ！」「応援してるよ！」と、いいそうになる。それを避けるため空桜は黙っていた。

そのせいか、雑貨屋につくまで沈黙が流れ続けた。

毎日のように通う商店街の片隅にある、和やかな雰囲気のお店。

空桜は暇をつぶしに何度かきたことがある程度だったが、歌波は常連だったらしい。

店の人は歌波の名前を覚えていて、挨拶をかわしたあとこちらに微

笑みかけた。

かるく一礼し、店の奥へと入る。

商品はどれも可愛く使いやすそうで、なおかつ安価なので空桜や歌波の好みに合っている。

だが、やはり麗やしぐれのことはわからない。

似合いそうで似合わなそうで、なかなか決められず歌波に意見をもとめようと思ったのだが、

考えてみると歌波が二人のことを詳しく知っているはずがなかったので、あきらめる。

すると、先ほどカウンターにいた店員が話しかけてきた。

事情を説明すると、店員はかわいらしい笑みをうかべ、

「おそろいの文具とか・・・どうかな？」と、いくつかもってきてくれた。

可愛いーと、歌波もはしゃいでいる。

「文具・・・いいかも。やっぱり実用品っていつても、よく使うのって文具だよな」

と、気まずいながらも歌波に話しかけると、

「ねえ見てみて！これ、星座がかいてあるっ！よくない？可愛いなあい？」

歌波は至って普通にハイテンションだった。

普通、というのは 買い物をするときの歌波はいつもこんな感じということである。

普段はおひとやかなのに、こういうときはかなりはじけている。

逆に空桜は、真剣にえらびすぎ、スタティックになる。

「空桜ちゃん何座？」

「あ、かに座」

「かに・・・あつた〜！キャンサーだよキャンサーッ」  
ついていけない・・・。

楽しいは楽しいけれど、よくまあ、そこまではっちゃけられるよねえ、歌波・・・。

普段とのギャップがつけるかも。

お揃い、色違い・・・いいかも。  
星座も可愛くていい。

でも・・・あたし、うららんたちの誕生日とか、知らないし・・・。  
何で知らないんだろ〜と疑問に思うくらい、仲良いつもりなのに。

「きいてみたら？」

え？

「メアドとか知ってたら今きけるし〜」

あ、そっか。

うららんのはきいたことないけど、しぐれなら。

携帯を取り出す。

「さりげなくだよ〜！」

とりあえず、誕生日いつだっけ〜？とかでいいよね。  
いろいろと頭の中で自問自答しながら、送信した。

「何かいろいろ考えてたでしょ？」

あ、ばれてる・・・。

返信を待っている間、歌波としばらく話した。

歌波が天秤座ということ、それも手に取ってみる。  
可愛いよね〜と、やはりうるさい歌波。

しばらくして、着信音があった。

しぐれ今何してるんだろっ、などといったことを考えながらひらくと、

明日！

本文は一語だけだった。

啞然として、一瞬二人で凍る。

「あ、ああ明日アアア?!」と叫んだのは、数秒たってからだった。

「どどどどどしよう?!全然知らなかったし・・・プレゼントとかどうしよう?!!」

あわてる空桜。直接的にはあまり関係のない歌波も、一緒にあたふたしている。

「う、うん とりあえず何かでて適当に買って・・・ね!」

「そうだよねいきなりだもんね?!」

何故歌波まであわてているのかという疑問は出てこず、ただ何を贈るか迷うのみだった。

しばらく店員も合わせた三人で選び、そして無事買い終えるときができたときは

ほとんど何もしていない空桜にも達成感があった。

だが、それに気をとられてクリスマス用の買い物を忘れてしまった。ひきかえそうとも思ったのだが、歌波の提案で違う店を探すことにした。今度は文具屋を。

商店街から広い道にでる。

少し歩けばショッピングセンターがある。

文具屋はそこか、もしくは学校の近く。

どちらへいくか相談していると、一台の車が二人のそばにとまった。

二人が驚いて後退りすると、後部座席の窓が開いた。

「乗りますか？」

あのっ・・・ 峰岡さんが!!」

啓さんの運転する車の行先は、此処だった。

麗から真剣な表情で知らされたのは、峰岡千景が車にはねられたということだった。

車でおくつていただいて、啓さんはそのままどこかへ行ってしまった。

白い建物で、沈黙は流れていた。

刃流祭でうららんと委員長と峰岡先輩が接触したときのこと、あとからきいた。

私はあるとき 現場にはいなかった。

だからうららんが教えてくれた以外のことはわからない。

話からすると、峰岡先輩の負の感情はもうほとんどないだろうと推測できた。

だから、機会があれば仲良くしてみようと思っていたのに……まさか交通事故にあつとは。

歌波もなりゆきでついてきている。

峰岡先輩のことは、とりあえず名前と顔が一致する程度、とのことだった。

変なことには巻き込みたくない……。

歌波が私と一緒にいたのは偶然だし

そもそも私たちがうららんたちが会ったのも偶然  
ていうか…… 事故っていうのも、きつと偶然

私たち三人をとりかこむのは、重い空気。

少し向こうに、先輩の友人と思われる人たちがいる。  
その会話はこちらにまでかすかにきこえてきていた。

「何か……なんともいえないよね……  
生きてる……よね千景」

声がふるえているのが、約一名。  
表情からも、その不安は感じられる。

ひとりが横目でこちらを見ている。

「……生徒会長」

多分麗にもきこえているだろう。  
だが、麗は無表情を保っている。

「あ………ってことはもしかして

あの噂が本当だった……ってこと？」

その言葉で 空桜のなかの何かが崩れた。

あの………噂。

転入してきてすぐ、歌波に教えてもらった、噂。

けれどあれは、ただの偶然だったんじゃない……

うららんは人気だったから……

うららんを良く思わない人が逆に狂人扱いされてそれで精神的につ

て……

しぐれもいってたじゃない

どうして峰岡先輩に？

そんなはずがない。

峰岡先輩は…… 大丈夫だったはず。

委員長の件でいろいろもめたらしいけど、でももう大丈夫なんだよね。

じゃあこれって・・・やっぱり偶然だよな？

そうでしょ？

偶然でしょ？

なら、やめてよ

うららんのこと悪くいうの、やめてよっ

訂正するため立ち上がろうとした。

けれど、とめられた。麗に。

ひぎにそつとのせられた、麗の右手。

こちらを向くこともなく、ただ、そつと。

歌波は会話のほうを真剣にみつめている。

向こうはそれに気づいていない。

歌波はどう思っているのだろう。

あれを・・・あんな迷信を

信じているの？

「ねえ、歌波」

次に頭をよぎったのは 歌波にきちんと話したいという気持ちだった。

不安そうなの、うるんだ瞳。

「空桜ちゃん、私」

まっすぐだった。

麗がうつむく。

そんな彼女の手を包むようにして、空桜も手をのせる。

「私は・・・信じたいって思ってる・・・  
思ってますから・・・先輩のこと」  
その視線は麗に向けられていた。

「歌波・・・」  
歌波の哀しげな笑み、なんとなく温かい。

きつと・・・  
今この状況でもっとも麗をおそれているのは 麗自身だろう。

変な噂がたつて、それで毎回毎回  
きつと・・・つらい思いをしてきたんだと思う。  
本当はただの偶然なのに自分のせいになされて  
だんだんそれが事実なのではないかと思うように・・・なってい  
たのかもしれない。

そんなの被害妄想にすぎない・・・から・・・  
ふと、聞きなれない足音が鼓膜に響いた。  
一斉にそちらを向く。

それは 私服姿の真夜だった。  
様々な考えがうかんでくる。  
けれど、今この状況で物事をマイナスに考えるなんて・・・やめて、  
私。

真夜は麗の目の前で足をとめた。  
座っている私たちを、見下ろす。

「いつとくけど私、あなたのせいとか思っていないからね」  
感情のない声。

多少、何かを隠して無理をしているようにも見受けられる。  
向こうにいた千景の友人たちにも注目されている。  
しばらく沈黙が流れたあと、麗は微笑を浮かべた。

「峰岡さんのために、きたんですよね？」

口をつむいだままの真夜。

「春日崎さんて、本当はとってもやさしいんでしょ？」

皆が不安そうに見つめるなか、麗は次々と言葉をつむぎだす。

「留学の件、聞きました。峰岡さん・・・あなたのために」

「黙って」

その視線は、とてつもなく鋭い。

一瞬にして場の空気が変わる。

麗も衝動的に口をとじる。

「あのね、私、あなたのこと、一応嫌いなもの。わかるよねえ？」

確かにいわれたよ、進路指導のやつに。来年の夏からつてすすめ  
られたけど？

それがあの子のおかげだってこともとりあえず知ってるのね  
けど、あなたにいろいろいわれたく、ないから。

・・・色々悪かったけど、それとこれとは別だから？

今更同情してましたとか、そーいうのなし、あなたも悪いんだし」

それだけ言い捨てて

真夜はその場をあとにした。

・・・え、それだけ言いに来たの？

待つてなくていいの？

そんな疑問がよぎる。

でも、なんだかんだいって委員長らしいなあって思ったのも事実だし。いつもはもつと良い子ぶってるのに、いいのかな？こんな大勢の前で。

ぽかーんとしている友人たちをみて、微笑する。

麗も、微笑んでいた。

そうだよね・・・

うちらんは知ってる。

嫌われている理由も 彼女の性格も・・・経緯いきわづらひも、すべて。

だから、過去は過去として・・・笑っていられる・・・

そのほうが人生楽しく感じられていいんじゃないかなって思う。

この先も そのまんまのうちらんで、どうかいてください・・・。

## 12-1、病院にて

目が覚めると、そこは白い空間だった。

起き上がって、ようやく病院だということに気付く。

「なんや、たいしたことないやん」

そんな声が、耳にとどく。

「え、ちよ……？」

驚きだった。

ずっと会っていなかった幼馴染の姿が、うつる。

これは夢？現実？

そして思い出す。

意識がなくなる少し前、道路を渡っていたことを。

あ、ひかれたんだ、あたし。

全身少しずつ痛いのは、きつと骨折とか打撲とか。

でも何とか起き上がれるっばいし、大したことないんじゃないの？

「やっぱ千景すごいなー 車ひかれてそんな元気なん、初めてみたわ」

幼馴染、ちよがケラケラと笑っている。

制服姿だ。

「……なんでいるの？」

会いたいとは思っていたけれど、機会がなく会えなかった、友達。

会えたのは嬉しいけれど、もしかして……といういる考えてしま  
う。

「ん？んー、昨日は結構いろんな人きとったらしいねんけど、あん

た寝てたからさー

うち今日偶然きたら起きたってわけや」

昨日・・・もしかしてあたし、結構眠ってた？

いろんな人って誰だろう？真夜先輩とか・・・それは希望だよな・

でもちよがきた日に起きたって・・・それは・・・ちよつと運命感  
じるけど・・・さ

「そうじゃなくて・・・なんでちよがあたしに会いに来たのっ  
て・・・

ていうか今日何月何日？」

「うっわ大げさ！何月とか。12月にきまつとるやん！今日は12  
日やで。」

「一晩寝てただけつちゅーことやな」

「え、学校」

昔と全然変わらない。

温かい笑顔も、中性的な外見も、方言も、何も変わっていない。

それだけで、元気になれる気がする。

「終わったわ。期末初日やったから、部活ないしな」

窓の方へ歩いていくちよ。それを目で追う。

「・・・明日も期末あるんじゃない？」

「あるで？」

そっけない返事。

やっぱちよはちよだなあ。

「勉強しなくていいの」

「めんどいやんー！やりとーないわ。」

「あたしのために？」

「えー？何ゆーとんのー！うちが勉強嫌いなだけやで！」

そういつって、ほとんどわかってたよ。

何年たつても友達つて変わらないものなんだなあ……。

ちよもそう、思ってくれてたら嬉しいな。

いつか会いに行こうって、思ってた。

クリスマスとか……なんてちよっと思ってた。

ていうかクリスマス前に怪我するとか不運すぎ……。

なんだろう、うかれすぎてたのかなー。

真夜先輩のこととか、雨宮せん……。

……真夜先輩の気持ちを……理解しなかった……雨宮先輩の……

……ことを

「何くらい顔してんの？」

っ！

……そう……だよ

過去のこと考えたつて前には進めないよね

あたしが真夜先輩を支えられればそれでいいんじゃない

人を恨んだりとか……する必要ないんじゃない

「ありがとう、ちよ」

「ん？何が？」

「なんでもない」

満面の笑みを、千景はうかべた。

ちよはすこし不思議に思ったが、とくに気にしなかった。

人を嫌いになつたら

少しずつ自分も嫌いになつていく

人を恨んだら

その分自分もだれかに恨まれる

人を傷つけたら

すべて自分にもどってくる

前にすすみたいのなら 今を大切にすべきであって  
後ろを振り返る必要なんてどこにもないし  
むしろ後ろを振り返るのは 自分を弱さを認めることだから

あたしは 真夜先輩には 前にすすんでほしい  
あたし自身もきつと 前にすすみたい  
だから だから もっと楽に生きてみたい

そのために必要なのは 友達なんだよね  
会いに来てくれて とってもうれしいよ ちよ

ありがとう ちよ

「ねえ、また・・・ 遊んだりしようよ  
昔みたいにさ」  
「もちろん」

隔たりもなにも 存在しないからこそ

「不思議・・・じゃない？何で住んでるところは近いのに、学校違  
うってだけで

会わなかったんだらうって、すごく思うんだけど」「  
「うちもちよっと思ってたわー」

まあ、他校の子と仲良いですってのは自慢になってええんちゃうかな？」

「そつだよー」

友情が絆へと変わり あたしたちをむすぶ

「文化祭で会えるかもって思ったけど、いなかったよね？この間」

「学園祭っていおうやー もしくは刃流祭

・・・千景が来てること気付いたねん・・・声かけれんかったけど ごめんな」

「えっ 何で謝るの・・・」

・・・ちよ何してたの？出し物とか」

「あー 運動部やからとくに発表とかはなかってんけど、クラスの出し物ちやんとどつたで？」

もしかしたら、うちがおらん時間帯にきたんちゃう？」

「あ、そうかも」

会えるかもって、二年生のところは全部まわったつもりだったから・・・クラスも部活もしらないから。

小学生のころはあたしソフトやってて、ちよは確か、ハンドメイドだっけ？

家庭的な女の子だもん、こうみえて。

あ、習い事で新体操やってたっけ。

楽しく話した。

しばらくして、あたしが看護師に呼ばれたため、ちよは帰ることになった。

また来るわと、かるく手をふって、でていく。

ちよの制服、刃流の制服 似合ってた。

何でも似合う子なんだけど、他校の制服って違和感あったり可愛い

って思ったりするけど

ちよのを見てちよっとイメージかわったかな。

あ、そうだ・・・

昨日きてくれた人・・・ってわからないけど、もしまたきてくれたら、きちんとお礼しなきゃだよな。

心配かけちゃってるのも悪いし。だってこんな元気だもん。

検査が終わってすぐ、ちよが見ていた窓をながめる。

さすがに歩けないので近くからは見れなかったが、夕焼けで赤く染った空ならベッドからも見える。

美しい、空だった。

12・2・麗の料理

同時刻、

麗は一人で商店街を歩いていていた。

すれ違う乙時雨生に何度も避けられながら、店を探していた。

生徒会室のカレンダーを見て、思い出したのだ。

今日が何の日か、ということ。

今日部活ないらしいからもう帰ってるだろうけど……とため息をつく。

すると、どこかから甲高い声がした。

「どーこ見てるの？こつち

飛び込んだきたのは、

えっと……あれ？

……ああ、渉の

「彩葉ちゃん」

「……ちよつと忘れてましたっ？

今から家いきますねー」

この子は、渉と昔から仲の良い子。

小学生だから、付き合ってるって言葉をあてはめるのはまだはやいけど……

実質的にはそんな感じ。

昔よく家に遊びに来ていた。

男の子の友達はあまり連れてこないのになんて 不思議に思っていたけれど

最近はどうなんだろう？

麗自身が家にかえっていないのでわからない。

帰ってみても……いいかも

彩葉を呼び止めた。

一緒にいかないかと誘うと、彼女は笑顔をつくった。

麗の家は、商店街からそう遠くない。

小学生一人で暮らしているわりには広い。

まあ、涉しか住んでないことを公にされたら、ちよつとまずいけど。それは麗は当然として、客である彩葉にもなんとなくわかることだった。

多分、というより絶対 啓もわかっているはず。

なのに何故かあの人は一人で暮らす。

どーでもいいんですかねえ……

鍵は常備していた。

扉をあける音がきこえたのか、涉がでてくる。

そして、啞然とする。

「姉……ちゃん……何で」

抱きつこうとしたところで、彩葉の存在に気づきやめる。

「あ、別にいいよ……見てないから」

彼女もどきが遠慮する。

シスコンって思った……と彩葉の言動をみてショックをうける。

「だって涉がシスコンだったこと、ずっと前から知ってるし」  
そして赤面。

知ってる……か やっぱ知ってるか、そうだよな……

「・・・あつ 買い物忘れてました」

「え、あたし見て忘れて帰ってきちゃったんですか？」  
彩葉が嘲笑う。

渉も色々ごまかすようにして笑う。

・・・でも

何買うか決まらなくて

「プレゼント？なら、料理でもしたらいいんじゃないですか？」  
家だし？」

料理？

「うーんクッキーとか。麗ちゃん見た感じで上手そう」

・・・考えたことなかったですね

料理って、小学生のころの調理実習でしかしたことないんですよー  
いつも兄がつくってましたから。

だから・・・

できないかも・・・

「えー？嘘お じゃああたしおしえてあげよつか」  
さすが小学生、お気楽。

時間とかも・・・ありますから・・・。  
でもそういうテンションって嫌いじゃないですよ。

「・・・店でクッキー買った方がはやいですよね」

「えー？まじでー それはないですよーないない  
涉だつて見たいでしょ？麗ちゃんのお料理」  
いきなり話をふられて動揺する涉。

麗の見たくないって言えよオーラと彩葉の見たいって言えよオーラ。

「教えて・・・もらったら？材料多分あるから」  
勝ったのは彩葉のようだ。

覚えてるよ的な黒い笑みを浮かべる麗。  
背筋がぞつとする。

けれど、ここで前言撤回すると今度は彩葉に責められそうなので、  
できない。

蛇に睨まれた蛙ってこういうこと？・・・違う？

・・・まあ、興味あるし いいよね？

ため息をつく麗。

家庭的に見えなくもないんだろうけど、実際何もやってないからね  
え。

苦笑する涉を、キモイと彩葉。

彼女の料理の腕前はなかなかのもので、よくお菓子をもってきてく  
れている。

もっと言動が女らしければ、なんて考える。

実際自分も、朝夕自分でつくっているわけだから  
自己満足に至る程度の腕はもっている。

多分だけど、姉ちゃんの辞書に不可能なんて言葉ない・・・はず  
だから

きつと初めてでもうまくいくよ・・・ね？

それは期待なのか希望なのか

12・3、しぐねの誕生日(前書き)

あけまつりなめじりいりねごま

## 12・3、しぐれの誕生日

やっぱりうらん覚えてないのか・・・な

学校が終わり帰宅する今、しぐれはそんなことを思う。

昨日誕生日いつってきかれたけど

偶然だったのかな？

そりゃ、そうだよな。いつてないもんね。

知ってる・・・っていうか知ってたの、うらんくらいだよな・・・。

祝ってほしい わけじゃない。

でも覚えてて ほしかった。

「しつぐれっ！」

不意に名を呼ぶ声を耳にした。

驚いてふりかえる。

「空桜・・・っ」

駆ける。

うれ・・・しい。

「ごめんね！昨日まで誕生日知らなくて、即席でっ・・・」  
差し出す小包。

可愛い包装紙。

うれしい・・・っ

「わざわざきてくれたの・・・」

「うんっ」

嬉しい 嬉しいっ

友達からの誕生日プレゼントなんて・・・何年ぶりだろう？

「あつ、今ひらかないで！恥ずかしいから・・・」

照れ隠しに笑う、空桜。

可愛いな 友達って・・・やっぱり可愛いって感じるものなんだなっ

「じゃあつ・・・！」

そういつて、空桜は元来た道をかけていった。

あけるのは、家に帰ってからにしよう。

そうきめてカバンにいれる。

あけたついでに、携帯を取り出す。

着信・・・ 神近先輩？

そういえば・・・

この間部活で仲良くなって、アドレス交換したんだっ。

内容はお祝いだっ。

あれ・・・あたし先輩に今日誕生日だっって、いったっけ・・・？

でも嬉しい・・・。

プレゼント贈れなくてごめんっ・・・

全然・・・メールだけでうれしいし

返信しながら歩いていると、  
気付けば家が見えていた。  
玄関先に人影がみえる。

え

あれっでもしかして・・・

「うららんっ?!」

再び走る。

それは間違いなく、麗だった。  
珍しく、私服姿で。

「何で」

「何でって・・・渡したかったからですよ」

え・・・これ、もしかしてお菓子？

手作り?!

微笑む麗。

うららん料理なんてできたのっ?!

「味は保障できませんが・・・」  
苦笑する。

「大丈夫だよ！見た目すっごく綺麗だしっ  
うららん料理もできたなんて本当完璧だねっ  
しぐ、うららんが覚えてないっっておもってたから！  
すっごくうれしいの！だからねっ、それで それで」

でてしまった。

興奮しすぎて我慢していたこと全部だしてしまった。

けれど反省も後悔もしていない。

麗は笑って全部きいてくれて。

今日は最高の一日だって……

この数分で……思ったんだ。

やっぱり好きだって、思ったんだ。

そしてまた、着信音が、鳴る。

12・4、ちよと幼馴染

「やっとテスト終わったあーもう結果とかなんで張んのもって感じだよねー」

乙時雨ははってないのにさー」

「乙時雨もはるようになったらしいよ？今回から」

「え、馬路?!やだ〜」

今日も校門付近はにぎわう。

「ちよは楽勝だったっしょ?」

「まさか〜 授業きいてないし」

「きかなくてもできるじゃん うらやま!」

神近ちよは、クラスメイトたちと共に下校していた。屈託ない笑みを浮かべ、楽しげに。

「実テが期末より先つてのが意味わかんくない?」

「やんな!うちも思っと思った」

勉強はずっと嫌いだった。

「っつてことでカラオケ?」

「おお!いきたーい!」

授業だつて、ほとんど真面目にきいていなかった。

テストで平均さえこせれば、別に問題ないと思っていた。

「あれ?ちよ、何かノリ気じゃなさげ?」

「え？あー病院行こうか迷っててんけど・・・カラオケいこか」  
けれど 幼馴染がいた。

「あれ、大会つて今週末？」

「あー、せやなー」

テスト終わった日やから今日は休もってことなって

彼女は運動ばかりできて

勉強は自分が教えてあげないと 駄目だった。

「そっかー あっ、で、病院つて・・・いいの？」

「ええよ、そんな毎日いっても迷惑やる」

彼女のために

自分も勉強して

そして教えてあげなくちゃ、

小学生の自分はそう思っていた  
だから当時は結構真面目だった。

「そうとは思わないけどな」

幼馴染なんなら、心強いと思うよ」

「いやー 別に病気とかちゃうからな

心配ないって」

でも

勉強は嫌いだった

「でもさ、入院してるってことは学校休んでるってことじゃん

授業内容とかさー教えなくていいのー？」

今も昔も変わらず

嫌いなのに

あの子のために あの子のために

「え、他校やから 何教えたらええかわからんし」

なのに別々の学校に入って  
教える機会もなくなつて

「うち、勉強嫌いやから

そんなことのためにわざわざ行かへんわ」

勉強する理由がなくなった

「頭良いくせに何いってんの」

本当つらやま！」

「つらやまー！！」

「何それ はやってるん？」

けれど今、笑う。

悩み？そんなの、ない。

生きてて楽しい。

だって嫌いだったことを やらずにすむようになったんだから。

なら

幼馴染となんてもう、 別にあわなくなつていいんじゃないかって

思ってしまった

ずっと会ってないことを さみしいとか、いつしか思わなくな  
た。

なのに

普段何にも口をだしてこない親が  
珍しく話しかけてきたと思ったら

彼女の家から電話があったとか言って。

病院に行けとか言って。

言ったら普通に元気そうだった。

ずっと会ってなくて 彼女は結構さみしそうに微笑んできた。

罪悪感

自分は・・・

嫌いで 嫌いで・・・

大嫌いだった

期末前なのに勉強しない自分に

「あたしのために？」

ずっと昔からそうだった

何もかもすべて

幼馴染のためだった

でも

「わかってた」って  
そんな表情してたから

どうしてだかわからないけど・・・  
嬉しかった

迷ってしまったのは 一瞬だけだった。

今、悩みなんて ない。

「ほーらー、だからあ

もうそういう辛気臭い話なしやって！  
カラオケやる？カラオケ！」

「あつは ちよらしいね〜  
じゃ〜カラオケしよっか！あ、おごろっか？  
「ほんま?!」」

「うっそ〜 あたし今月ピンチだし〜」

だからこうして 笑っていられる。

12・4・ちよと幼馴染（後書き）

何故ちよの話になったのかは自分でもわかりません

こうしてみると関西弁で 助詞の省略多いですね。

同時刻、生徒会室

「え〜?!立雲ちゃんたちこれないの〜?!」「  
麗にすぎる空桜。

「やっぱり二人きりで過ごしたいんでしょうね」

「あ・・・そっかあ残念」

苦笑する麗。

いつもと変わらず、本を読みながら。  
ただ、普段と違う点が一つあった。

「あ、それ英語」

麗の本の指差す空桜。

「えっ 普通に読めるの?」

のぞきみる。

中身まで英語だった。

明らかに中学レベルをこしている。

「これ・・・春日崎さんが借りてたやつなんです」

よくみると、図書室の貸出用バーコードがはつてある。

麗の話によると、その本は春日崎真夜が図書室から借り、  
千景の入院先へもっていった際に貸してほしいといわれ、かしたも  
のなんだそうだ。

そのまま図書室へ返却してほしいとのことで、偶然見舞いにいった  
麗が頼まれた、というわけだ。

「春日崎先輩って、そんなの読んでもんだ」

「ぺらぺらめくっていたら、案外面白くて。」

珍しく麗が笑顔を見せる。  
空桜も自然と嬉しくなる。

「ねえ、クリスマス・・・さあ」

「あ・・・」

沈黙が流れる。

続きはいわなくてもわかっていて。

二人を誘うかどうか。

前にも一度迷ったのだが、結局誘えていない。

千景は事故にあってしまったし・・・ 難しいだろうと諦めていた。  
だが・・・  
どうする。

と、そのとき不意に扉がひらかれた。  
待ち人来る。

「春日崎先輩？」

無言で入ってくる、真夜。

そして、机の上に一冊の本をおく。

「これ、あの子に渡してもらえる」

それだけいって 立ち去ろうとする。

「え、ちょっと待って」

とめたのは空桜だ。

無表情でふりむく真夜。

「これ、続刊・・・ですよ？何で直接渡さないんですか？」

麗がよんでいるのと同じ題名。

その本には、2と大きく書かれていた。

麗と真夜の目があうことはない。

間には本という名の壁がある。

「今夜、出発するから」

「え？」

麗のページをめくる動きが、とまる。

「あー冬休みの間だけねえ」

便とれなかったから、ちょっと学校休むみたいなの」

わざとらしい笑みを浮かべる真夜。

「どこへ行くんですか？」

「えー？あの子にきけばあ？じゃ」

ガラッと大きな音をたてて、扉があき　そしてしまる。  
顔を見合わせる空桜と麗。

「クリスマス駄目だね」

でてきた言葉は、それだけだった。

13 - 1、クリスマス・イヴ1

「かつなみ、おはよー！」

「あ、空桜ちゃん」

駆けてくる友達に 園部歌波は戸惑った。  
私たちつてこんな風で・・・いいのかな。

「いよいよ明日から冬休みーっ いえーいつ

でも私、まだ校歌あんまり覚えてないんだよね」

「あ、そっか そういえば来たばっかだったもんね」

なんだ、そんなことかと胸をなでおろすと、空桜が首をかしげた。  
笑つてごまかす。

「あつしたーはー クリスマスパーティイイ

あれっ、歌波もくるんだっけ？」

え？

「確か参加するのはうららんとしぐれと・・・あれっ

そういえば全然誘えてないし〜」

あの二人とパーティですか

「あゝ私・・・あいてるよ」

「本当っ?! やったー! じゃあこれで4人だあっ」

「うん」

・・・心配することなかったかな。

前、曖昧にこたえたのには戸惑いがあったから・・・  
いまも・・・正直、あるけれど。

「でも・・・私、その・・・先輩やしぐれ・・・ちゃん? のこと  
あまりよくしらなくて」

「あつ大丈夫大丈夫っ! 二人ともそんなの気にしないと思うっよ〜?」

・・・私が気にするんだけど。  
いつも以上にテンションの高い空桜をみる。  
屈託ない笑み。

いいなあ、幸せそう・・・。

と、不意にチャイムがなる。

「あつ やばい！！終業式はじまっちゃっちゃんーいー」  
・・・うん。

私、空桜ちゃんのこと嫌いじゃないよ？

・・・裏切っちゃおうかなって思ってたけど  
でも・・・ やっぱり迷っちゃっうな。

会って間もない子なのに、なぜかひきよせられるから・・・。  
・・・空桜ちゃん、気を付けて・・・。  
それだけしかいえないけど・・・。

放課後、商店街

「いいの、断って」

「何で？だって私、八代と二人きりで過ごしたいなって・・・」  
普段無表情の八代が、珍しく微笑む。

その彼女、立雲も幸せそうにしている。

視線を前方にむけたまま、八代の手をとった。  
腕をくむ。

「八代 私のこと・・・好き？」

「は？」

「よく不安になる・・・八代、モテるから」

沈黙が流れる。

ただ無言で歩くだけで、どちらとも口をひらこうとしない。

さきにそれを打ち破ったのは

先ほどからそわそわしていた立雲だった。

「高校、どうするの？」

消え入りそうな声で尋ねる。

「・・・立は？」

「・・・刃流はエスカレーターだからそれでもいいかなって思ってたけど

やっぱり共学いって八代とすごしたい・・・

未来と一緒にさ、中一のころから目指してた高校 前に言ったでしよ？

八代も一緒にいこうって言ってたけど・・・でも未来いなくなつて・・・」

「まだ目指してるって この間いってたじゃねーか」  
感情のない声。

「うん・・・でも不安なの

八代はどうするのかって・・・ 八代、本当は私のことどう思ってるのかって」

「らしくない」

「え？」

今度は沈黙のために立ち止まった。

目があつ。

どちらも若干顔が赤いが、視線をそらすことはない。

まわりから見れば、今にもキスしそうな雰囲気だ。

「明日クリスマスだろ？」

「うん…… バレンタインではないよ？」

「冗談まじりに言う立雲。」

それを、抱きしめた。

「ゆっくり話そう」

「……二人で」

13 - 2 / クリスマス・イヴ2

夕方

白い部屋

そこへ入ってきたのは、珍しい客だった。

「えっと……」

……あつ、園部さんだっけ？」

名前を思い出すのに時間がかかるほど  
見慣れない顔だった。

「はい……」

春日崎先輩　いつちやいましたね」

「……旅行みたいなものだよね？」

「そうですね」

話題がない。

ほとんど話したことのない相手。

何を言えばいいのか、わからない。

何故ここへ来たのかも、わからない。

「峰岡先輩って　春日崎先輩のこと

尊敬してるんですよね？」

「え？……まあ、そうかな」

何を言いたいのだろう。

話の意図がどうもよめない。

「……夏から行くらしいですね 留学」

「あ、決まったの」

「……いつてました」

この子……

先輩とどういう関係なんだろう。

私は、顔と名前が一致するくらいだったけれど。

「千景ーっ きたったでーっ」

不意に入口のほうから声がした。

刃流の制服をまとった、ギャルっぽい関西弁少女。

そして、その背後にもう一人。

「ちよ……と、紗優ちゃん」

園部歌波は窓の外をみていた。

「ずっとこれなくて……何か、ごめん」

無表情の紗優。

声はよわよわしい。

「え？いや 何で謝るのって感じだよ！」

「事故ったってきいてびっくりして」

「うん〜 でも、全然大丈夫だよ？」

「明日クリスマスやな〜」

歌波を横目で見ながら、ちよが近寄ってくる。

「うん 暇かも」

微笑む千景。

それを紗優はみつめる。

「ちよはどうするの？紗優ちゃんも」

「うち、クリスマス会に誘われてんけど・・・  
千景と一緒にあったるか？」

「え？そんなの悪いじゃん 楽しんできなよ」  
そんな会話を歌波は聞き流す。

クリスマス会、もしかして空桜ちゃんとかかな？  
・・・いや、そんなはずないかな。

歌波は気付かれないよう、部屋をでることにした。

先ほどまで歌波がいた位置に紗優がたつ。

でていくとき、一瞬だけ目があった。

だが、ちよたちには そのことを伝えなかった。

あとになって、「あれ？園部さんは？」と探される結果になる。

携帯をひらく。

何件もの着信があった。

そういえば全然見てなかったなと、一件ずつ読んでいく。

そして、三件目にひっかかる。

クリスマスパーティー？

あの三人・・・か

もしかして、このちよって子も？

くるときに少しだけ話したけれど・・・

この子、峰岡さんの幼馴染らしい。

私は峰岡さんとそこまで仲いいわけでもないから、あまり関係ない  
のだけど。

13 - 2、クリスマス・イヴ2 (後書き)

今年中に完結すればいいな

### 13・3、二人のノエル

「泊まってくの？」

夜11時半

その部屋にいるのは、立雲と八代だけ。

「もうこんな時間だし、帰るの危ないし・・・

泊まってる？」

異性を誘うその光景、あと少しで日付が変わる。

「もうクリスマスだね

去年は何してたんだっけ？」

床に隣り合って座っている二人。

もたれかかっているのは立雲のベッド。

「八代？寝てる？」

反応がないので顔を覗き込むと、案の定目があった。

無表情で見つめ返してくる。

思わず赤面してしまう、立雲。

「夜の街ほつつきまわって説教くらってた」

「あー・・・ そういえばそうだねえ、今となってはいい思い出」

微笑む立雲。

珍しく、八代も笑った。

「・・・高校、どうするの？」

もう12月だから、今更受験勉強はじめるっていうのも大変でしょ

それに、初浦もエスカレーターだったよね？」

「俺はいいよ

受験勉強ならしてあるから」

「えっ」

意外なこたえがかえってきた。

私・・・何もしてないよ?!

「八代って勉強しないイメージがある」

「そう?」

小学校で塾いってたところだって、毎日のように遅刻して授業中も寝てたし・・・。

あつ、提出物は忘れるとこみたことないけど。

「じゃあ、神代くましろう・・・とか」

「立にあわせるよ」

「八代・・・」

優しすぎると、逆に不安になる。

私だって、どうでもいいんだよ?八代と一緒になら、何でもいい。

「親は大丈夫?」

「なにが?」

「今更共学うけたいって言うって」

「ああ、大丈夫だよ」

ちゃんと相談してある。

だって、未来がいたころから、みんなで神代っていつてたもので、でも

八代君と同じ学校いって卒業したら結婚すればいいんじゃない?つてにやにやされたってことは  
しんでも言えません・・・。

「八代こそ、いいの?」

「俺は別に」

八代の家族のはなし、あまりきいたことがないなあ。

家族だけじゃなくて、八代自身のこともそんな話さないし。

気まずい雰囲気だけど、隣が八代だから安心できる。

そのとき、メールの着信音があった。  
クラスメイトからだ。

メリークリスマスと、一言だけ。  
時計を見る。

「日付変わったね・・・」

・・・メリークリスマス」

携帯をとじ、八代の手の上に自らの手をかさねる。

「ジュワイユー ノエル」

八代がぼそっとつぶやいた。

「何それフランス語？」

「神代って国際化にすると第二外国語があるんだろ？」

「あっ そうだっけ？」

そういえばそんなこと、未来が昔いつてたような・・・。

八代、ちゃんと調べてあるんだね。

私、やっぱり八代のこと好きだよ。

ずっとずっと、一緒にいたい。

だから、私 頑張るから

未来のぶんも頑張るって、あのとき決めたから

だから・・・。

だから。

メリークリスマス、もういちど。

13 - 4、心からナビター

「結局この四人か？」

しぐれの家に集まったのは、空桜と歌波、そして麗。いつもの光景、に加えて歌波といたところだろうか。

歌波が先ほどから何度も麗の顔をのぞきこんでいる。

いつみても無表情、もしくは薄い笑みを浮かべているだけだが、その内に秘めた感情をよみとろうとしている。

普段そばにいる空桜やしぐれは決してしない行動。

比較的まじめで論理的な歌波だからこそ、できる行動である。

「どうする？プレゼント交換いつちゃう？」

「いつちゃういつちゃう？」

しぐれと空桜がはしゃいでいる。

ふと、麗が歌波のほうをみた。

目があつが、すぐにそらしてしまう。

・・・気まずい。

何が気まずいって、よくわかんないけど、やっぱりまだ・・・あんまりよく・・・

「あー！」

突然、しぐれが大声をあげた。

「え？」

きよとんとする三人。

「うーらん・・・しぐんち、大丈夫だった？」

「え？」

「その……」

麗の家は、元お金持ち。

だが、両親が他界したのちは、その遺産を生活費に暮らしていた。今は兄が少しは稼いでできているけれど、お金は減り続ける一方だ。

そんな麗が、しぐれの豪邸にくと、どうも落ち着かないらしい。しぐれは、それを把握していながら麗を誘った。勿論、本人も自覚して。

「……なんか、もう過去のことなんてどうでもいいなって思ったんですよね」  
嬉しそうに微笑んだ。

美人だから笑えばいいのに、と いつも勿体なく感じているしぐれと空桜が、それを見て喜んだ。お互いを見合わせて。

「今は今で、なんだかんだいって幸せなんですよね……」  
だって、みんながいるでしょ？」

「あ！今タメ語だったあー！」  
「……え？」

再度、顔を見合わせて喜ぶ二人。

その状況についていけない歌波に、自嘲気味に微笑みかける麗。

「ほーら！そういう神妙な話はまた今度ね！  
せつかくのクリスマスなんだし、さわいでこー！」  
「はい！」  
とにかく、嬉しそうだった。

それをみて、よく理解していなかった歌波も、  
だんだん気分がはれてきた。

心の奥底、どこかにのこっていたもやもや。  
そして、気まずさ。

それが少しずつだが、なくなってきた……

今よりもっと、

この人たちと仲良くなれそう、そんな気がして、  
微笑みかけてみた。

「どしたの歌波？ニヤニヤして」

「えー？ニヤニヤしてないよ？」

クスクス、クスクスと……

その笑い声は、廊下にまで響いていた。

13 - 5 , それは深夜

春日崎真夜は、夜のまちを一人、歩く。

クリスマスのイルミネーションが綺麗。

こんな日は、彼氏と二人で夜遅くまで・・・

そんな夢を抱いている女子は意外と多いのかもしれない。

でも、私は独りでいい。

今はだれとも話したくない。

光をみていると、遠き日を思い出す。

幼少のころ、家族につれられて、夜のクリスマスを歩いたときのこと。

小学生のころ、友達と遅くまで遊んで、両親に叱られたこと。

そして、父親に包丁を突きつけられたときに見た、外の光。

楽しいこともつらいことも

すべて思い出させてくれる光。

それが、私は好きで 嫌いだった。

「もうこんな時間だし、送るよ」

「今日は涉の家にとまりたい 駄目？」

「え？家 誰もいないけど・・・ 大丈夫かな」

そんな会話がきこえてくる。

異様に声のトーンが高い。

もしかして小学生だろうか？

かつての私みたいに、両親にたっぷり叱られるのかな  
今のうちにその愛情を受け止めれたら いいのよね

そんなことを考えていると 聞きたくなかった名前が鼓膜に響いた。

「麗ちゃんいないの？」

「今日は友達の家に行ったよ」

聞き間違いであることを願いながら、そちらを見ると  
その小学生の顔は 呼ばれた名前の主と瓜二つだった。

「そっか ねえ、いいでしょ？行きたい」

「ああ、うん いいよ」

あれが 雨宮さんの弟？

しかも彼女連れ

言われてみると、どこか雰囲気かいていて、  
でも、こちらのほうがずっと社交的だ。

ふと、彼女のほうと目があつた。

そらすにそらせない真剣なまなざし。

戸惑っていると、話しかけられた。

「お姉さん、どこかで会ったことあります？」

あるはずがない

あるはずが

・・・ない、よつな あるよつな

なんだろう、この面影。

どこか懐かしい

「あ、やっぱり気のせいですよね ごめんなさい！」  
そういって、彼女は渉と駆けて行った。

その途中、ひっぱられながら渉が振り向く。

私のことをわかるとしたら、おそらく弟くんのほうなんだけど  
不思議そうな顔、してる。

雨宮さんて

自分のまわりの人はなしとか  
兄弟にするのかな

・・・しないとと思うから

多分私のこと、弟くんはしらないはず

いや

しってる

そうだ、病院で

雨宮さんが横にいた あのと  
お兄さんも弟くんも いたんだ

直接話したことはなかったけど

最低でも背景としてうつってるはずだから、

どこかで見たことある顔・・・程度には覚えてもらってるのかも  
しれない。

だから

かな？

まあ別に忘れてていいんだけどさ

「あれ、春日崎先輩じゃない？」

「え？！うそ、何でこんなところでひとりで？」

次にきこえてきたのは、そんな会話。

振り向く気はない。

聞こえないふりをしていたほうが、いろいろ知れて得だから。

「え、誰それ？同じ部活？」

「えっ？！知らないの？！部活は一緒じゃないけど」

「私は同じ図書委員だよ、委員長さんだし」

どうやら三人いるようだ。

雨宮さんなら顔をみれば名前がでてくるのだろうが、

私は同じ委員会さえ全員一致させていない。

というか、覚える気がない。

だって 私、委員会なんて いい子ぶってるだけ だし

「容姿端麗、スポーツ万能！おまけにこの間の定期テストでは学年2位！」

「あ、そっか 1位は会長か」

笑わせないで

「すごいね！じゃあやっぱモテモテなのかな？」

「うーん でも噂によると あ、あくまでも噂なんだけど

あの先輩 案外性格ブスらしいよ」

それが正解

性格なんて、物心つく前から悪いのよ  
嫌われ役なんてお手の物

「でもさ、どちらかという省会長のほうが凄くない？

運動神経もかなりいいらしいし、何より眉目秀麗だし」

「一時期噂になった『神の彫刻』だね！私ちゃんとあのアングエルから会長みたことないのに」

「変態かつ」

そうね

完璧すぎる雨宮さんとは ちがうのね

私はあんな人気も 慈悲も

頭脳も 容姿も

もちあわせてなんて いないの

でも

私は自分自身が一番ならそれでいい

自分を好きになれればそれでいい

いつか

自分を好きになれれば

終わりよければ すべてよし

だから

今年のクリスマスは自分と楽しむ

人生に絶望していたけれど

いろいろ思い知らされて

やっぱり私は私でいたって思った

だから

だから

今日くらい 羽を広げさせてほしかった

14 - 1 , 一月一日

空桜は張り切っていた。

かばんについているのは、クリスマス会でのプレゼント交換で手に入れたストラップ。

そしてその服装は、初めて着る赤い着物。

行き先は勿論神社。そう、初詣。

あの夜から一週間がたち、今は冬休み真っ最中。

次は元日に神社で、という約束を交わしてわかれた。

新年早々友達に会える。

それは、張り切っている理由の一つでもあった。

「空桜ちゃん！」

神社が見えてきたころ、声がかげられた。  
可愛い着物の歌波だった。

「初夢どうだった？」

「え？初夢？初夢って、今日見るものじゃないの？」

「え？そうなの？」

「そこは解釈の違いじゃないのかしら？」

空桜でも歌波でもない声が混じった。

その声は、そのまま二人の横を通り過ぎていく。

「委員長……？」

「うん、春日崎先輩……だね」

顔を見合わす二人。

そこに、しぐれが飛び込んできた。

「おっはよー！」

「うわあ、おはようしぐー」

「着物可愛いねー」

「えへへーありがとう 二人も可愛いよ」

「そうかな？」

さつきより楽しくなった。

「あとはうららんだけかな？」

「そうだねー！まだ集合時間10分前だし」

腕時計を見るしぐれ。

あたりを見回す空桜。

歌波はというと…

「どうかしたの？」

「えっ」

神社の石段を見つめて、上の空。

声をかけてようやく我に返る。

「別になんでもない」

歌波は笑って誤魔化した。

「それにしても、校内で見たことある人ばっか。やっぱ近所の神社だもん、乙時雨生多いんだね。」

鳥居の前までついたところで、一旦立ち止まり、境内にいる女子高生たちをみて、つぶやく。

「刃流生も多いよー」

「私全然わかんないや。家族連れも多いみたいだけど、何故か人間観察がはじまる。」

「女子高生、家族連れ、と来たら、あとはー？」

「カップルっ?!あ!」

絶妙なタイミングで、一組のカップルが三人の目に留まった。向こうもこちらに気付いたようで、手をふってくる。

それは言うまでもなく、あの二人だ。

「先輩たちいいなー しぐもリア充したーい」

「えっ意外！」

「なんで?! 恋愛に興味ないようにみえる?!」

そこからまた会話が展開する。

歌波が時計を確認する。時刻は待ち合わせ時間ちょうど。

それでも麗はまだこない。

しばらくすると、待ち人に瓜二つな人がやって来た。

「涉くんとお兄さん! おはようございます!」

元気よく挨拶する空桜。

しぐれと歌波は、二人が来ていて麗が来ないことに対して疑問を抱く。

「ああ、おはよう。って、あれ、麗は一緒じゃないのか」

「え? ああ、もう待ち合わせの時間すぎてるんですけどねー」

「え? 姉ちゃん、俺たちが起きた頃にはもう家出てたけど」

クエスチョンマークがそれぞれの頭上に展開する。

発される言葉もなく、沈黙がその場を埋め尽くす。

つまり…

麗は朝はやくに家をでて、それで今、ここではないどこかにいるということになる。

それが何を意味するのか、誰にもわからない。

「あ、あれじゃない、初日の出見に行ったとか」

しぐれの考えは、妥当に思えた。

だが、真意を知る者は勿論いない。空気は濁ったままである。

「うららんで…意外とロマンチストなのかな」

「どうだろう」

場の流れをかえようと空桜が発言するが、それは兄弟にもわからない

いことだった。

「どうする？しばらく待ってみる？」

お互いに顔を見合わせる。

「私、待とうかな」

歌波が遠慮がちにいった。

「じゃああたしも。」

「そうだね、じゃーしぐも！お兄ちゃんたちどうする？」

一瞬間があいてから、

「じゃあ、待つよ。いいよな、涉」

全員で待つことになった。

結局、いつまでたっても

麗が来ることはなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8667h/>

---

キヲクノハテ

2011年12月16日00時48分発行